

俺が原初の神？
…………え？（凍結）

総司

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

目を覚ますと俺は見知らぬ空間にいた。

「お主は原初の神の転生した姿なんじゃ」

そんな事を急に言われ俺は？を浮かべるしかなかった

目次

俺が原初の神の転生した姿?.....マ	
ジで?	1
オリ主設定	10
原作前	
転生したけど凄く昔でした	14
あれ?俺って原作が始まる前から原作	
ブレイクしてね?	32
旧校舎のディアボロス	
原作が始まったよ♪え、早い?気に	
しない気にしない♪でも、この世界のり	
アスは.....	46
無能王との会合か、めんどくさいな	60
原作ブレイク?やってやろうじゃん	70
今思ったんだけど、半殺してどこま	
でならOKなんだろう?	88
戦闘校舎のフェニックス	
取り合えず、正気に戻れ主人公!	101
焼き鳥か.....やべ、焼き鳥食いたく	
なってきた	106
なんか修行することになったぜ	119

おい、ちよつとまてええええ！

125

焼つき鳥♪焼つき鳥♪前編

131

焼つき鳥♪焼つき鳥♪後編

146

月光校庭のエクスカリバー

優奈、お前はやっぱり憎んでるんだな

156

聖剣が盗まれたあ、優奈の問題の次は

聖剣かよ……

163

やべ、……イリナとゼノヴィア、……魔

改造だわ……それとこれは予想外だ

175

お前の憎しみを少しでも和らげてやる

よ

コカビエルが動き出したか、……無能

188

王は邪魔だなあ

201

バルパー、話ナゲョ

207

さて、俺を怒らせたバカな墮天使を

ぶつ飛ばすか

219

さてと、俺の正体を話すとしますか

239

停止教室のヴァンパイア

そういや授業参観があつたな

249

無能王、お前自分の立場理解してんの

か？

271

会談してしていると時間長く感じるよな

キノ……いつそんなの作ったんだ？そ

して、忘れられた相手にご愁傷さま

288

タイトルが思い浮かばない……

297

俺が原初の神の転生した姿？……………マジで？

「……………ん」

あれ？どこだここ？

なんでこんな真つ白な空間にいるんだらう？

「お、ようやく目が覚めたか」

俺の後ろに見知らぬじいさんがいた。

「じいさん、ここはどこだ？」

「ここは神のみが立ち入る事のできる空間じゃ

髪？

俺は自分の髪を触ってみた。

「その髪じゃない！神じゃ神！」

俺は今度は懐から紙を出した。

「はい、紙」

「そうそう、丁度字を書く紙が欲しかったんじゃ」

「それは良かった」

「て、違う!髪でも紙でもなく神様の神じゃ!」

怒られてしまった。

「てか、神様?」

「?をつけるでない」

「で、その神様が俺になんのように?それにこの空間が神様しか立ち入る事が出来ないならなんで俺はこの空間に居ることが出来るんだ?」

「それは、お主が原初の神の転生した姿じゃからじゃ」

「?」

原初の神?ってなんだ?

「原初の神はあらゆる世界そして、あらゆる神を生み出した神じゃ」

「つまり、その原初の神ってのが初めて誕生した神様って事?」

「うむ、その解釈で間違つたらん」

「ようするに世界最強?」

「世界最強じゃな、原初の神に勝てる者は存在せん」

「その世界最強の神様が俺となんの関係があるんだ?それに俺が転生した姿って?」

「うむ、それはのう、原初の神は世界を創り、そしてワシらを生み出し、そして、あるシステムを創つたんじゃ」

「システム？」

「お主らの世界に漫画、アニメ、小説等があるじゃろ」

「あるな」

「そういった二次元の物を人間たちの意思、ようは実際にこんな世界が会ったらいいなってゆう気持ちが一定量溜まればその世界が生まれるシステムじゃ」

「ちよつと待て、それじゃあ世界が何百いや何千、何万つてあることになるぞ」

「その通りじゃ、そしてもう一つシステムを創ったんじゃ」

「もう一つのシステム？」

「それは、その世界を監視する神を生み出すシステムじゃ」

「それって、神もそれだけの人数が存在するってこと？」

「まあ、一つの世界につき神が一人つてもキツいから一つの世界に複数の神が存在するがな」

「へー、でも、それと俺が原初の神の転生した姿つてのと一切繋がらないんだけど」

「話は最後まで聞かんか」

「スミマセン」

「それでの、ファイアナさまがのう「ちよつと待て」なんじやい」

「ファイアナさまって誰だ？」

「言わんかったっけ? 原初の神の名前じゃよ」

「一回も言っていないよ!」

「おお、すまんかった、それでフィアナさまが『私が創ったシステムがあるし私もういないよね!』とか言ってるのう」

おいおい、神様が自分の事をいらないとかゆうなよ。

「そしてフィアナさまは『いろんな世界を見てくるね〜』って言ったんじやが」

なにかミスしたな、フィアナさま。

「間違えて転生のシステムを使用しちゃったんじやよ」

案外ドジだな、フィアナさま。

「しかもこの、容姿や力はそのままで記憶や性格を完璧に消すシステムを使ってもて
の」

「ちよつと待て! それが俺だってゆうなら、この女みたいな容姿はそのフィアナさまの
容姿か!」

「うむ、そうじゃ、ちなみにフィアナさまは女性じゃよ」

「なんで性別変わってんだよ! この容姿のせいで俺、男に告白やナンパされたんだぞ!」

俺は思わず泣き叫んだ。

「落ち着くのじゃ! 空間が揺れとる、このままじゃこの空間が消滅してしまう」

俺は神様のじいさんに宥められ落ち着いた。

「取り乱してごめんなさい。」

「落ち着いてくれて助かったわ（まさか、泣き叫ぶだけでこの空間が消滅しかけるとわ、コントロール出来てないぶん一度暴走するとかなり危険じゃな）」

「それで、なんで俺はこの空間に呼ばれたんだ？」

「それはのう、フィアナさまの力が少しずつじゃがお主の体から漏れ始めたんじゃ？」

「最近お主の世界は天変地異が多いじゃろ」

「ああ、ここ最近やたらと多かったけど？」

「それはお主の体から漏れたフィアナさまの力に世界が耐えきれなくなり起きてたんじゃ、このままほっといたらあの世界は消えとった」

「え？つまり天変地異の原因は俺ってこと？」

「ま、そうなるの」

まじかよ。

「それでワシら神で話し合ってるの、存在を原初の神に戻そうとの話になったんじゃ」
「それは俺の記憶や人格はどうなる？」

「そのまんまじゃよ、存在が人間から原初の神になるだけじゃ」

「もし、俺がこのままがいいって言ったらどうなる?」

「お主の体と魂は力に負けて消滅する、さっきので消滅しなかったのはこの空間にいたからじゃ」

「そっか、分かった、俺をその原初の神にしてくれ」

「決断早いの」

「親は俺が子供の頃に二人とも亡くなってるとし、俺、親戚からもよく思われてないしな」

「分かった」

「でも、頼みがある」

「なんじゃ?」

「俺がいた世界で俺に関しての事は全部消してくれ」

「つまりお主がいた記憶等を全て消せばいいのか」

「ああ」

「悲しくないのか?」

「そりゃあ寂しいし悲しいよ、でも、あいつら結構いいやつらだからさ、俺がいなくなったら悲しむと思うんだよ」

「分かった………これでお主に関しての事は全て消した」

「ありがとう」

「では、お主を原初の神の姿に戻すぞ」

じいさんがそう言ったあと、俺の体が光だし光がおさまると……………

「なんで髪が金髪になってんだ！」

そう、髪が金髪になっていた、そして背中には一対二枚の翼が生えていた。

「髪はファイアナさまが金髪だったからじゃな」

「じゃあ、この翼は？」

「神になったから生えたんじゃない、お主がまだ力をコントロール出来てないから二枚しかないがのう」

「つまり、コントロール出来れば増えていくと」

「ま、そうじゃのう」

最大で何枚になるんだ？

「あ、ちなみに今のお主はファイアナさまの全力の一割の数百万分の一ぐらいじゃの」
マジですか、たったそれだけ。

「百年ほど修行をしたらハイスクールD×Dの世界に行ってもらおうからの」

「え！なんで！」

「いろんな世界に行つて経験をつんでもらわんと」

「わかった」

〳百年後〵

「調子はどうじゃ?」

「お、じいさん」

「随分コントロール出来るようになったのう(いったいどんな修行をしたんじゃ?)」

「いろんな神様が来てくれたからな(女神さましか来なかったけどな)」

今の俺は五対十枚の翼が生えている。

百年ほどで三割以上四割以下までコントロール出来るようになった。

一割コントロール出来る事に一対増えると思ったけど違った。

力に関しては修行を手伝ってくれた女神さまと協力して封印をかけた、俺の実力が上がればそのぶんだけ開放されるようにしたからコントロール出来ない量の力の開放は
することが出来ない。

てか、力が強力すぎるよ一割の半分以下で世界をいくつか消滅させれるんだけど。

「それじゃあ早速ハイスクールD×Dの世界に行ってもらおうかの」
「そういうえぼそうだった、原作知識なんてほとんど残って無いぞ。
覚えてるのはキャラの名前ぐらいだし。」

「では、送るぞ」

「ちよつと待て、その手に掴んでる紐はなんだ？」

「では、行ってこい」

グイ↑紐を引つ張る音

パカツ↑足下が開く音

「うわあああああああああ」

俺はじいさんに落とされた。

「あ、ミスってしもうた」

「なにをミスしたんだあああああああ」

俺は最後にじいさんのミスをしたと聞いて叫びながら落ちていった。

オリ主設定

オリ主設定

名前

霧瀬和那 きりせかずな

原初の神としての名前

フィアナ

種族

原初の神↓転生して人間↓原初の神

容姿

GGOのキリト

性別

男

設定

初めて誕生した神様であり、あらゆる世界、あらゆる神を生み出した神。

世界を生み出すシステムとその世界を監視する神を生み出すシステムを創った。暫くの間生まれた世界を見ていた。

システムを創つたんだから別に私がここにいなくても別にいいよね！と結論に至る。そして生まれた神たちに『私が創ったシステムがあるし私もういらないうね！』と、言い、そして、『いろんな世界を見てくるね』と言ったまでは良かったが、ミスって転生をするシステムを使ってしまい、尚且つ容姿や力はそのままで記憶や性格を完璧に消すシステムを使ってしまった。

転生してからはこの容姿を気にしており、よく男から告白やナンパをされた。

容姿がそのままのため髪はサラサラでくびれたりしている。

子供の頃は良かったが中学生になる頃には自分の体つきでorzになったの言うまでもない。

中性的な声をしている。

もとは高校三年生だった。

アダ名としてクラスの男子や女子からキリカかキリナと呼ばれていた。

学園祭の時は必ずメイド服などの女装をさせられていた。

上半身裸を見た男子が鼻血を出したため、体育の授業で着替える時はいつも別の教室で着替えていた。

プールの時もまたしかり、そのため上にパーカーを着ていた。

クラスで容姿関係なく話してくれる友達がおり、原初の神になるときにその世界から自分に関することを全て消してもらった。

原初の神の力を少しでも開放すると髪と瞳の色が金色になるが、普段の髪と瞳の色は黒である。

原初の神の姿になっても性別は男のまま。

初めは一对二枚の翼であったが百年間の間に五対十枚にまで翼が増えた。

翼は見えないようにすることも可能。

現在コントロール出来る力は三割以上四割以下までコントロール出来る。

正直なところ話をしていった神様のじいさんは百年間の間に一割の力をコントロール出来れば十分だと考えていた。

本人の意外な才能と他の女神さまが手伝ったことによりじいさんの予想以上の成果をだした。

一割の半分以下の力で複数の世界を消し去る力がある。

手伝ってくれた女神さまと協力してコントロール出来ないぶんの力は使えないように封印をかけている。

そのためコントロール出来ない力は使えないが、本人の実力が上がればそのぶんだけ

開放されるようにした。

ハイスクールD×Dの世界では原初の神の存在は誰も見たことがないためおとぎ話のような存在になっている。

能力

全知全能

シンプルだが全知全能のためなんでも出来る。

魔力や神力等の力は無限である。

原初の神であるため不老不死である。

原作前

転生したけど凄く昔でした

どうも皆さんこんにちは、原初の神になった和那です。

じいさんに転生させられたのは良いけど、今現在冥界の空から地面に落ちてる途中で
す。

「うわあああああああああ」

ちよ、地面がどんどん近くなってる。

「は、そうだ飛ばばいいんじゃない」

だが、気付いた時には既に遅く……

ドオオオオオオオオ

「いった〜」

俺は地面に落ちた。

「「「「!?」」」」」

俺の隣には拘束された銀髪の女性、そして、周りを囲うように男達がいた。

あれ？なんかヤバイ？

「貴様コイツの仲間か？」

「しかし金髪の美少女か、胸は残念だが今拘束してるコイツと同じように奴隷にしてみようか」

「ギャハハ、賛成だなあ」

「貴様ら、暴動を起こした理由を問い質すことも忘れるな」

「お前だつて奴隷にすることに賛成だつたじゃねえか」

まともな奴は一人もいないのか。

それに金髪の美少女？あ！翼は見えないようにしてるけど髪の毛は金髪のままだった。

あと、力は……かなり抑えてるからコイツら平気なのか？

「貴女、空から降つてきた理由は知らないけど、今すぐここから逃げなさい！」

銀髪の人はまともだ。

しかし、コイツら黒い翼が生えてるしコイツらが悪魔か？

「ねえ、一つ聞いてもいい？」

「質問よりも先に逃げなさい！」

「大丈夫だよ。」

それで質問ね、キミはなにか悪いことをしたから拘束されてるの？」

「それは……」

「貴様らなに二人で話会ってんだ！」

「別に良いじゃん、まともなのは彼女だけなんだから」

「話す必要なんてないだろう、貴様ら二人とも今から俺らの奴隷になるんだからよ」

奴隷になんかなりたくねえ……

コイツら全員倒すか。

ほんの少し、本当にチヨビット力を開放する。

勿論隣にいる彼女には向けない、周りにいるコイツら限定だ。

「[[[[[!?!]]]]」

「なんだコイツ」

「魔王とは比べ物にならねえ」

「なんでコイツから強大な魔力を感じるんだよ」

「ア、アヒヤアヒヤヒヤヒヤヒヤ」

「狂ってる場合じゃないぞ」

悪魔つて光に弱いんだよな、『全知全能』でそう出たし。

……光の代わりに魔力でいいか。

「バイバイ」(・・▽・) / ~ ~

そして、魔力の固まりを悪魔にぶつける。

ズガガガガ

「「「ぐがあああああ」」」

お掃除終了〜

「「「.....」」」 チーン

でも殺してないよ、骨を砕いただけだし。

治るかは知らないけど。

「大丈夫？」

「あ、ありがとうございます」

彼女の拘束は男達が気絶すると消えた。

「あの、貴女はいつたい」

「あのね、キミは俺のことを貴女って言うけどさ、俺は男だからね」

「.....え？」

「だから俺は女じゃなくて男」

「本当ですか？」

「本当です」

「……………」

あ、固まった。

く少しお待ちください

「失礼を言ってすみませんでした」

「別に良いよ、女に勘違いされるのは毎度のことだから」

勘違いされるより男に告白される方がキツイ。

「助けてくれてありがとうございます、私の名前はグレイファイア・ルキフグスです」

俺はなんて自己紹介しようかな？原初の神って言っても悪魔だから信じてもらえるか分からないし……

お、良いこと思いついた。

「俺はなんでも出来るがモットーの人外、キリカだ」

「キリカさまですか」

「そ、処でなんで拘束されてたのか聞いてもいい？」

「分かりました、助けてもらいましたし。

今は新魔王派と旧魔王派が争っているのです」

「新魔王派と旧魔王派？」

「新魔王派は平和と種の繁栄を望み、旧魔王派は魔王の血筋が魔王になるべきと考えて

います。

そして、旧魔王派は新魔王派をよく思わない悪魔が多くて、それで争いになったので
す」

なる、つまり今の魔王は魔王の血筋じゃないのか。

「グレイファイアは新・旧どっち？」

「私達は旧魔王派にいました」

「私達？」

「私と姉さんは同じ悪魔同士が争う必要はないと思いい仲裁をしようとしたのですがさっきの悪魔達に襲われ姉さんとはぐれてしまいました」

あれ？グレイファイアに姉なんていたっけ？

名前しか覚えてないけどいなかっただ筈。

「誰かこちらに近付いてる」

「新魔王派でしょうか」

「いや、グレイファイアに似た感じがする」

遠くから銀髪の女性が……………

「グレイファイア！」

「姉さん！」

……えん？顔とか全く同じなんですけど。

「よかった、グレイフィアが無事で」

「姉さんも無事でよかったです」

「あのく、この人がグレイフィアの言ってたお姉さん？」

「あら、グレイフィア、この女性は？」

「新魔王派に拘束された私を助けてもらいました」

「そう、グレイフィアを助けてくれてありがとう。」

私はサクヤ・ルキフグスよ」

「俺はなんでも出来るがモットーの人外、キリカだ。」

「それと、グレイフィアにも言ったが俺は女じゃなくて男だからね」

「……………えん？」

「またですか。」

「く少しお待ちください」

「あ、サクヤが正気に戻った。」

「固まってごめんなさい」

「グレイフィアも同じ反応したよね」

「普通は同じ反応をすると思いますが」

「ま、そこは置いていて。」

「この争いを止めたいんでしょ？」

「ええ、出来れば止めさせたいわ」

「なら俺が現魔王がいるとこまで連れて行くよ」

「転移魔法ですか？」

「いんや」

「じゃあ、どうするとゆうの？」

「人外を侮つちや駄目だよ」

「「え？」」

「現魔王がいる邸」

「「こんにちは」」

「!？」

「君が現魔王？」

「そうだよ、私が現魔王のサーゼクス・ルシファアだ」

「ビンゴ！」

「なにかようかな？」

「ようがあるのは俺じゃなくて後ろの二人」

「私はサクヤ・ルキフグスです」

「私は妹のグレイフィア・ルキフグスです」

「ルキフグス？なら君達は旧魔王派だね」

俺が聞くのも悪いし部屋の壁に凭れとこうかな。

く会話中く

「そうかい、ならこちらも手を打とう」

「ありがとうございます」

「ん、話終わった？」

「終わりました」

「そっか、なら俺はこれで退散させてもらうよ」

「あの、また会えますか？」

「きつとまた会えるよ」

ナデナデ

グレイフィアの頭を撫でながら微笑む。

「は、はい」／／／／／／

「それじゃーねー」

それじゃあこの邸の外に行くかな。

「冥界のどこか」

おう、なんか変な処に来たな。

適当にやっっちゃ駄目だね。

『ワシの声が聞こえるか？』

『お、じいさん』

『ようやく通じたわい』

『ようやく？』

『なかなかお主に繋がらなくての』

『ちようどいいや、聞きたい事があるんだ』

『ワシも言いたい事がある』

『じいさんから先にどうぞ』

『助かる、ワシがミスをしてもうたと言ったじゃろ』

『ああ』

『そのせいでのお、お主が入るところは冥界で尚且つ原作が始まるずっと昔なんじゃ』

『やっぱり原作が始まるよりも昔か』

『うむ、本来なら原作が始まる少し前に送り駒王学園に転入する予定じゃったのじゃが』

『本来なら原作が始まる少し前の予定だったの？』

『うむ』

『それじゃ、次はこっちの質問な』

『分かった』

『グレイフィアに姉がいたんだけとき、本来なら姉はいないよね？』

『それに関してはのう、世界は一つじゃないって事じゃ』

『パラレルワールドみたいなもの？』

『そんな感じじゃな、原作キャラが女性から男になってたり男性から女性になってたりしてる可能性がある』

『なーる』

『大まかな流れは原作と同じじゃから心配せんでも良いぞ』

原作なんて覚えてないけどね。

『分かった』

『うむ、では、……………サラバジャ！』

『どここの忍者ですか！……………て、切れてる〜』

原作までどうしようか。

そうだ、この世界の最強に会いに行こう♪

「次元の狭間」

「おーここが次元の狭間かーなんにもないな。」

「そこを退け（く）！」

「え？」

「なんで魔力の固まりが俺に受かって来てるんだ？」

「ドオオオオオオオオオオ」

「問答無用で攻撃ですか？それとも俺が来るタイミングが悪かったのかな？」

「なぜ今の一撃を喰らって生きている！」

「おまえなに？普通なら今ので跡形もなく消えてる」

「それは後から教えてやるよ」

一割の半分の半分ほどの力をドラゴンの二匹にぶつける。

「!？」

動かなくなっちゃった。

しかも凄く冷や汗かいて震えてるし、ふむ、この世界の最強は一割の半分の半分ほどの力……つまり一割の四分の一の力で動けなくなると。

「さて、我等が悪かった、話し合おう！」

「だからその力を消して」

この世界最強の二匹が冷や汗を流して一人の男にお願いしてるよ、これ凄い光景じゃない？

「それじゃあ話し合おうか、でもその前に人の姿になれるならなって欲しいんだけど」
首が痛くなつて来るし。

「分かった」

赤いドラゴンの方の人の姿は整った顔立ちに真紅の髪は腰まで長く、体はでるところはでて引つ込むところは引つ込んでる、ようするにボンツキキュボン！てやつだね。

てか、スタイル良すぎない！

黒いドラゴンの方は、ゴスロリの格好をした幼女でした、原作と同じ姿だね。

真紅の髪をしてる方がグレートレッドでゴスロリの格好をしてる方がオーフィスつ

て事だよな。

俺も男である以上グレートレッドの方に視線が行っちゃうんだけど。

「我、姿変える」

え？オーフィスは姿を変えてグレートレッドと同じ位のスタイルになった。

それに合わせて身長も伸びてるし。

二人とも女性としては高めの170手前位かな？

ちなみに俺の身長は170あるかないかです。

つまり俺の身長と二人の身長は同じぐらいなんですよ！ちよつとショック。

力のコントロールをするのを手伝ってくれた女神さまの話だと転生する前の身長は

150〜160位だったそうなの。

身長が同じじゃなくて良かった！てマジで思った瞬間でした。

「それじゃ、自己紹介しようか」

「我はグレートレッドだ。」

「夢幻の真龍と呼ばれてる」

「我はオーフィス。」

「無限の龍神と呼ばれてる」

「俺はなんでも出来るがモットーの人外、キリカ」

「いくら人外だと言っても我等以上の力をもつ存在なんて聞いたことがないぞ」

「それにキリ力から神力を感じる、人外でも神力なんてありえない」

「あれ？神力漏れてる？」

「気付けるやつは我等ぐらいだろうがな」

「本当の正体はなに？」

二人からの視線が凄い。

「はあ、分かった言うよ」

俺は翼を見えるようにして、一割ほど力を開放した。

影響が出ないように俺らの周りに結界を張ったから次元の狭間が消滅なんて事は起

こらない。

「俺の正体は原初の神ファイアナだ」

「!?!」

冷や汗だつらだら

……………美人の冷や汗なんて見てて良いもんじゃないな。

俺は力の開放を止めた。

「……………原初の神か、おとぎ話の存在だと思っていたが」

「……………我等以上の力、納得出来る」

「あ、ちなみに今の一割ぐらいな」

「!？」

おく凄くビックリしてるな〜

まあ、今ので一割って言われたらな〜

「処でさ、なんで俺攻撃されたの？」

「我とオフィスが戦ってる時に間に入ってきた」

……俺の来るタイミングが悪かったんですね。

「なんで二人は戦ってるの？同じドラゴンなんだから仲良くすればいい」

「我はここで泳ぎ回りたい」

「我はここで静寂をえたい」

グレートレッドは泳ぎ回りたいくて、オフィスは静寂をえたいねえ。

静寂って寂しくない？

良いこと思いついた♪

「それじゃ、三人でここに暮らして見ないか」

「我はここで泳ぎ回りたいと言っただろ」

「我は静寂をえたい、グレートレッドがいたら今までと代わらない」

「別に今まで通り泳ぎ回れば良いさ、ただし、オフィスが静寂をえたいらしいし時間制

にさせてもらうけど。

それに静寂ってことは一人でいるって事だろ。

そんなの寂しいだけだし。

だから暫く三人で暮らして見ようぜ？

もしそれでも駄目なら俺が新しく次元の狭間を創ってやる」

「それなら、新しく創った方が早いんじゃないか」

「三人で暮らして見る事に意味がある。

もしどちらかがいなくなればこの広い空間にただ一人、寂しいだけだと思うしな。

それに案外楽しいかも知れないぜ」

「……分かった」

ちよつと間が会ったけどまあ言いか。

それじゃ、この空間で過ごすのに家を創るか。

あれ?俺って原作が始まる前から原作ブレイクしてね?

どうも皆さん原初の神の和那です。

この世界に来てかなりの時間が経ちました。

どれくらい時間が経ったかは分からないけどね。

次元の狭間にいたら時間の経過なんて分からないし。

ま、この間じいさんから『あと十年程で原作が始まるぞい』って言われたから少なくとも百年は経過してると思う。

予想で百年の間に会った事はグレートレッドとオーフィスに名前をつけたり、一人の悪魔の精神を崩壊させたり、グレートレッドとオーフィスに告白されて『神使(しんし)』にしたり、そのあとに二人に襲われたり(意味深)力を四割ちよいコントロール出来るようになったりといろいろ会った。

グレートレッドにはコーティ、オーフィスにはキノとつけました。

だって、グレートレッドって女性につける名前じゃないでしょう。

で、コーティって名前をつけたあとにオーフィスがコーティにズルイって言ったので

キノとつけました。

………俺がいた世界にそんな名前をしたキャラの小説が会った気がするけど
気のせいだよな。

告白されたあとに考えると、オーフィスの反応って嫉妬だよな。

悪魔の精神崩壊はねえ、冥界で買物してる時に声をかけられてね、それだけならいいんだけど、なんかいきなり我の下僕に、そして愛人にしてやるとか言ってきたね。

それだけならいいんだけどさー、なんかいろいろとヤバイことしてる悪魔みたいでさ、記憶を覗くとヤバイ事がでるわでるわ、それで誰もいない場所に連れて行って特大の殺気と威圧感を向けると、あーら不思議、精神が崩壊してしまったとき。

その悪魔が後にどうなったかなんて知らないけどね♪

あ、そうそうヤバイ事してるかどうかなんて目を見ると大抵分かるようになった。

コーティとキノの二人に告白された時に『神使』にしたし、最初はなんて名付けようか悩んだけどシンプルに『神の使い』で『神使』にした、『神使』にしたあとにコントロールの手伝いの修行に付き合ってもらったり。

二人に襲われたあとにやり返したら二人が『見せられないよ』状態になったけどね。

コーティとキノの二人はこの世界では最強なのにさらに強くなったね、今の二人の實力は俺の一割の三分の一よりかは弱いけど、一割の四分の一よりかは強い、少なくとも

この世界を滅ぼせる力になっちゃった。

四割ちよいの力をコントロール出来るようになったら、翼の数が七対十四枚になった。

あれ、いつきに二対も増えちゃった(´・`・；

おまけになんか翼が白かったのに金色になっちゃたし。

てな事がありました。

で、今俺は人間界に来ています。

冥界は何回もいつたり来たりしてるけどさ、人間界って一回も行っていない事に気が付いて散歩感覚で来ています。

お！神社があるじゃん♪

姫島神社か、行ってみるかな♪

神様が神社巡りか、別に構わないよな。

とか思ってた事がありました。

なんで神社で人が殺されかけてるの！

子供が一人と子供を庇うように大人の女性が一人、子供の方は堕天使の気配がする。

でも、人間の気配もするから、ハーフかな？

それに、二人とも巫女の服を着てる、逃げて来たんじゃないかって、この神社の巫女か。

で、二人を殺そうとしてるやつは黒い服を着て刀を持った男が五人、五人が持つてる刀は妖刀の類いだな。

殺される前に助けますか。

少し力を開放してつと、髪と瞳の色が金色になるから以外と同一人物つて気付かれな
い。

なんで気付かないんだろう？

「悪いが二人とも死んでもらうぞ」

男の一人が二人を殺そうと妖刀を降り下ろす。

「神社で人殺しは良くないぜ」

降り下ろされた妖刀を俺は人差し指と中指の二本で挟んで止める。

これも白刃取りになるのかな？

「貴様、何者だ」

「通りすがりの人外さん♪」

「人外だろ？が見られたからには貴様も生きて帰さん」

「血気盛んだねえ〜」

パキーン

俺は妖刀を折る。

「な!この妖刀を容易く折るだど!」

思ったよりナマクラだな、この妖刀。

「く、こいつを全員で殺せ!」

「遅いな」

「「「なに?」」」」

俺は縄を創り五人を縛り上げる。

この縄は俺特性であらゆる力を無効にして、しかも全身の力も抜けてしまう。

子供がいる前で殺しなんて出来ないし。

「なぜ……立って……いら……れない」

「さあ、なんでだろうね〜♪」

「朱璃、朱乃!」

墮天使が二人こっちに向かって来た。

朱璃、朱乃?確かこの神社の名前は姫島神社。

あれ、姫島?もしかして姫島朱璃と姫島朱乃?

つまりこれって原作ブレイク!

「お前が朱璃と朱乃を襲ったのか!」

「落ちつけバラキエル。」

頭に血が上って冷静な対処が出来てないぞ」

「だがな、アザゼル！」

墮天使の総監督と幹部来たー！

「どう見ても二人を襲ったのはその縛られてる五人で金髪の彼女は二人を助けてるじゃねえか」

「そうだな、取り乱してすまない」

「いえいえ、気にしないで結構です」

「しかし、姉ちゃんかなり出来るな」

「そうかな？」

しかし、墮天使の総監督と幹部か、友好関係を気付いたら後から楽かな？

「それじゃあ、自己紹介をする？」

墮天使の総監督と幹部さん」

俺は自分とアザゼルとバラキエルをある空間に連れていく。

「!?」

「なんだこの空間は」

「ここは俺が創った空間だよ」

「お前が創った空間だと？」

「それじゃあ、自己紹介だ。」

俺は原初の神ファイアナ」

「おいおい、冗談を言っちゃあいけないぜ、原初の神ファイアナなんておとぎ話の域だ、誰も会ったことないんじゃないか」

言葉だけじゃ信じられないよな、だから俺は七対十四枚の翼を見せて力もある程度開放する。

一割よりかは少ないけど。

「!?!」

「どう、信じた?」

「……こんな力を見せられたら信じるしかないだろう。」

グレートレッドとオーフェイスが可愛く見えるぜ」

「……これが原初の神の力か。」

次元が違うな」

力の開放を止めてっと。

「じゃ、あらためて自己紹介だ。」

俺は原初の神ファイアナ」

「俺はアザゼルだ。」

「墮天使の総監督をしている」

「俺はバラキエル。」

「墮天使の幹部だ」

「これから仲良くしようぜ」

「寧ろこちらからお願いたいくらいだ」

俺とアザゼルは握手をした。

「ちなみに二人から見たら俺、男と女どっちに見える？」

「一人称が俺の女だろ？」

「俺もアザゼルと同じ意見だ」

「俺の性別は男だからな」

「……………」

俺を一目で男と判断してくれるのは誰だろうな？

「アザゼルーバラキエルー起きろー」

俺はアザゼルとバラキエルの二人を揺する。

「……………は！すまねえ、あまりの事に動揺が隠せなかった」

「……………アザゼル、今のは誰だっけそうなる」

「それじゃ、神社に帰すぞ」

「あ、ああ頼む」

「今度酒持ってそっちに行くからさ」

「おお、マジか楽しみに待ってるぜ」

「じゃあな〜」

俺はアザゼルとバラキエルの二人を神社に送った。

俺?もう少し人間界を見て回りたいから別の所に転移ですがなにか?

あ!朱璃と朱乃の二人と一切話してねえ。

てか、ほとんど声すら聴いてなくね?

あと、朱乃って子供の頃からSなのかな?

原作はSだった気がするんだけどなー。

ま、いいか♪

どこかの公園

取り会えず人間の気配がないところに転移したら公園に着いちやつた。

「にや」

?公園のどこからか猫の鳴き声がする。

猫だから人間扱いじゃない?

「にやあ」

でも、なんか弱々しいな。

どこからか聞こえるんだろう?

く猫探索中

お、いた♪

黒猫と白猫か、二匹とも妖怪かな?

怪我はしてないな、少し衰弱してるけど。

そのまんま連れていくと消滅しちゃうし、結界張って連れていくか。

「次元の狭間の家に帰宅」

「ただいま」

「お帰り」

二人とも結構フレンドリーになっちゃいました。

「和那その猫どうした？」

「人間界の公園で拾った」

「その猫少し衰弱してる」

「ああ、そうなん『きゆるるー』」

「……………」

「あれ、お腹すいてるだけ？」

「そうみたいだな」

「和那、なにか作る？」

「そうだな、軽くなにか作るか」

お粥から始めた方がいいかな？

……うん、お粥から始めよう。

〈料理中〉

「ほら、お粥出来たぞ、人の姿の方が食べやすいだろうし、人の姿になりなよ」

俺が二匹の猫にそう言うのと、二匹とも人間の姿になった。

「ヤツパリ気付かれてたにゃ」

「いつから気付いてたんですか？」

「公園で見付けた時から♪」

「最初からかにゃ」

「ま、そんな話は置いといて、取り会えず食べなよ。」

あ、お粥から食べてね」

俺が作った料理はお粥と簡単に作れる物だ。

肉の類いは入れてないけど。

「なにこれ、お粥なのに凄く美味しいにゃ」

「はい、こんなに美味しいお粥食べたことありません」

「米や水に拘ればお粥だつて美味しく作れるさ」

二人はどんどん料理を食べていく、途中から無口になっていったけど。

「「ちそうさま(にゃ)」」

「お粗末さま」

「なんで衰弱するまでなにも食べてなかったんだ？」

「にやはは、それは……」

「姉様が財布をなくしまして」

「し、白音」

「……………白音？」

あれ、どこかで聞き覚えが。

い、いや、そんなことはないはず。

「あ、取り会えず自己紹介をしよう。」

俺は霧瀬和那」

「私は黒歌にや」

「私は妹の白音です」

ヤツパリだったー。

しかも、黒歌から悪魔の気配がしない、つまり黒歌は転生悪魔になってないし！

もしかして転生悪魔になる前なのか？

……………俺が精神崩壊させた悪魔が黒歌の主になる悪魔だったとか言わないよな？

「……………財布をなくしたって、家族は？」

「親は二人とも亡くなってるにや」

「それから姉様と二人で生きて来ました、でも……」

「にや、にやはは、私が財布をどこかで落としちゃって」

「それから数日の間にも食べてません」

ど、ドンマイ。

「じゃあ、住むところないのか？」

「ないにや」

「じゃあ、ここに住むか？」

「でも、迷惑になりませんか」

「迷惑になんてならないよ、だろ、コーテイ、キノ」

「我は構わない」

「我も構わない、家族が増えるのはいいこと」

「じゃ、決まりだな、よろしくな黒歌、白音」

「じゃ、じゃあ、お願いするにや」

「お願いします」

家に黒歌と白音の二人が住むことになりました。

旧校舎のディアボロス

原作が始まったよ～♪え、早い?気にしない気にしない♪でも、この世界のリアスは……………

黒歌と白音の二人も新しく家族に向かえ十年程がたち、俺、コーティ、キノ、黒歌は駒王学園の二年生、白音は一年生だ。

なんでコーティとキノがいるのかって?二人が行きたいって言ったんだよ。

学校に少し興味が出たみたい、俺達が学校の話をしてたからかな?

ドラゴンや妖怪の気配?それぐらい普通に消せるよ。

それと時間がとんだって?たいした事はしてないからな。

十年間で会った事と言えばじいさんから金色になった翼の説明、黒歌と白音に俺達の正体がバレル、黒歌と白音を『神使』にしたり、黒歌と白音が発情期に入り襲われたり、聖剣計画の子供たち(木場は既に悪魔になっていた為に除く)を助けたり、その子達をオーデイーンに預けたり、天界に聖剣計画についてお話(殴り込み)に行ったり、魔界

のテレビに一回出たり、魔王(サーゼクス)と再会したり、……忘れてたアザゼルとサーゼクスと飲み仲間になったり、あ、もちろんアザゼルとサーゼクスは会わせてないぞ？
会わせても問題ないと思うがまあ、なんとなくだ。

……………ヤッパリ今会わせるのはまずいかな？

……さらつと今あげた事の説明いくか。

まずは翼についてのじいさんの説明だな。

『おお、四割の力をコントロール出来るようになったか、では翼の説明をするぞい。

一枚ずつに特殊な武器があるのじゃ、一つは貫いた者を消滅させる槍だったり、斬つた者の存在を消滅させる剣だったり、その辺は自分で確認してくれ』

とか言われてな、それで確認してみたんだよ。

使うには翼から羽を一枚抜き取ればその武器に形が変化する、羽を一枚抜き取っても新しい羽が生えるから翼が無くなる事なんてない、そしてチートな武器ばかりだった。

それと勘違いしないでほしい、けっして翼一枚を根元から抜いてる訳じゃない。

そして、翼一枚につきだから今使えるチート武器は十四個だな。

槍の説明は簡単だ、腕にしる脚にしる貫けば消滅させる。

剣は槍以上に酷い、存在事態が消滅するからな、槍の場合は消滅してもそいつがこの世界にいたと認識される、ようは記憶等に残るわけだ、だが剣の場合は斬られた者の存

在事態が消滅、つまり記憶等からも消える、初めから存在していない扱いにだ、ヤバイだろ?

他にもあるが他の説明は省かせてくれ、俺の精神が持たない。

てかさ、なぜこんな武器を創ったんだろう?

俺の存在事態がチートみたいなもの。

黒歌と白音にした俺達の正体がバレた時の説明は後にさせてくれ。

『神使』や発情期はその言葉の通りだよ。

聖剣計画の子供たちや天界にお話をしにいった時については後に語る事になるだろうから今は我慢してくれ。

言える事は天界とも今は友好関係だな、ま、俺神様だし。

テレビ出演はなあ、魔法少女?だったか、その敵幹部役の一人が怪我で出れなかったんだよ、ちょうど冥界に散歩に来て俺が魔王の一人セラフォル・レヴィアタンに見つかってな、連れて行かれたんだ。

そんときにスタツフに土下座されてな嫌だと言えなかつたんだよ。

案の定女に勘違いされたがな。

最近は勘違いされたならそのままでもいいかな?なんて考えるようになった。

あれか、二百年生きて悟りを開いちゃったかな?

そんな悟り開きたくねえ！

それでな、タイミング悪く？サーゼクスが来たんだよ、そのあとにグレモリー家に連れて行かれたんだよ。

くそう、幹部キャラが金髪じゃなかったら気付かれなかったかもしれないのに。

まあ、グレイフィアとサクヤの二人にも会えたのは嬉しいんだけどな、ハッキリ言うて百年以上会ってなかったから説教されました。

説教の後に百年以上たつてるのに歳をとつてないとか聞かれたけどな。

普通説教の方が後にするもんじゃね？と思うのは俺だけか？

そういえば、グレイフィアってサーゼクスと結婚してるのかな？サクヤがいるからどっちが結婚してるか分からないんだよな、こんど会ったら聞いてみよ♪

あれ？意外といろんな事が起きてる？

それと黒歌と白音の俺達の正体がバレた時の話が抜けてるって？

……………す、スマナイそれについては思い出させないでくれるか。ブルブルブル

「和那、いきなり震えだしてどうした？」

「……コーティ、いや、なに黒歌と白音に俺達の正体がバレた時の事を思い出したんだ」ブルブルブル

「……………」ブルブルブル

俺、コーティ、キノの三人が震える、あれは俺達にとってトラウマだ。

一言だけ言おう、白い魔王が降臨なされた、しかも二人だしな、そしてハッキリ言う、あの怖さは半端ねえ。

「ほら、三人とも震えてないでお弁当食べるにや」

「和那兄さま早く食べましょう」

「お、おう」

今は昼休み、屋上で昼ごはんを食べてる最中だ。

「それにしてもドライグが悪魔になっていたな」

そう、今日イツセーが悪魔になって登校してきた、つまり原作開始だ。

「ドライグ、無能王に従う、かわいそう」

リアス・グレモリー＝無能王（コーティ、キノ命名）

なぜ無能王かって？俺達が駒王学園に入学するのに二年ほど前からこの街に暮らしてるんだが、その二年間で百人以上のはぐれ悪魔を倒した。

黒歌と白音の修行の相手は俺達だからさ、最初は俺達以外のやつとの戦いを経験するのにちょうどいいと思ったんだが、一年経つても二年経つても俺達に気付いた様子がないんだよ、もし気付いてて放つといてるのなら大物、気付いてないのなら無能王とコー

ティとキノが言っていた。

無能王って言い過ぎじゃね？と思ってたんだけど、最近になって自分達以外にはぐれ悪魔を倒してるやつがいると分かったみたいでな、ああ、無能王決定かよと理解した瞬間だった。

それに二年の間にはぐれ悪魔百人以上だぞ！普通こんなに来ないだろ！ようは舐められてるだよな。

それに倒したはぐれ悪魔の八割く九割は人を喰うタイプのはぐれ悪魔だったしな。

放つといったら気が付くだろうが、それだと関係のない人間が殺されたり喰われたりするから倒してる。

あれかねえ、魔王の妹である私の領地にはぐれ悪魔なんて普通は来ない、なんて考えてるのかねえ。

本当ならイツセーも助けたかったんだか、主人公であるイツセーが悪魔にならないとこの世界がどうなるか分からないからいんだよな、悪魔にならなくても話は進むだろうけどな、正直な話イツセーには悪いが悪魔になってもらった。

すまん、イツセー。

てかさあ、ちゃんとリアス・グレモリーがこの場所をちゃんと管理出来たら原作のじてんでイツセーが悪魔になることはなかったんだよ。

あと最近思ったんだけど悪魔ってさ、この場所を管理とか言ってるけど日本の神様に許可とってんのかね?

それと自宅でイツセーが悪魔になる瞬間を空間を繋げて見てたんだが、「死にそうね。傷は……へえ、おもしろいことになってるじゃないの。そう、あなたがねえ……本当、おもしろいわ」興味ありげな含み笑いながらさあ、「どうせ死ぬなら、私が拾ってあげるわ。あなたの命。私のために生きなさい」とか言ってたよ。

あれは少しぶん殴りに行きたくなくなったよ、どうせ死ぬなら私が拾ってあげるだど?命を拾う代わりに私のために生きなさいだど?ふざけんなよ、お前がちゃんと場所を管理して、神器持ちに事情を説明してればこんな事にはなつてねえんだよ!

あれ?それって日本の神様にも言えちやう?

おっと、話がそれてるな、思い出すのはこれぐらいにしとこう、イラついて殺気を出しちまう。

「和那く、リアス・グレモリーに接触するのかにや?」

「和那兄さまの話だとこれからいろんな出来事があるんですよね」

「まあな、イツセーの神器は赤龍帝の籠手だしな、いろいろとあるだろうな」

「我はあんな無能王に従いたくないぞ」

「我も同感、無能王に従うなんて時間の無駄」

「接触するかどうかは今考え中」

本ならリアス・グレモリーと関わりたくない。

でも、アーシア、ゼノヴィア、ロスヴァイセの三人をリアス・グレモリーの眷属にしたら伸びるものも伸びなくなるだろうしな。

主人公であるイツセーを悪魔にしたし他のメンバーはリアス・グレモリーの眷属にしなくても問題ないだろう……多分。

本当は朱乃、木場の二人も眷属になつて欲しくなかつたけど、既に眷属になつたあとだしな。

木場の場合は悪魔になるのしようがないと思うけどさ、朱乃はなんで眷属になつてんだ？朱璃は生きてるのに。

原作がどんななんだつたかなんて覚えてないが、グレイフィアやイツセーの性格とかに変化は見られない、つまりリアス・グレモリーもあまり変化してないだろう。

つまり原作のリアス・グレモリーもあんななのか。

生徒会のソーナ・シトリーは結構いい感じなんだけどな。

少なくともリアス・グレモリーよりも王としての才能がある。

こんな考えになるのは原作よりも前に来たからかもな。

でも、じいさんには感謝しないとな、原作前に来たからな二年間リアス・グレモリー

を近くで見ることが出来た。

アイツには従いたくない。

てか、いちいちリアス・グレモリーってゆうのもあれだなあ、無能王にするか?

キーンコーンカーンコーン

「あ、早く教室に戻ろう」

「「「はーい(にゃ)」」」

く教室く

さて、俺達はイツセーと同じクラスだ、そして俺の席は包围されている。

なぜかって?キノが窓際の一番後の席、キノの前が俺、俺の右隣が黒歌、俺の前がコーティ、な、完璧に包围されているだろ?

ついでに学園にいる時の名前は全員が霧瀬を名のとてる。

コーティとキノは違和感があるが気にしないでくれ。

「数日後」

え？数日の間なにしてたって？適当に過ごしてたよ。

イツセーは自分の体の変化を気にしてたけどな。

そりやそうだよな勝手に悪魔にされてるんだから、まあ、悪魔になってるなんてまだわかってないんだけど。

イツセーはよく眷属になる道を選んだな、勝手に悪魔にされたのに。

俺がイツセーの立場なら取り合えず全力で顔面をぶん殴る。

女だろうが関係ねえ！

そしてイツセーよ、そんなにハーレムを築きたかったのか？

でだ、俺は今墮天使からイツセーを守ってる。

なぜかって？夜に散歩してる時にイツセーが殺されかけてるのを見付けたんだよ。

もう悪魔になってんだから助けても問題ないだろう。

「イツセー大丈夫か？」

「き、霧瀬!」

「貴様何者だ?」

「なんでも出来るがモットーの人外さん♪」

「人外つてなんだよ!それにコイツはなんなんだよ!」

「それは無のUゲフンゲフン、リアス・グレモリーにでも聞くことだ。

さて墮天使さん、イツセーは俺の同級生なんだよね、やめてもらえないかな?」

ほんの少くし墮天使に殺気を送る。

「!なんだこの殺気は!」

「で、やめてくれるの?くれないの?」

「その子に触れないでちょうだい」

ああ、リアス・グレモリー=無能王(確定)が来ちゃったよ。

「……紅い髪……グレモリー家の者か……」

グレモリー家つてだけたけどな。

だって、プライドと実力が釣り合っていないもん。

「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう、墮ちた天使さん。この子にちよつかいを出すな

ら、容赦しないわ」

そんな事を言うならもつと早くに来いよ無能王、俺が近くにいなかったら光の槍が

イツセーの腹を貫いてるぞ。

「……ふふつ。これはこれは。その者はそちらの眷属か。この町もそちらの縄張りというわけだな。まあいい。今日のことは詫びよう。だが、下僕は放し飼いにしないことだ。私のような者が散歩がてらに狩ってしまうかもしれないぞ？」

「ご忠告痛み入るわ。この町は私の管轄なの。私の邪魔をしたら、そのときは容赦なくやらせてもらうわ」

管轄ならちやんとやれつての、出来てないからこんなことが起きてんだろ、あと日本の神様に許可とつたのか？

「その台詞、そっくりそちらえ返そう、グレモリー家の次期当主よ。我が名はドーナシーク。再び見えないことを願う」

あれ？俺空気になつてる？

まあいいや、この間に無能王から離れよう。

「ちよつと貴女待ちなさい」

なんで無能王に呼び止められなくちやなんないんだよ。

「チツ、なんですか、無のUゲフンゲフン、リアス・グレモリー」

「貴女何者なの？」

「説明するつもりはない」

後で無能王がなにか言ってるがスルーして俺は家に帰った。

～自宅～

「ただいま～」

「「「お帰り～(にや)」」」

「少し遅かったな、どうした?」

「ん?散歩の途中でイツセーが墮天使に襲われてたから助けた」

「ドライグ、数日の間に二回も墮天使に襲われてる」

「それで、そのあとに無能王がやって来た、軽く無視したけど」

「それって、明日の放課後辺りに眷属を送って説明しなさい!とか言っつきそうにや」
「和那兄さまはいろんな意味で有名ですからね、すぐに見付けると思います。」

それで見付けられなければ、リアス先輩は駄目ですな」

そうなんだよな、男に告白されたり、着替えてる時に男子が鼻血をだしたり、プールの会った時は女子と男子の鼻血でプールを真っ赤に染めたり、七大大姉さまに入れられたり、学園の美人は？で必ず四位以内に入ったり等々。

七大大姉さまは、俺、コーテイ、キノ、黒歌、無能王、朱乃、木場の七人だ。

木場が女性だったよ。

学園の美人は？だと、上位四人は必ず、俺、コーテイ、キノ、黒歌で埋る。

なんで俺がはいってんだよ！

それと白音はかわいいマスコットキャラです。

はあ、無能王と話すのか、面倒だな。

無能王との会合か、めんどくさいな

今は俺が無能王と接触？して翌日の放課後だ。

朝、登校してるときに無能王が学園の廊下の窓から俺達を見ていた。

さすがの無能王でも同じ学園にいるんだから気付くか。

「和那、無能王が来ないんだが」

「我、早く帰りたい」

「別に帰ってもいいんだぞ？接触？したのは俺だけなんだから」

「和那だけだと殴りそうで心配だからついてくにゃ」

「和那兄さまはリアス先輩をあまりよく思ってますんから、……私や姉さまですが」

「心配性だな、さすがに殴らないよ……………多分」

さすがに殴りにいかないよ

……………多分な。

「や。どうも、イツセーくんと和那くんはいるかな？」

やっとなるか。

「リアス・グレモリー先輩の使いで来たんだ」

「……OK OK、で、俺はどうしたらいい？」

「私についてきてほしいんだけど。」

和那くんも構わないかな？」

「別に構わないが、コーティ達もついてくるぞ」

「彼女達は……」

「事情を知ってるから問題ない」

「分かったよそれじゃあ行こう」

木場に連れられて向かう先は旧校舎だ。

無能王と話し合いか、本当めんどくせえ。

「ここに部長がいるんだよ」

戸にかけられたプレートにはこう書かれていた『オカルト研究部』悪魔がオカルト研究ねえ、しょうもね。

「部長、連れてきました」

「ええ、入ってちょうだい」

室内には床、壁、天井に魔界の文字が記されている。

そして、中央に転移の為の魔方陣、俺達が思った事はただ一つ。

「[[[[趣味悪]]]]」

黒歌が語尾ににやをつけ忘れる程に趣味が悪い。

俺達を呼んだ無能王本人はどこにいるんだ？

シャワー。

部屋の奥からシャワーの音がするんだが？

俺達を呼んでおいて無能王本人はシャワーをしてるとか言わねえよな。

「部長、これを」

「ありがとう、朱乃」

マジであり得ねえ、人を呼んでおいてシャワーをしてるとかマジであり得ねえ。

大事な事だから二回言ったぞ。

「あらあら。はじめまして、私、姫島朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを」

「こ、これはどうも。兵藤一誠です。こ、こちらこそ、はじめまして！」

俺達は挨拶しないのかつて？めんどくさい。

「これで全員揃ったわね。兵藤一誠くん。いえ、イツセー、霧瀬和那くん」

「は、はい」

「私たち、オカルト研究部はあなたたちを歓迎するわ」

「え、ああ、はい」

「悪魔としてね」

ハア、頭可笑しいんじゃないの？人を勝手に悪魔にしといて、そしていきなり悪魔として歓迎するねえ、頭可笑しいんじゃないの？

これも大事だから二回言ったぞ。

「めんどいから話が終わったら起こして」

「二」分かった（にや）（分かりました）「三」

正直な話、話を聞くのがめんどいから俺は寝ることにした。

くしばらくお待ちください

「和那、起きろ」

「……………ん？話終わったのか？」

「ああ、我らの事を話せとうるさくてな」

俺はコーティに起こされ目を開けた。

ちなみに今の状況は、俺はコーティに膝枕されていて、俺の上にキノと白音、右半分にキノ左半分に白音が抱きつくように乗ってる。

黒歌？鼻から愛とゆうなの赤い物を出しながら俺と白音の写真を撮ってる。

だいたい、俺が昼寝をするとこんな感じだ、みんながじゃんけんをして、勝った者から好きなポジションに行く、つまり最後に残るのは写真を撮るポジションが大概最後に残る、今回は黒歌が最後まで残ったのか。

写真を撮るのが最後に残る理由？好きな確度から写真を撮るのもいいが、それだと俺に触れられないからだ。

「キノ、白音下りてもらえるかな？起き上がれない」

「分かった（分かりました）」

「それで単刀直入に聞くわ、あなたなものなの？」

「ただの一般生徒」

「ふざけないで！昨日あなたが出した殺気はただ者じゃないわ！」

「じゃあ、ただの人外」

「じゃあつてあなた、それにあなたでしょう。」

「二週間程前からはぐれ悪魔を狩ってるのは」

俺は聞き間違いかと思いきみんなに念話をした。

てか、この世界に念話がないんだよな、だからみんなに教えた。

『なあ、今の俺の聞き間違いか？』

『私の耳には、はぐれ悪魔を狩ってるのが二週間程前だと聞こえたが？』

『私もそう聞こえた、最近気づいたと思っただけ』

『和那とコーティとキノが言ってる無能王って間違ってる気がしてきたにや』

『そうですね、姉さま、まさか二年近くしてるのに気づいたのが二週間程前とは』

無能もここまで来ると凄いな。

面倒だし認めて話を進めるか、さっさと帰りたい。

「確かにはぐれ悪魔を狩ってるのは俺達だけど」

「やっぱりあなた達ね……………あなた達ですって？」

「ここにいる俺の大切な人達の事だが？」

「そんな、私の予想では一人だと思っただのに」

訂正、俺の目の前にいる無能王は俺達の予想の遥か斜めにいる存在のようだ。

『和那、私の目の前にいる無能王は我らの予想の遥か斜めにいる存在のようなんだが？』

『ああ、俺もビックリしてる、まさか複数で行動してると予想してなかったとはな』

『無能王が予想の遥か斜めすぎて和那が墓穴をほった』

『う、だってさあ、普通は複数で行動するのも予想の範囲にいれるだろ』

『ま、そうだけどね、これは私もビックリだにや』

『この人がグレモリー家の次期当主なんて信じられなくなりました』

白音、それに関しては俺も同感だ。

大丈夫か？グレモリー家。

「それは置いときましょう、あなた達は誰に断りを得て、私の領地ではぐれ悪魔を狩ったのかしら」

「サーゼクスだけど」

「お兄様ですって！私わそんなの聞いてないわよ！」

そりゃあ、言わないように頼んだし。

この町ではぐれ悪魔を初めて狩る時にサーゼクスに連絡をいれた。

勝手にはぐれ悪魔を狩って面倒ごとになるかも知れないし。

ちなみに無能王に狩ってる事を伝えないように頼んだのは俺だ、無能王を見極める前に接触するってのものな。

「ふざけないで！」

「和那がふざけてるのかどうかは直接聞けばいいだろう？無のU……」

俺はコーティが無能王と言う前に口を塞いだ。

『和那、なにをする』

『こんな場所で無能王とか言うな。

俺は今のところ悪魔を敵に回すつもりはないぞ』

サーゼクスは面白い奴だしな。

『しかしな、一度キツパリと言った方がいいだろう』

『激しく同感だが今は我慢してくれ』

『……………分かった、今は我慢しよう』

『ありがとう、コーティ』

「信じられないなら、サーゼクスに連絡をいれるがいいさ、リアス・グレモリー」

「……………分かったわ」

無能王はサーゼクスに連絡をいれるために少し放れた。

『コーティ、よく我慢した』

『和那に頼まれたからな』

『本当ごめんなコーティ』

「お兄様に確認をとったわ、事実みたいね」

「そりやどうも」

「なら、あなた達私の眷属にならない？」

はぐれ悪魔を狩ってるじてんであなた達がそれなりの実力があることが予想出来る

もの」

「眷属にだど?」

「ええ、悪魔になれば永遠に近い寿命を得るわよ。

それに上級悪魔になれば自分の眷属を持つことも出来るわ」

コイツマジで言ってるのか?

それとサーゼクス、俺達を眷属に出来ないとか伝えてないのか?

一番戦いの経験が少ない白音がサーゼクスの全力の一撃を仙術なしで、それも素手で弾き返せるのに。

「無理無理、お前程度の実力じゃ俺達五人誰も眷属になんて出来ねえよ」

「あなた、私をバカにしているの」

無能王の顔から青筋が出てるが関係ねえ。

「事実を言ったまでさ、お前程度の実力じゃ俺達の足下にも及ばねえ。」

悪いけど俺達はこんな悪趣味の部活に入るつもりはないし。

お前の眷属になるつもりもない。

もし、俺達の監視がしたいなら、この部屋に来るだけはしてやるよ。

話はこれで終わりだな、みんな帰ろうか。」

「そうだな、帰らせてもらおうぞリアス・グレモリー」

「俺達は帰るぞ、リアス・グレモリー」

俺達は無能王を放つといて家に帰った。

原作ブレイク?やっつてやろうじゃん

無能王との接触?から数日俺達はオカルト研究部に顔だけは出してる。

数日の間に自己紹介をしたな。

こんな感じで。

「俺は霧瀬和那、大切な者は家族、嫌いな者は家族を傷つけるやつ、利用するやつ、あと一つあるけどそれは置いてこう」

「私は霧瀬コーテイ、大切な者は和那と家族、嫌いな者は和那と家族を傷つけるやつだ」

「我は霧瀬キノ、コーテイと以下同文」

「私は霧瀬黒歌にや、私も以下同文かにや、でも大切な者に白音を追加にや」

「私は霧瀬白音です、私も以下同文です、ですが大切な者に姉さまを追加です」

この時、俺を傷つけられるやつはどんなやつだろうと考えたのは余談だ。

「俺は兵藤一誠、イツセーと呼んでくれ!夢はハーレム王になることだ!」

「僕は木場優奈、霧瀬くんたちと同じ二年生だよ、よろしくね」

「うふふ、私は姫島朱乃ですわ、三年生でいちおう研究部の副部長も兼任しております」
「そして、わた」「」「興味ないから喋らなくていい（にや）（です）」「」「……」

てな感じで自己紹介をした。

あの時の無能王の顔は凄かったな、青筋がたつて、凄く睨んで来てたけど俺達は気にも止めなかった。

そして、深夜にも顔を出してやるかって事で深夜にも一応顔だししてる。

深夜だからコーティ達は家に帰って休んでも良いって言ったんだがな、コーティ達に押しきられた。

夜ふかしすると肌が荒れるから心配なんだけどな。

俺は男だから気にしないけど、コーティ達は女性だから気になると思うんだけどな、………いや、『神使』だから肌荒れとかはしないかな？

ドラゴンや妖怪とは全く違う存在だし。

それと無能王からこんなこと言われたけど全員却下した。

「さあ、あなた達も契約を取りに行ってもらおうわ」

「は？お前なに言ってるんの？バカなの？死ぬの？じゃあ死ねば」

「リアス・グレモリー、勘違いするな、我らは仕方なくいるのであって、リアス・グレモリーの手伝いをするつもりは全くない」

「リアス・グレモリーは我らの主にでもなったつもり？」

「そうにや、私達の主はあとにも先にも和那だけだにや」

「そうですよ、それに私達は悪魔じゃありませんので、悪魔の契約を取りに行けと言われる意味が分かりません」

「一二よって、悪魔の契約を取りに行く理由がない（にや）（理由がありません）一二」

キツパリと断った！NOと言える日本人を目指しますから！

………俺って、神様だけど一応日本人で良いよな？

まあ、そのあとはイツセーがチラシ配りに行ったり、魔力が少なすぎて、転移出来なかったりした。

あの時は思わず吹き出してしまった。

それと数日の間に分かったことは無能王はイツセーの『神器』が『赤龍帝の籠手』だったことに気づいてないってこと。

『兵士』の駒の消費量で可笑しいと思わないのかねえ？

さすが無能王、その名はだてじゃない！

まあ、思い出すのはこれぐらいにして、今俺の目の前にはシスターが顔面から転けていた。

「キミ大丈夫か？」

「あうう。なんで転んでしまうんでしようか……ああ、すみません。ありがとうございます。ますうう」

なんだろう、ドジッ娘な感じがする。

あ！風でヴェールが飛んでいく、俺はそのヴェールを手を伸ばしてキャッチする。

「はい、ヴェール返すね」

「あ、ありがとうございます」

あれ？もしかしてアーシア？

「あ、あの……どうしたんですか……？」

俺が無言なのを気にしてか恐らくアーシアであろう女性が俺の顔を覗き込んでくる。

「い、いやなんでもないよ」

「そうなんですか?」

「ああ、処でシスターみたいだけど、この町になにかよう?」

「はい、この町の教会に今日赴任しました……あなたもこの町の方なんですよね。これからよろしく願います」

この町の教会って今は使われてなかったよな?

それに、教会に赴任するんならミカエル達からなにか連絡が会ってもいいと思うんだけど……それにここは一応悪魔の領地だし。

普通はそんな所にシスターを赴任させないはずだ、後で連絡してみるか。

「この町に来てから困っていたんです。その……私って、日本語はうまくしゃべれないので……道に迷ったんですけど、道行く人皆さん言葉が通じなくて……」

日本語をうまくしゃべれないのか、俺は言葉を自動的に変換してくれる魔法を使ってるからいけてるんだな、まあ、この魔法がなくても大抵の言葉は喋れるが。

くうううく

「ん?」

「あううう」

どうやら今の可愛らしい音はアーシアのお腹の音らしい。

「あはは、時間的には昼時だもんな、時間があるならお昼ご馳走しようか?」

「そ、そんな初めて会った人にご馳走してもらうなんて悪いですよ」

「でも、お腹『くううう』……ほら、お腹は早くご飯食べたいってさ」

「あ、あううう、ですけど」

「キミみたいな可愛い娘にせっかく出会ったんだ、そのお礼として、お昼ご馳走させてよ」

なんか俺、ナンパしてるみたいだな。

「か、可愛いって」／／／／／

顔を赤くして照れてる、なんか可愛くてなごむな。

「で、では、その、お願いします」

「了解」

アーシア、ナンパみたいな事をした俺が言うのもあれだけど、もうちよつと警戒しよ。

「取り合えずいつまでもキミって言うのもなんだし、自己紹介をしようか」

「あ、分かりました」

「俺は霧瀬和那よろしく」

「私はアーシア・アルジェントです。」

よろしくお願いします霧瀬さん」

「よろしく、アーシア。」

それと和那って呼んでくれ、そっちの方が呼ばれなれてる」

「はい、和那さん」

やっぱりアーシアか、『神器』の名前なんだっけ？

そんな事を考えてると……

「うわああああん」

「だいじょうぶ、よしくん」

どうやら子供が転んだみたいだな。

アーシアは子供の傍へ近づいていった。

「大丈夫？男の子ならこのぐらいのケガで泣いてはダメですよ」

子供にはちゃんと伝わってないだろうけど、アーシアの表情はやさしさに満ち溢れていた。

子供のケガをした膝へ手のひらをあて、アーシアはケガを治していく、凄く安心する光だな。

「はい、傷はなくなりましたよ。もう大丈夫です」

アーシアは子供の頭をひとなですると、俺のほうへ顔を向ける、子供はケガが治ってスゴいって顔をしてるし、母親はケガが治ってキョトンとしてる。

そりや、いきなりケガが治ったらそうなるよな。

「すみません。つい」

アーシアは俺の方に向き直ってそう言った。

そして母親は子供を連れてそそくさと去っていった。

「ありがとう！お姉ちゃん！」

子供はお礼を言ってるけどアーシアはよくわかってないみたいだな。

「ありがとう、お姉ちゃん、だつてさ」

俺は子供が言った言葉をアーシアに伝えると、アーシアは嬉しそうに微笑んでいた。

「ところで、今のつて『神器』だよな？」

「はい。治癒の力です。神様からいただいた素敵なものなんですよ」

「そうなんだ、……………あ、そう言えばお昼を食べようつて話をしてたんだよな」

「そ、そうでした」

「それじゃ、行こうか。」

ちようど繁華街が近くにあるからね」

「は、はい」

俺はアーシアを連れて繁華街に移動した。

移動してる間、男と女にじろじろ見られたけどな。

「なにか食べたい物ってある?」

「え、えくと、あれってなんですか?」

アーシアの視線の先はハンバーガーシヨップだった。

「ああ、あれはハンバーガーシヨップだよ」

「ハンバーガーシヨップですか?」

「ハンバーガー食べてみる?」

「はい!」

俺はアーシアを連れてハンバーガーシヨップに入った。

俺は自分の注文するハンバーガーは注文し、あとはアーシアが注文すればいいんだが、注文する前にアーシアが「大丈夫です。一人で何とかしてみせます」って言ったんだけどな、俺はうまく日本語が喋れないって言ったことを今さっき思い出した。

アーシアの言葉を伝えやすいようにするかな。

俺はアーシアの言葉が伝わるように店員に魔法をかける。

「え、えーと、チ、チーズバーガーのセットを一つください」

「はい、チーズバーガーのセットですね」

「和那さん、注文出来ました！」

アーシアは俺のほうへ顔を向けて喜んでる。

「すごいじゃないかアーシア」

俺とアーシアは注文したハンバーガーを受け取り席に着いて食べようとするが……

アーシアはハンバーガーをマジマジと見てるが食べようとしな、……食べ方分からないのか。

「アーシア、ハンバーガーはこうやって包み紙を少しずらして食べるんだよ」

「そうやって食べるんですか！」

「ちなみにポテトも手づかみで食べる」

「そんな食べ方があるんですね!」

「アーシアも食べなよ、冷めちゃうよ」

「は、はい」

アーシアはハンバーガーに小さくかぶりついて食べ始める。

……なんだろう、ハムスター見たいで凄く可愛い。

「お、おいしいです!ハンバーガーって美味しいんですね!」

「それは良かった」

「それにしても和那さん、凄く食べるんですね」

そう、俺の前にはてりやきハンバーガーが二つ、半熟たまごを挟んだてりやきハンバーガー、ようはてりたまがセットで二つ、チキンナゲットが二つ置かれている。

なぜてりやきばかりなのかとゆくと、俺はてりやきが大好きだからだ!

正確にはてりやきのソースを使ったてりやき風ハンバーガーだけだな。

「これぐらい食べないと夜までもたないんだよ」

「ず、凄いですね」

アーシア、俺の家ではこれよりも食べる人が三人いるぞ。

コーティとキノは『神使』は置いといて、ドラゴンだから沢山食べるのは分かるけど、

白音は俺より食べるんだよ、あの小さな体のどこに入るんだって位食べるんだよな。

そう言えば、教会にはアーシアの他に誰がいるんだっけ？

確か墮天使が数人いたはずなんだけどな。

とか考えてるとケータイにアザゼルから連絡が入った。

「ごめんアーシア、ちよつと電話がかかってきたから席をたつね」

「あ、分かりました」

念のためにアーシアが見える場所から電話に出る。

ちゃんと回りに誰もいないのも確認してるぞ？

「アザゼル、どうかしたか？」

「ああ、実はな和那がいる場所で下のやつらがなにか企んでるみたいだな」

「その墮天使の名前は？」

「レイナーレ、ミッテルト、カラワーナ、ドーナシークの四人だ」

……………あ！墮天使がアーシアと一緒にいる理由を思い出した！アーシアの『神

器』が目的じゃん！

「アザゼル、俺は今その四人が狙ってる少女と一緒にいる。」

「あいつらはなにを狙ってるんだ？」

「少女の名前はアーシア、そしてシスターでもある。」

『神器』の名前は『聖母の微笑』で今日ここに赴任してきたらしい」

「なに、シスターまで連れてんのかよ！」

「ちよつと待つてろ、ミカエルの奴に確認の連絡を入れる」

「ああ、分かった」

俺は電話を切つて少し待つことにした。

数分後にアザゼルから連絡が入り俺は出ることにした。

「アザゼル、どうだった？」

「ミカエルに確認をとつて見たところその町にシスターは派遣していないときさ。」

それにそのアーシアつて娘は教会じゃ悪魔の怪我を治したことで『魔女』と言われて教会から追放されてるらしい」

「なるほどな、しかもこの町の教会は今使われてないと来てる」

しかもこの町の領地は悪魔が管理してると言つても管理をしているのが無能王だしな、それも墮天使が侵入して来たのに行動を起こすまで気づかない無能っぷり。

「ここまで行動を起こすのにピッタリの場所はないな。」

「つまりレイナール達のはアースアつて娘のもつ『聖母の微笑』が目的つて事だな」

「ああ、確か墮天使の方の技術に『神器』を抜き取る方法が会つたよな？」

「十中八九それが目的だろうな、和那、頼みがあるんだか」

「分かってるよ、その墮天使を潰してくる」

「……こつちで裁くから極力殺すのだけはしないでもらえるか」

「ああ、分かった」

「それとな、出来ればヴァーリに会いに来てやってくれ」

「ヴァーリがどうかしたのか？」

「最近こつちが忙しくてな、『和那に会えない、和那に会えない』って言ってるんだよ。

………しかも昨日さ『忙しくて和那に会いに行けないなら『神の子を見張る者』を潰してでも会いに行こう』って言ってるのを聞いちまったんだよ。

今のヴァーリの実力は俺よりも強いからな、実際に行動されると俺達じゃ止められないんだよ」

そうなんだよな、俺が鍛えたらヴァーリの強さはアザゼルよりも強くなったんだよな。

それにヴァーリにも惚れられて告白もされたし、あ、ちゃんとこの世界のヴァーリは女だから問題ないぞ。

だから決してホモじゃない！

「ああ、分かった、明日墮天使を連れてそつちに行くよ」

「頼む」

そして俺はアザゼルとの連絡を切った。

極力殺すのは駄目ってことは半殺しは良いって事だよな。

アーシアの方に戻るか。

「長いこと電話しててごめんな」

「あ、いえ、気にしないで下さい」

俺は席に座り真面目な顔でアーシアに喋る。

「アーシア、俺は『神器』を持ってないけど堕天使に知り合いがいてな」

「そうなんですか!?!」

「ああ、そいつの話だと下の奴らがコソコソとしてると連絡が会ったんだ、それでそいつに少しアーシアのことを調べてもらったよ」

「……………!?!」

疑ってる感じがするな、急に言われても疑うよな。

「そいつの話だと教会はこの町にシスターを派遣してないらしい」

「……………!?!」

「単刀直入に言わせてもらうよ、その堕天使の目的はアーシアの『神器』だ、そして『神器』を抜かれたら死ぬ、つまりこのまま教会に戻ったらアーシアは『神器』を抜き取られて殺される」

「!?…………そんな」

「アーシアが驚愕の表情を浮かべる、ごめんな、アーシア、でも俺はアーシアを守りたいんだ。」

「そん、な、私は、どうすれ、ば」

「アーシア、俺達は自己紹介をした一緒に飯を食った、俺達はもう友達だ」

「……………え？」

「住むところがないなら俺の家に来ればいい、困った時は助け合うのが友達だ、そして俺はアーシアを守りたいんだ」

「わ、わたし、たち、今日、初め、て会っ、たんです、よ…………」

「今日初めて会ったとか関係ない、友達になるのに初対面だからとか時間なんて関係ないんだ。」

「で、でも、わた、し、日本、語、話せませ、んよ」

「俺が教えてやる」

「それ、に、私、日本の文化、しりま、せんよ」

「アーシアは日本に来て間もないんだろ？」

「それに日本人だって、日本の文化を全てしってる訳じゃない、恥じることなんてないよ」

「それに私、世間知らずです」

「なら、一緒にいろんな所に行こう、初めはこの町から、そして、いろんな所に一緒に行こう」

「私、迷惑かけるかもしれませんよ?」

「ああ、どんどん迷惑をかけてくれ、友達なんだ迷惑をかけるなんて当たり前だ」

アーシアは少し間をあけて。

「私と、友達になってくれますか?」

「ああ、今日から俺達は友達だ!」

「よろしくお願いします和那さん」

「よろしく、アーシア」

俺とアーシアは友達になった。

そして、俺はアーシアを連れて家に帰った。

コーティ達は学校で出来た友達と出掛けて夕方に戻って来るって言うってたからな、今日の夜に教会に殴り込みに行こう。

これが原作ブレイクなんて分かってる、今までに何度もやって来たんだ、まあ、偶然なんだけどな。

今までの偶然とは違い、今回は俺の意思で原作ブレイクをやる。

今思ったんだけど、半殺しってどこまでならOKなんだろう？

さて、アーシアを家に連れて帰って夜になりました。

今俺は教会の前にはいます。

さて、行きますか……………なんでこんなときに携帯がなるんだよ。

誰からだ、アザゼルかな？

……………なんで無能王から電話がくるんだよ、てかなんで俺の携帯の電話番号しってたんだよ！

無能王には教えてねえぞ！

うるさいなでるか。

「なんかようか、リアス・グレモリー？」

「貴方ねえ、電話をかけてるんだからすぐに出なさいよ！」

何様のつもりだよ……………あ、無能王様でしたね。

「で、なにかようか、リアス・グレモリー」

「はぐれ悪魔の討伐依頼が来たわ、貴方達の実力を知りたいから今すぐ部室に来なさい」

「なぜ行く必要がある？ お前に来た依頼だろ？ お前達で片付けろ、俺はやる必要があるんだ、そんなことで連絡をするな」

「貴方誰にそんな事を言ってる………」

俺は面倒になり電話を切った。

コーティ達にも連絡しとくか。

「和那兄さま、どうしたんですか？」

「あ、白音、無能王がなんか電話かけるかも知れないけど断っていいから」

「分かりました、それと無茶しないで下さい」

「あはは、そんなに無茶しないって」

「分かりました」

「うん、それじゃ切るな」

俺は白音との電話を切り、教会の方に視線を向けた。

「それじゃ、殺りますか」

まずは教会の周りに結界をはってと。

結界をはった後に俺は教会の扉を殴り付ける。

ドガアアアアアン

おー、聖堂の扉まで吹っ飛ばしたな。

イケイケゴーゴー。

俺は聖堂まで走って行って……

パチパチパチパチ

「今扉を吹っ飛ばしたのは貴女ですか〜！」

「そうだけど、お前誰？」

「俺のお名前はフリード・セルゼン。」

俺が名乗ったからって貴女が名乗る必要ないですから。

俺に今から殺されるんですから〜！」

なに、このキチガイ。

そして懐から拳銃と柄だけの剣を取りだし光の刃が出現した。

「おお、ビームサーベル！」Σ（―▽―；）

「ビームサーベル？なに言ってるんですか、このビッチは」

「いや、だつてビームサーベルじゃん」

「ビームサーベル、ビームサーベルうるさいなこのビッチが、今すぐ俺にチョンパされ

ちやいなよ！」

フリードもといキチガイは俺に向かって来た。

……拳銃使わねえのかよ！

「さあさあ今すぐ俺にチョンパされちやいなよ！」

俺はキチガイの斬撃を避ける。

「あーもー！ビッチのくせに俺の斬撃避けんじやねーですよ！てめえウザすぎるぞ！」

「いや、チョンパされるよって言われて自分から斬られに行く奴はいないからな」

それに俺からすればお前の方がウザすぎるぞ。

面倒だし終わらせるか。

「さっさと俺にチョンパされろつての」

キチガイがビームサーベル？を降り下ろす瞬間に俺は体を捻り、斬撃を避けながら蹴りをいれる、ようは回し蹴りだ。

俺の回し蹴りはキチガイの鳩尾に命中し。

ドゴオオオオオン

「ЖРЯ МЭ РРЯ ТЕ ШЮ Ю ЧЭЕ」

キチガイは声にならない声を挙げながら教会の壁に飛んでいき。

ドガアアアアアン

教会の壁を破壊して、外に飛んでいった。

死んじやつたかな？

俺は破壊した教会の壁からキチガイを見た。

………あ、生きてる！ゴキブリ並の生命力だな、墮天使を捕まえるまで放つというも大丈夫か。

さてと、墮天使は……地下だな、地下に墮天使の気配と数十人の人間の気配がする。

地下って事は、どこかに地下に行く道があるはずだけど、……探すの面倒だな、床をぶち破るか。

俺は床を殴り付ける。

ドゴオオオオオン

あ、ミスった。

「これじゃ俺も落ちるじゃん！」

俺は破壊した床ごと落ちた。

そして俺は開けた空間で着地をした。

「！！！！！！」

あ、俺メツチャ囲まれてるじゃん。

「貴様、この間公園にいた奴だな」

空中に浮いてる墮天使の一人が俺に言って来た。

確かドーナシックだったっけ？

「他の墮天使は初対面だけどドーナシックは二回目だな」

「貴女、なんのよう？」

「お前達を拘束しに来た人外だよ」

「貴女程度に拘束出来ると思ってるの」

うん、バカにされてるな。

「貴方達、浸入した彼女を殺しなさい」

「「「分かった」」」

はぐれ神父？が一斉に俺に向かってやって来る。

俺は右手を手刀と同じようにし、右手に魔力を集め放出する。

これが意味する事は、右手に魔力で出来た刃を作り出すのと同じだ。

そして俺は一步も動かず回転する。

ずばばばばばば

「「「ぐああああああ」」」

神父達は上半身と下半身を分離させられ、苦しんでいる。

出血多量で死ぬのも時間の問題だな。

「さ、神父達は全員倒したぜ」

「少しはやるようね」

「悪いがここから先も俺の一方通行だ！」

俺は空間を歪め、そこから刀を取り出す。

みためは色が全て黒以外は普通の刀だが、これは俺が作った刀だ、普通の刀の訳がない。

俺はドーナシークの背後に回り込み、刀を振り上げ一刀両断する。

ズバツ！

「ぐあああああああ」

「「ドーナシーク！」」

ドーナシークは悲鳴をあげ、レイナーレ達はドーナシークの方に視線を向けた。

「はあ、はあ、なぜだ、俺は斬られたはず、斬られた感覚も痛みもあつた、なのになぜ俺は生きている？」

そりゃあ謎だよな、一刀両断されたのに怪我がないんだから。

「貴様、なにをした」

「普通なら敵に教えないんだが、まあいい、教えてやる。」

この刀はどれだけ斬ろうが体に斬られたあとには残らない、だがな、斬られたという事実がある。

つまり、体に外傷はないが精神にダメージを与える、さあ、お前はどれだけでもつかない？」

俺は説明をしたあと、ドーナシークを遠慮なく斬りつける。

ズバババババババツ！

「ぐがああああああああああ！」

俺がドーナシークを斬りつけてる間レイナーレ達は呆然としていた。

おい!? ドーナシークお前らの仲間だろ！ 助けるよ！

ドサツ

「……………」ビクッビクッビクッビク

あ、やり過ぎた、ドーナシークが白目向けながら痙攣してる。

精神大丈夫かなあ？

「……………」ブルブルブル

おお、レイナーレ達が震えてる。

ちようどいいや、レイナーレ達を今のうちに拘束してつと、そして、空間に入れとこ

う。

ちゃんと武器を入れてる空間とは違う所だぞ？

神父達は消滅させてつと。

それじゃ、帰るかな。

………あ！キチガイ忘れてた。

ま、いいや。

俺は家にかゝえろ♪

「ただいま〜」

「和那、お帰り」

「ただいま、キノ」

あれ？他の皆がない。

「皆は？」

「皆、アジアと話をしてる間に寝た」

ちよーフリーダムだな、おい！

「キノは寝ないのか？」

「今日は我が和那と一緒に寝る番」

「でも俺今血の匂いがするぞ？」

「我気にしない」

少しは気にしよ。

「和那なら血の匂いも簡単に消せる」

まあ、確かに消せるけどな……

「ま、いいか、寝る前に風呂に入らせてもらおうよ」

「我も一緒に入る」

「あれ？先に入らなかったのか？」

「和那と一緒に入りたかった」

「それじゃ、入るか」

「ん、入る」

俺とキノは一緒に風呂に入って、一緒に寝た。

……変な勘ぐりはするなよ？

で、俺は放課後アザゼルに会いに行こうとすると無能王に呼び止められた。

「ちよつと和那、勝手に別行動しないでもらえるかしら？」

「お前、いい加減頭大丈夫か？」

俺はお前の眷属じゃないんだ、お前の命令を聞く必要はない。

そして俺は用事があるんだ、さつさと帰らせてもらう」

「和那待ちなさい！」

知らん知らん、命令を聞く必要はないから止まる必要もない。

さつさとアザゼルのもとに行つて、ヴァーリに会いに行かないとな。

「ちいゝす、アザゼル〜墮天使連れて来たぞ〜」

「おお、和那、助かったぜ」

「処でアザゼル」

「なんだ？」

「ヴァーリの気配がしないんだが？」

「……………」

沈黙はやめろよ！

「…………ヴァーリはどこいった？」

「……………………ヴァーリはなあ、こっちの用事で今はここにいない」

「なんでだよ！俺今日行ってくつて言ったよな！」

「あいつ、いそいでやらなくちゃいけない事を忘れてたんだよ、それで今いそいでやってる」

「いつ帰ってくるんだ？」

「少なくとも数日は帰ってこない」

まじかよ。

そういうえばヴァーリたまにやらなくちゃいけない事を忘れてる事がちよくちよく会ったな。

「はあ、取り合えず今日は帰るわ、レイナーレ達はそちにまかせる」

「ああ、悪かったな、本来なら俺達がやらなくちゃいけない事なのによ」

「悪魔の領地だからな、墮天使がそう易々と入って来ちゃダメだろ」

「確かにな」

「俺は帰るな」

「ああ、今度はヴァーリがいるときにな」

分かってるさ、俺もヴァーリに会いたいんだ。

戦闘校舎のフェニックス

取り合えず、正気に戻れ主人公！

やあ、久しぶりだな、会いたかったぜ、マイハニー！

.....

.....

.....

.....ごめんなさい、冗談です。

あまりにも久しぶりの登場だったのでハッチャケたかったです。

ですのでその振り上げた拳を下ろしてください、真剣（マジ）をお願いします！

真剣と書いて真剣（マジ）のレベルをお願いします。

真剣で拳を下ろしてくれてありがとう。

……………本当に喋るのが久しぶりに感じるよ。

さて、少し話をしようか、最近会った出来事を。

まず一つ目、アーシアも駒王学園に通う事になった、だって一人だけ留守番つてのも寂しいだろ、だからアーシアも駒王学園に通わせる事にした。

アーシアも学園生活を楽しんでるしな。

ん? 入学試験? そんなものサーゼクスに話をしたら入学試験なしでOKだったよ。

それとアーシアは今じゃ友達沢山いるな。

それと無能王がアーシアの事を説明しろ説明しろって五月蠅かったから説明したら、アーシアをなぜか眷属にしようとしやがった。

無能王の考える事は俺には理解出来ねえよ。

ま、でもアーシアには俺が結界張ってるから眷属になんて出来ないけどな!

ま、無能王の話はこれでいいや、問題は我らが主人公イツセーの事だ!

……………なんか、最近俺に向けてくる視線が可笑しいんだよ。

どんな視線かと言うとな、熱のこもった視線なんだよ、好きなやつを見る視線と同じ

やつだ。

それと、今までは余り接触はしてなかったんだけどな、最近やたらと俺に話しかけて来るんだよ。

「和那、一緒に昼飯食べようぜ！」

……………来たよ、しかも『一緒に』をやたらと強調してな……………

一体イツセーになにが起こったんだ？

「悪い、コーティ達と食べる約束してるからスマン」

「…………マジかよ、俺もそれに加わっちゃダメか？」

本当になにが会ったんだイツセーよ、お前はハーレム王になるんだろ？なぜ俺にそんな熱のこもった視線を向けるんだ？お前は女が大好きじゃなかったのか？

「悪い、我慢してくれ、それに松田と元浜がお前を呼んでるぞ」

「マジで、本当に呼んでるよ、ハアツ今回は我慢するか」

「おう、我慢してくれ」

出来れば一生我慢してください！

「みんな、今のうちに教室から離れるぞ！」

「分かったけどアーシアはどうするの？」

「アーシアは友達と食べ始めてる」

「あ、ほんとにや」

俺達は屋上まで走って行った。

イツセー、真剣でお前になにが会ったんだよ

イツセーとのそんなやり取りから数日たった。

なんか無能王の様子が可笑しいがそんなの関係ねえ、今はイツセーの事だ!

なんで俺の好きな食べ物や音楽とかを聞いて来るんだよ。

イツセーは女が大好きであってB○な人じゃないはずだろ?

悪魔になって男が好きになったとか、本当は男が好きで悪魔になって遠慮する必要は
ねえ! つて考えに至ったとかそんなオチじゃないよな?

.....ないよね?

.....誰かそんなことないと言って下さい（ ;▽; ）

焼き鳥か……やべ、焼き鳥食いたくなってきた

「和那、私を抱きなさい」

………勝手に人の家に転移してきてなにを言ってるんだ、この無能王は。

「私の処女を和那に上げるから速くしなさい」

なんでこいつはここまで偉そうなんだよ。

処女を無くしたいんなら木の棒でもバットでも木の杭でもなんでもいいから自分に
ブツサセバいいだろ。

無能王の処女なんか貰っても誰も喜ばねえよ。

それと話が飛んでる気がするから今日一日の大まかな流れを話そう。

朝、学校に行こうとしたらイツセーが家の前にいた。イツセーの家は俺の家の近くな
んだよ………なんで俺はこの家を選んだんだろう………

←

俺達はダツシユでイツセーから逃げる、アーシアはお姫様だっこの状態でだけどな
だってアーシアが走ると転けちゃうもん。

← その時にコーティ達もお姫様だつこをする約束をすることになった。

← イツセーが追いかけてながら俺もしてくれとか俺が逆にしてやるとか言ってきたがスルー。

← 学校にいる間イツセーをどうすればいいか考えるがいい案が思い浮かばない。

(一応思い浮かんだ案

プランA、いつそのこと俺がこの町から姿を消す。この案はコーティ達に却下される。

プランB、俺の姿をイツセーに見えない様にする。だが、この案はイツセーの行動が予測出来ない為却下。

プランC、イツセーの性格、てか人格をエロ坊主にする。この案が最良だろうが、この案もイツセーの行動が予測出来ない為却下。

プランD、いつそのことイツセーを女にしちやえばいいんじゃない？そして、イツセーが女として生まれたと認識させちやえば？by黒歌。それをすれば確実にイツセーは既成事実を狙って来るので却下。)

結論、取り合えずイツセーは放置！

← 部活？んなもん出るわけないだろ！無能王が作ったくだらん部活よりもイツセー対策の方が大事だ！

←

家に帰ったあと俺が創った空間での修行、そのあとに晩飯をコーティと二人で作る。飯は普段俺とコーティ達の誰か一人、つまり二人で作る。

←

みんなで晩飯を食いそして風呂に入る。

←

今日は月に一回あるかないかの一人で寝る日、その時に無能王が俺の部屋に転移してくる。

←

そして、処女をやるとか言ってる無能王。↑今ここ

とか思い出してる間に無能王は服を脱ぎ始めやがった。

なんか無能王が既成事実とか言ってるが関係ない、俺がとる行動はただ一つ。

俺は身体を起き上げらせ、無能王の頭を握り潰したい気持ちを抑えながら驚掴みにす

る。

「和那、なにをするのよ！」

そして俺は部屋の窓を開け……

「勝手に人の部屋に入ってんじやねえー」

「きやあああああああ」

無能王を外に思いつきり投げた。

無能王の悲鳴がドンドン小さくなっていく。

次勝手に入って来たら問答無用で消滅させようか？

てか、なんで俺の所に来てんだよ、イツセーの所に行つとけ。

「さて、無能王がいなくなったし寝るか」

あ、それと無能王が脱いだ服は消し飛ばしたぞ？汚物は消毒じや、ヒヤツハー！つてやつだね。

昨日の夜にそんな事が会ったからか俺は少し寝坊した。

「ごめん、寝坊した」

「大丈夫にや、朝御飯は私と白音で作ってるからソファで待つててにや」

「そうですよ、和那兄さまは毎日作ってくれるんですからたまには休んで下さい」

ああ、昨日の夜の苛つきが消えていく。

「それじゃ、言葉に甘えようかな、それと二人とも」

「なにかにや？」 「なんですか？」

「おはよう」

「おはようにや♪」 「おはようございます♪」

俺は黒歌と白音におはようと言ったあとソファに視線を移した、ソファにはコーティとキノが座ってニユースを見ていた。

アーシアはまだいない所を見ると、まだ寝てるか制服に着替えてる最中かな。

「コーティ、キノ、おはよう」

「おはよう」

「夜中に無能王の気配が現れたがなにか会ったのか？」

コーティが夜中の事を俺に聞いてくる。

「無能王が勝手に俺の部屋に転移してきたから窓から外に思いつきり投げた」

「なるほど」

納得しちゃったよ。

『最初のニュースは今日の夜中に聞こえてきた女性の悲鳴です』

『私もその悲鳴で起こされちゃいましたよ、近所迷惑です』

『近所迷惑の問題ではありませんよ。そして、学者の話だと世界中のいろんな場所で同じ悲鳴が聞こえていたみたいですね。』

そして、一度通りすぎると少ししてから二度三度と現れてるようです』

『悲鳴の原因だと思われる女性を見たと話してる人もいるみたいですね』

『話だとその女性は空を飛んでいた、紅い髪をしていた、服を着ていなかった、下着しか身に付けていなかった、パンツ以外は身に付けていなかった等々ですね』

『学者はその女性がどうやって空を飛んでいたのか、警察ではその女性の身柄を拘束するため動いています』

『誰かその女性の写真を撮っている人がいれば警察に申し出て下さい』

「……………」

うわーお！大事になってるな！

よかったね無能王、お前は世界中で有名人だ！

そして無能王を見た人、凄い動体視力してるな！

それと、無能王は世界を何周したんだろうな、てか、途中で転移しろよwww

ついでに言ったら俺が寝る前に防音の結界を張ったから無能王が帰ってきた時の悲鳴は聞こえない。

「和那、これって……」

「和那の話だと無能王を窓から外に思いつきり投げたんなら……」

「この話の女は無能王」

はい、大正解です。

『では、続いてのニュースです』

アジアがまだいなくてよかった。

「みなさん、おはようございます」

「「「おはよう」」」

タイミング凄いな、ニュースが終わった時にアジアが来たよ。

俺達は黒歌と白音の作った朝飯を食べ、学校に行こうとした……

………案の定イッセーが家の前にいた、そして俺達は逃げ出した………

家を出る時間を昨日よりも遅くしたのになんでいんだよ！

俺の家の前で俺が家から出るのを待っているとかじゃないよな！

放課後になった、くそう、イツセーのせいの一部の女子のみなさまから、和那さま×兵藤とか兵藤×和那さまとか言われる様になってしまった。

……………真剣でどうしよう……………

それと女子の大半は俺の事を和那さまって呼ぶんだよな、くん付けで呼んでくれる女子は希少価値だよ。

それに旧校舎の方からグレイフィアの気配がするんだけど、なんで？

それで俺達は今旧校舎に向かってる、コーティ達はいないけど、友達に新しく洋菓子店が出来たから一緒に行かない？って誘われたから行ってる。

うんうん、交遊関係は広く持たないとね。

「……………僕が………まで来て初めて気配に気づくなんて……………」

グレイフィアは上手いこと気配を消してるからな、ちなみに俺は一度覚えた気配はどんなに上手いこと消そうが見つけられる。

無能王の気配は覚えるつもりはないけどな！

だって覚えるだけ無駄でしょ。

イツセーが部室の扉を開く、イツセーは気配に気づいてないな。

それもそうか、イツセーは素人だし……でも、俺のいる場所は見つけられるんだよな……怖いなあ

部室にはグレイフィアと朱乃……ついでに無能王がいた。

地味に威圧感があるな、これぐらい感じないと一緒だが。

「和那！貴方のせいであつた「グレイフィア久しぶり、元気にしてた？」聞きなさいよ！」
「お久しぶりです、和那さま」

再会したときに俺の正体と名前を教えってるからグレイフィアは俺がこの姿でいるときは和那さまと呼んでる、さま付けじゃなくてもいいんだけどな。

「ねえ、ズツト気になってたんだけど、グレイフィアってサーゼクスと結婚してるの？」
この威圧感の中でそんなことを聞く俺、どうせ無能王関係だろうしな、気にするだけ無駄だろ。

「サーゼクスさまと結婚してるのは姉さんですが、それに私はサーゼクスさまよりも

……か、和那さまの方が」／＼／＼／＼／＼ボソボソ

ヤバイな、顔を赤くしながらそんなことを喋るグレイファイア、凄く可愛い。

グレイファイアも『神使』に誘おうかな、だって俺、グレイファイアの事好きだし、勿論 Love の方で。

「それで、グレイファイアはなんの為にここに来たんだ？」

「それはですね「私が説明するわ」……はい」

おい、俺はグレイファイアに聞いてるんだぞ、無能王からの説明なんて求めてねえよ。無能王が説明するんならいいや、俺は新しくソファアを創りそこに寝ることにした。

ん？なんだ？熱いな……誰だよ、俺の眠りを妨げる奴は？それと甘くていい香りがある。

俺が目を開けると目の前にグレイファイアの顔が会った。

「あれ？グレイファイア、膝枕してくれてたの」

「は、はい」／＼／＼／＼／

どこの誰だ、グレイファイアの様な美人に膝枕をしてもらっているとゆう幸せな時間を潰した奴は。

あ、それと、コーティ達にされる膝枕も幸せな時間です。

「俺はキミの下僕を全部燃やし尽くしてでもキミを冥界に連れ帰るぞ」

こいつか、俺の眠りと幸せな時間を潰した奴は。

「おい……」

「ん、なんでここに人間がいるんだ？だが、いい女だ、お前も俺の妃になるつもりはないか」

「お前は少し黙ってろ、死にたいのか？ねえ、ねえ、ねえ！」

「グツ……」

俺は少し殺気を出す、それだけでこいつ……名前知らないや、体から炎出してるし多分フェニックスだろう、は、冷や汗を大量に流す。

見た感じこいつにフェニックスの名は勿体無い、焼き鳥でいいや。

「和那さま、落ち着いて下さい！あとで膝枕でもなんでもしますから！」

「……ええ……それじゃあ俺の所に来ない？」

「いいんですか!?喜んで行きます!!」

あれ?グレイフィアのキャラが崩壊してる気が……

「それとライザーさま、和那さまをあまり怒らせないで下さい、冥界が消滅してしまます」

「……分かりましたよ、女性悪魔の中でも魔王級と言われている貴女にそんな事を言われると流石の俺も怖いです」

吹き飛ばそうと思ったのに……残念。

話はドンドン進んでいく、話を聞いたのは途中からだ、ある程度は理解した。

この焼き鳥は無能王の婚約者で無能王は焼き鳥との結婚を嫌がっていると。

………お前は無能で結婚出来るかも分からないだからさ、婚約者がいるだけでも喜ぼうぜ。

で、お互いに『レーティングゲーム』をして焼き鳥が勝てば結婚、無能王が勝てば婚約は破棄と。

ここでも無能王の無能な才能が大爆発、勝てる見込みが0なのにOKしやがった。

あ、ちなみに勝てる見込みが0つてのは無能王がいるから0な、無能王がいなければ勝てる見込みが増える。

そして俺は一つある提案をした。

「なあ、リアス・グレモリーの方に助っ人を一人追加するのはダメか？」

「ハハハハ、いいぞ、助っ人が一人増えようが増えまいが俺の勝ち揺るがない」

「このルールでいいな、リアス」

「……ええ、ライザー貴方を消し飛ばしてあげるわ！」

無理無理、無能王じゃ倒せねえってｗｗｗ

ん？出る理由？決まってるだろそんなもん、焼き鳥が俺の睡眠とグレイファイアが膝枕してくれてたのに邪魔したからだ！理由なんかこれで充分だ！

それと俺が焼き鳥を倒したらもしかしたら無能王は一生独身かも知れないしな、それはそれで面白そうだろ？ヒヤツハー。

それで『レーティングゲーム』は十日後にやるらしい。

十日後にやるのは焼き鳥が決めた、無能王が鍛える以上、十日間じゃ対して変わらな
いと思うけどな。

グレイファイアは話が終わると同時に物凄い速さで転移していった。

多分サーゼクスに俺の下に来るのに話をしに行っただろう、多分大丈夫だと思っ
けどな。

それにしても焼き鳥焼き鳥言ったら焼き鳥が食べたくなかったな……よし、今日の晩飯は焼き鳥だ！

なんか修行することになつたぜ

「ひーひー……」

イツセーがひーひー言いながら、尋常じやない量の荷物を背負つて歩いてゐる。

なんでこんなに沢山の荷物を背負つてるんだ？そんなに必要ないだろ。

それとひーひーなんて言う人初めて見た。

そして今俺達は山にゐる、無能王が山で修行するらしい、修行するからつて山籠り……安直すぎる。

本来なら俺達は参加するつもりはなかつたんだが、俺達が参加してゐる理由は昨日に遡る。

昨日の夜、俺はリビングで食後のコーヒーを飲みながら寛いでいた。

そしてグレイフィアが転移してやって来た。

「今日からここにお世話になります、グレイフィアです。グレモリー家のメイドではなく和那さま専属です♪」

この時のグレイフィアは凄く機嫌がよかったな。

コーティ達には帰ってからグレイフィアが多分来るって話をしてたからな、問題はな
い。

「それで私がここに来るに当たってサーゼクスさまから条件を出されて……」

その条件とは無能王の眷族を鍛えてほしいんだと。

てな事が会って今俺達は参加していません。

ちなみに俺達つてのは俺とコーティとキノの三人だ、コーティとキノには主にイツセーを鍛えてもらおうと思ってる。

……だって、イツセーはまだ『赤龍帝の籠手』がまだ覚醒してないもん、だからコーティとキノに頼んだ。

ドラゴンの力はドラゴンが鍛えるのが一番つてね、ま、イツセー達はコーティとキノの正体は知らないんだけどな、だって無能王になに言われるか分かったもんじゃやない。てな事で修行の目標はイツセーの『赤龍帝』への覚醒と必要最低限の実力になることだ。

それと無能王を鍛えるつもりはないけどな、だって条件は無能王の眷族を鍛えてくれ、だもん。

朱乃と優奈の二人は必要最低限の実力はあるしな、大丈夫だろ。
と、考えてる間に目的地に着いたな。

木造の別荘か、なかなか俺好みの趣味してんじやんグレモリー家。

修行一つ目はイツセーと優奈が剣術修行をしていたらしい。

なぜしていらしいって表現かとゆうと、俺はコーティーに膝枕されて寝てたからだ。

修行二つ目はイツセーと朱乃の魔力修行だったらしい。

コーティの次にキノに膝枕されて俺はまた寝てた。

修行三つ目はイツセーとコーティとキノの組み手とゆうなの半ば扱きだな。

基本の修行はこの三つだ、三つ目はイツセーの悲鳴が途絶える事はなかったな。

でも、イツセーはまだ『赤龍帝』に覚醒しない、俺が強制的に覚醒させてもいいけど、それじゃ、イツセーの為になんないだろ?……なにより俺が今のイツセーとかかわり合いたいになりたくない!

「うおおおお！美味えええ！マジで美味しい！」

一日目の修行が終わり俺達は晩飯を食ってる。

イツセーは朱乃と無能王が作った晩飯を食べて大絶賛だ。

ちなみに俺達、俺とコーティとキノの三人な、俺達は無能王が作った晩飯は食べていない。

基本は俺が作った料理だ、朱乃が作った料理は食べてるけどな。

取り合えず、無能王が作った料理は食べたくないって事で俺達の意見が一致した。

てことで俺達三人の料理は俺が作った、イツセーの修行をしてくれたしな、それのご褒美でもあるしな。

風呂に入る時はイツセーが大変だった、無理矢理に俺と一緒に入ろうとする、しつこいからイツセーの首筋に手刀を当てイツセーの意識を刈り取ってから俺は風呂に入った。

……………この世界の主人公がホモか、いや、俺以外の男には普通なんだよな……………
キツイなあ……………

ドゴオオオオオオオン

「ブベリアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

ドガアアアアアアアン

そして俺は体を隠した状態でイツセーを殴り付け……イツセーは壁を破壊して外に飛んでいった。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダ

バンツ!

ピシピシピシピシピシ

「和那大丈夫か!」

「悲鳴が聞こえたけど大丈夫!」

コーティとキノが走って勢いよく扉を開けた、それによって扉は今にも砕けん秤にヒビが入っている。

「コーティイイイイ、キノオオオオ」

俺の声はとても震えていた、多分目も涙ぐんでるだろう。

ブバツ!

「ぐはあああああ」

ドシヤツ!

「コーティ！キノ！」

「か、和那……」

「その表情で、その声は反則……」

コーティとキノが鼻血を出しながら倒れる。

……俺、どんな顔してるんだ？……ダメだ、知っちゃいけない気がする。

それよりもイツセーのやつどうやって入って来た？俺が部屋に入って来たのに気づかないなんて……

……てか俺、とっさの行動とは言え、悲鳴を上げながら掛け布団で体を隠すって……完璧に女の反応じゃないか！

……くそう、なんでこんな行動をしちまったんだよ。

それと後から朱乃、優奈、無能王の順で俺の部屋に来たがコーティとキノの二人に問答無用で朱乃と優奈の二人は意識を刈り取られていた。

無能王は飛ばされて星になったけど……だって、なんかキラーン！って効果音が聞こえて来たもん。

鼻血を出しながらじゃなければ格好いいんだけどな……

それと、沈めたり飛ばしたりするとき「こんなに可愛い和那の姿は見せない！」って言ってたけど、聞かなかった事にするのがいいよな？

そして、コーティとキノの鼻血が止まり、鼻血で真っ赤になった顔を洗ってから俺に聞いてきた。

………出血の量は明らかに致死量に至つてると思うんだけどな………二人とも元氣だ。

「で、なにが会つたんだ?」

「壁、破壊してるし、それも人形に……」

「……イツセーがなぜか俺の布団に入つて一緒に寝てました……」

「ホウ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ヤバイ、コーティとキノの周りの空間が歪んでる。

「それは和那に気配を覺られずに部屋に侵入し一緒に布団に勝手に入り込んだと……」
「は、はい、おっしゃる通りです」

「ドライグ、我等に気配を覺られずに部屋に侵入したのは凄いですけど、ドライグの行った行動は許されない」

「そ、そうですよね」ガクガクブルブル

ヤバいな、近くにいる俺の体の震えが止まらねえ……

「ドライグ殺す」

イツセー……いや、変態の死亡が決定しました。

変態は修行中に『赤龍帝』として覚醒したが……

ドゴオオオオオオオオン

「ぎやああああああああああああああああああああ」

変態は何度も死にかけ、その度に川と川の向こうに綺麗なお花畑を見たらしい。

焼つき鳥♪焼つき鳥♪前編

どうもこんにちは、変態の解決策をついに見付けた和那です。

ようは原作のイツセーとこの世界の変態の性格てか人格？を一緒にすればいいんだよ。

そして取り出しますはこの粉薬、俺が能力で創りだした粉薬だ。

この粉薬の効果は原作の性格てか人格？を一緒にするんだよ、これを変態に飲ませてやれば原作のイツセーになる。

しかも、俺に対する気持ちは無くなり俺にしてきた事も忘れるというなんとも都合主義な粉薬だ。

ちなみにこの粉薬は無味無臭だ、水や他の飲み物に溶かしても効果がある。

今日変態に飲ませてやるぜ。

なんでこんな簡単な事に気付かなかったんだろう……

ま、いいか！焼き鳥との試合の時間まで猫の姿になった黒歌と白音を愛でよう。

深夜十一時四十頃

俺は猫の姿になった黒歌と白音を愛で開始二十分前になったから部屋に来ていた。

もう少し愛でたかったな……

少し周りを見渡してみる、基本的に全員制服だな。

優奈は手甲と脛あてをつけてるけどな、剣に關しては壁に立てかけてある。

俺か？俺は黒のジーンズに黒の服だ、ファッションとかにはあまり興味が無いからな、服はなんて名前かは分からない。

取り合えず黒一色だ、制服よりも着なれたこつちの方が動きやすいし。

「皆さん、準備はお済みになられましたか？開始十分前です」

グレイフィアが魔方陣から転移してきた。

そう言えばグレモリー家のメイドとしての仕事はこれが最後の仕事って言ってたな。

審判役って言つてたっけ、これはやり過ぎ注意って事かな？

「開始時間になりましたら、この魔方陣から戦闘フィールドへ転送されます。場所は異空間に作られた戦闘用の世界。そこではどんなに派手なことをしても構いません。使い捨ての空間なので思う存分にどうぞ」

使い捨ての空間か、確かにそういった空間が必要だよな、そうじゃなければ『レーティングゲーム』をやる度に地形が変わっちゃう。

「今回の『レーティングゲーム』は両家の皆さまも他の場所から中継でフィールドでの戦闘をご覧になります」

そう言えばサーゼクスの両親には会ったことないな。

「さらに魔王ルシファアーさまも今回の一戦を拝見されておられます。それをお忘れなきように」

サーゼクスも見てるのか、魔王としての仕事は終わったのか？ いや、サーゼクスもセラフォルも魔王の仕事をしているの見たことないな、俺がない時にやっているとと思うが、二人の性格的に想像出来ねえ。

それと俺の後ろで変態が叫んでる、五月蠅い。

「そろそろ時間です。皆さま、魔方陣のほうへ。」

それと和那さま。」

「なに？グレイファイア」

「サーゼクスさまからの伝言です。『ライザーは才能のある若者だ、未来を潰さないでやってくれ』だそうです」

「大丈夫、ちゃんと手加減して殺さないようにするからってサーゼクスに伝えてくれ」
まあ、トラウマになるかも知れないけどな。

「分かりました。」

なお、一度あちらへ移動しますと終了するまで魔方陣の転移は不可能となります」
それ、俺には一切関係ないな、魔方陣が無くても転移出来るもん。

俺達が転移を完了すると、転移した場所は部室だった。

なるほど、勝負する場所は駒王学園の敷地全てか。

『皆さま。このたびグレモリー家、フェニックス家の「レーティングゲーム」の審判役を担うことになりました、グレモリー家の使用人グレイフィアでございます』

グレモリー家の使用人か、グレモリー家の最後の仕事だからそう言ってるのか。

『我が主、サーゼクス・ルシファアの名のもと、ご両家の戦いを見守らせていただきます。

どうぞ、よろしくお願い致します。さつそくですが、今回のバトルフィールドはリアスさまライザーさまのご意見を参考にし、リアスさまが通う人間界の学び舎「駒王学園」のレプリカを異空間にご用意いたしました』

やっばりな、それにしても再現度高いな。

『両陣営、転移された先が「本陣」でございます。リアスさまの本陣が旧校舎のオカルト研究部の部室。

ライザーさまの「本陣」は新校舎の生徒会室。「兵士」の方は「プロモーション」をする際、相手の「本陣」の周囲まで赴いてください』

『プロモーション』ってなんだっけ？俺はあんまりチェスやんないからな。

それと『レーティングゲーム』って本陣が無くなったらどうするんだろうか？

「全員、この通信機器を耳につけてください」

朱乃がイヤホンマイクタイプの通信機器を配る。

俺はつけないけどな、だって、この程度の通信機器じゃ直ぐに壊れる、それに無能王の命令を聞くつもりはないからな。

『開始のお時間となりました。なお、このゲームの制限時間は人間界の夜明けまで。それでは、ゲームスタートです』

キンコンカンコーン

鳴り響く学校のチャイム……ここまで再現してんの！

俺は今お茶の準備をしている、なぜかって？変態に創った粉薬を飲ます為さ。

無能王もお茶を飲んでるしな。

用意する分は俺と朱乃と優奈と変態の分だな、無能王の分？朱乃が入れたお茶を飲んでるからいらないだろ？ま、朱乃がお茶を入れてなくても無能王の分は無いけどな、な

ぜ俺が無能王の分を入れなくちゃならん。

さて、変態の分に薬を入れてつと。

「ほらイツセー、お茶だ」

「お！サンキュー」

変態がお茶を飲む、朝になる頃には原作のイツセーになつてるハズだ。

「優奈も飲むだろ？」

「ありがとう、いただきますよ」

「朱乃もほれ」

「あらあら、ありがとうございます」

朱乃が俺の入れたお茶を飲む。

「……私が入れるお茶よりも美味しいですわ」

「それはどうも」

お茶に限らず飲み物を入れるのには少し自信があるんだよな。

「あら、朱乃よりも美味しいの？和那、私にも入れなさい」

「いやだメンドクサイ」

誰が無能王に入れるか、ちなみにちゃんと四人分しか入れてないからな、おかわりなんて物もあるはずがない。

「貴方ねえ、私が入れなさい——」

無能王がなんか言ってるが五月蠅いので俺は無能王の声だけ聞こえないように自分に魔法をかけた。

……………始めからこれをしとけばよかったかも……………

—— 体育館 ——

俺と変態は体育館にいた。

俺は朱乃にお願いされたからな、それに変態だけで戦うのはまだキツイ。

体育館にいる敵は四人か、四人とも俺達に気付いてるな。

「そこにいるのはわかってるわよ、グレモリーの下僕さんと助っ人さん！あなたたちがここへ入り込むのを監視していたんだから」

今喋ったのは誰だろうな？顔は見たけど声は知らないんだよな。

焼き鳥の野郎か、この双子をこんな性格にしたのは。

よし、焼き鳥は潰そう！

ヒュン！

棍を持った少女が俺に攻撃を仕掛けて来る、俺は攻撃を全て避ける。

「バラバラバラバラバラ！」

ドルルルルルルルルル！

後ろから双子が俺にチェーンソーを振り上げ、そのままチェーンソーを降り下ろすが俺はこれも避ける。

ヒュツ！

避けた俺の顔に向かって棍が迫ってくるが、俺は顔を少し動かしたまた避ける。

棍をも持った少女が俺に正面から攻撃を仕掛け、チェーンソーを持った双子が後ろや横から俺に攻撃を仕掛けて来るが、俺は全てを避ける。

「あー、もう！ムカつくうううう！」

「どうして当たらないのよ！」

双子がその場で地団駄を踏みながらムカついていた。

そりやあねえ、持つてるのがチェーンソーだもん、音でどこにいるのか、俺までどのくらいの距離か、とか丸わかりだもんな。

「……攻撃が当たらない」

そりや、こつちはこの世界のトップとは比べ物にならないほど強い女神さまに1000年も鍛えられたしな。

それにハッキリ言つて俺の強さは原初の神とは比べ物にならないほど弱い、力はある程度コントロール出来るが、それはあくまでも原初の神としての力、俺自身の力は原初の神とは比べ物にならない。

俺に転生する前の原初の神は数億年、いや、数十億年以上生きていた、それが二百年やそこら生きた俺が敵う訳がない。

俺自身の力ではまだ一つの世界も消滅させれない、だが、原初の神は神の力関係無しに数万以上の世界を消滅させれるらしいしな。

神の力を全て解放すれば無限と言つてもいい世界が全て消滅するらしいし。

ま、なにが言いたいかというとな、無限と言つてもいい世界を消滅させられる神様から生まれた女神さまに鍛えられた俺がまだ二十年も生きていない三人に一撃を入れられる訳にはいかないんだよ！

「今度はこつちから攻めるぜ」

俺は双子の一人に向かっていき……………

ドゴオオオオオ！

「ツ！ツ！」

一人の腹に蹴りを入れる。

蹴りを入れた双子の片割れは光に包まれていき……

『ライザー・フェニックスさまの「兵士」一名リタイヤ』

グレイファイアの放送が流れる。

「この！よくもお姉ちゃんを！」

お姉ちゃんつて事は残った片割れは妹か、妹は俺にチェーンソーを向けて来るが。

「遅い！」

俺はチェーンソーに蹴りを入れる。

バキイイイインン

それによりチェーンソーは砕け散る。

「な！」

妹が驚き俺は驚いてるうちに背後に回り込み首筋に手刀を当てる。

ビシ！

「ツ！」

『ライザー・フェニックスさまの「兵士」一名リタイヤ』

「さてと、俺の相手は残り君だけだ」

「くっ！」

少女が棍を構えるがその顔に戦意は感じられない、自分じゃ勝てないと理解したか。あ、変態体育館の中央口へ走ってる、もう時間か。

それに焼き鳥の『戦車』が倒れてる、変態は勝ったんだな。

「じゃあな」

俺も中央口へ走る。

「逃げる気……は重要拠点なのに！」

残った焼き鳥の眷族が叫ぶ。

「悪いけど俺からしたらそんなの関係ないんだよ」

俺はそんな事を言いながら体育館の外に出る。

カッ！

外に出たと同時に、一瞬の閃光。

ドオオオオオオオオオオオンツツ!!

轟音とともに巨大な雷の柱が体育館へ降り注ぐ。

「ヒュ〜♪」

中々の威力だ。

「撃破」

上空にはニコニコ顔の朱乃が黒い翼を広げて空に浮いていた。

右手を天にかざしており、その手はパチパチと電気が走ってる。

……………それにしても翼を出さないと空を飛べないなんて不便だよな。

『ライザー・フェニックスさまの「兵士」一名、「戦車」一名、戦闘不能!』

ま、これだけの威力があれば戦闘不能になるはな。

ん!俺に攻撃を仕掛けて来るやつがいるな。

俺は立っていた場所から軽く地面を蹴りその場から移動する。

ドオンツツ!!

移動したと同時に俺が立っていた場所が爆発をする。

「よく避けたわね、カンが鋭いのかしら?」

「殺気を向けられたら誰でも分かるって」

殺気を向けられなくても分かるけどな、女神さまは殺気を出さずに不意打ちとか普通にしてくるし。

「次はあんたが俺の相手をしてくれるのかな?」

「ふふふ。相手をしてほしいの?なら今度は遠慮なく爆発させるわよ」

魔導師の……………こいつの名前も知らないや、魔導師が腕を俺に向けてくる。

撃つ前に潰す。

「あらあら。あなたのお相手は私になりますわ。ライザー・フェニックスさまの「女王」、ユーベルーナさん。『爆弾王妃』とお呼びすればいいのかしら？」

……『爆弾王妃』対戦相手は全員爆発させたのか？

だって、そうでもしないとそんな二つ名つかないだろ。

「その二つ名はセンスがなくて好きではないわ、『雷光の巫女』さん。あなたと戦ってみたかったの」

その二つ名が好きじゃないなら戦い方を変えればいいんじゃないか？

「和那くん、イツセーくん、優奈さんのもとへ向かいなさい。ここは私が引き受けますから」

「俺が相手をしたらダメなのか？」

「和那くんには和那くんの役割がちゃんとありますから」

無能王の話を全然聞いてなかったから俺の役割なんて知らないや。

ま、いいか、取り合えず優奈と合流するかな。

俺と変態は運動場へと向かって行った。

焼つき鳥♪焼つき鳥♪後編

『ライザー・フェニックスさまの「兵士」三名、リタイヤ』

俺達は朱乃と別れ運動場へ移動中にグレイフィアのアナウンスが聞こえてきた。

焼つき鳥の『兵士』三名か、これで焼つき鳥の眷族は七名リタイヤって事だよな。

焼つき鳥と眷族を入れたら残り九名、無能王は無能王を含め四名、そして俺と。

しかし、こう考えると無能王の無能さは半端ねえな、だって四名で十六名に勝てると思ってるんだぜ、無能王より実力も戦闘経験も焼つき鳥の方が上なのにな。

……………無能王で例えるのは焼つき鳥に失礼だな。

ッ！

考え事をしすぎたか、俺の腕を誰かが掴み、俺は咄嗟に腕を掴んだやつに向かって殴ろうとするが……

「なんだ、優奈か」

「う、うん」

「すまん、少し考え事をして気づかなかった」

「ぼ、僕も急に腕を掴んでごめんね」

優奈が冷や汗を大量に出しながら謝る。

俺の悪い癖だな、一度考えるとたまに回りに気づかない、それと優奈が冷や汗を出してるのは俺が反射的に優奈だけに殺気を出してるからだ。

「それで、『兵士』をやったのは優奈でいいんだよな？」

ま、優奈以外ならビツクリなんだけど、無能王は今どこにいらっしゃる？……………無能王がどこにどのような関係ないか、焼き鳥を潰す邪魔をしなければな。

「まあね。運動場の部室棟は重要なポイント。敵が多くなるのは当たり前。なんとか、見回りの『兵士』だけを集めて一網打尽にしたんだけど、ここを任せられているボスが冷静でね、まだ挑発に乗ってこないんだ。というよりも『兵士』を使って僕の攻撃を見ているのかな。犠牲が好きなのは戦法のようなだね、ライザー・フェニックスは。自分が不死身ってことと、下僕の人数が多いからこそ出来ることなんだろうけど」

優奈、口元は笑ってるけど、目元は一切笑ってないぞ。

でも、相手の情報を得るのは大事だよな、犠牲って戦法はあまり好きじゃないけどな。

「残りは誰がいるんだ？」

「残りは『騎士』、『戦車』、『僧侶』が一名ずつ。合計三名だよ」

「……………すげえ嚴重じゃないか」

変態が喋る、一切喋らないから変態のこと忘れてた。

「まあ、それだけ警戒されているのさ。こちらからの侵入を。ただでさえ、体育館を消し飛ばされたわけだから、こちらに力も集中するよ」

目ぼしい侵入ルートは二つ、体育館と新校舎裏手の運動場からのルート、片っ方ぶっ飛んでるから残りは運動場のルートだろうけどさ、これって焼つき鳥の眷族全員集合のパターンだよな。

「私はライザーさまに仕える『騎士』のカーラメイン！こそこそと腹の探り合いをするのも飽きた！リアス・グレモリーの『騎士』よ、いざ尋常に剣を交えようではないか！」
焼つき鳥の眷族の一人が出てきてそんな事を喋る、犠牲の戦法があまり好きじゃないタイプだなあれは。

それにしても凄く堂々としてるな、カーラメインって人、陰から狙い撃ちされても文句言えねーよ。

「名乗られてしまったら、『騎士』として、剣士として、隠れているわけにもいかないか」
優奈は用具小屋の物陰から出ていき、そのまま真正面から野球のグラウンドへ向かっていく……………この二人、似た者同士じゃね？

それよりも、眠くなってきた。

「僕はリアス・グレモリーの眷族、『騎士』木場優奈」

「俺は『兵士』の兵藤一誠だ！」

「ふあくあ……………眠い」

いや、マジで眠い、なんで俺これに参加してんだっけ？

「リアス・グレモリーの眷族悪魔におまえたちのような戦士がいたことをうれしく思うぞ。堂々と真正面から出てくるなど、正気の沙汰ではないからな。」

それと、その人間、戦いの最中に眠いとは何事だ！」

そんな事言われてもな、眠い物は眠い、さっさと終わらせて寝ようかな。

俺がこの戦いをさっさと終わらせようか悩んでる間に優奈とカーラマインが一對一の勝負を始めていた。

「ヒマそうだな」

「ん？」

俺が声のしたほうを振り返れば、顔の半分だけにだけ仮面をつけた女性がいた、なぜ、顔の半分だけにだけ仮面をつけてるんだ？

そしてもう一人も近づいて来た、……………文句を言いながらだけど。

「まったく、頭のなかまで剣剣で塗りつぶされた者同士、泥臭くてたまりませんわ。カーラマインったら、『兵士』を『犠牲』にするとときも渋い顔していましたし、主である『王』の戦略がお嫌いなのかしら？しかも、せっかくなにかわいい子を見つけたと思ったら、

そちらも剣バカなんてついていませんわね」

西欧のお姫さまって感じのドレスを着込んだ少女だ。

頭の両端にドリルのような縦ロール、そう言えば、俺が生まれた世界の友達は縦ロールを『個人的にはチョココロネがいいな、ドリルは格好いいけどさ、チョココロネは食べれるじゃん』とか言ってたっけ。

「うーん。この子がリアス・グレモリーさまの可愛がつてる『兵士』さん？あの方、殿方の趣味がワルいのかしら」

「それに関しては同感だ」

「あら、貴女は……………」

なぜ俺を見て固まる。

「あ、あの、よろしければ私の邸に来ませんか？貴女に似合うドレスがありますわ、むしろ来て下さいい！」

お、おう……………あれ？なんかイメージと違うくない？

「いや、俺は女装趣味とかないから」

「女装趣味、てことは殿方！いえ、むしろ welcome ですわ！」

顔を赤くしながらにそんな事を言ってくる。

「スミマセン、マジで勘弁して下さいい！」

だって、前に一回コーティ達と旅行に行つて王さまゲームをしたときに罰ゲームで女装させられたんだよ！しかも、俺に似合う服がないとか言つて次の日に近くのブランド物の服を売つてるところに連れていかれて色々な服を着せられたんだよ！しかも、その日一日中女装の状態で過ごせとか、誰得だよ！

泊まったホテルの女性スタッフとか男に負けたとか言つてorzの状態になるしよ、男のスタッフは仕事そっちのけで俺を見てくるしよ、あれは俺の黒歴史だ。

……………果てしなくさっさと終わらせて帰りたくなつてきた。

「悪いけど、早いこと終わらせて帰りたくなつてきた、さっさと始めよう」

「早いこと終わらせたいか、私も嘗められたものだ」

臨戦態勢に入るのは仮面をつけた女性のみ、縦ロールの少女は戦うつもりはないのか、でも、縦ロールの少女からフェニックスの気配がすんだよな、……………あの焼き鳥、妹を眷族にしてるとか言わないよな？ま、俺には関係ないか。

俺は武器を入れてる空間から一丁のライフル、いや、二丁のライフルがくつついていて、一丁のライフルのような形をした物を取り出す。

ガンダムを観たことあるやつなら分かるだろうな、俺が取り出したライフルはウイングガンダムゼロの武器、ツインバスターライフルだ、形はEW版だけだな。

「悪いけど一撃で終わらせる、早いこと帰りたいからな」

俺は体を魔法で少し浮かせ、ツインバスターライフルを両手で持ち、足を開いた状態で女性に向ける。

俺の髪の色は力を使ったことにより黒髪から金髪になり、瞳の色も黒色から金色に変わる。

少しでも力を使えば色が変わるんだよな、ま、金髪や金色の瞳も気に入ってるからどうこうするつもりはないけどな。

「髪と瞳の色が変わった、そして嘗めるのもいい加減にしないと痛い目を見ることになるぞ」

「どうかな?」

俺はツインバスターライフルにチャージされた魔力を少し解放する、このツインバスターライフルは俺が少しアレンジをしてある。

撃つために必要なエネルギーは空間に入れてる間に俺から自動的にチャージされる、撃つ時に俺の意思で魔力が光の力、あるいはそれ以外の力で撃つか決める、今回は魔法だ。

そして今回はチャージされてる分だけだが、ここから俺の力を上乗せすることも出来る、滅多にやらないけどな。

威力はちゃんと手加減するぞ、少し解放って言っただろ、ま、最小限でも、この世界

の神さまを殺しちゃう位の威力だけだな。

……………威力は後で調整した方がいいかな？

キイイイイイイ

ツインバスターライフルの銃口に明るいオレンジ色になった魔力が集束していく。

「そのライフルは撃つまでに時間がかかるようだな、なら、撃たれる前に倒す！」

俺に向かって来るがあいにく時間切れだ。

「ターゲット・ロックオン……排除…開始」

俺はツインバスターライフルのトリガーを引く。

ギユオオオオオオオオオオオオオオオ

明るいオレンジ色の極太の砲撃が地面を大きく抉りながら一直線に放たれる。

「!？」

当たるとヤバいと察したのか横に避けようとするが、悪いがまだ攻撃の範囲内だ。

ギユオオオオオオオオオオオオオオオ

砲撃が治まると俺の直線上にはなにもかも無くなっていた、直線上に会った新校舎も半分、てか、四分三以上が跡形もなく吹き飛んでいる。

『……………ライザー・フェニックスさまの「兵士」二名、「騎士」二名、「戦車」一名、

「僧侶」一名、「女王」一名、『王』ライザー・フェニックスさま、リタイヤ』

「.....」

.....やり過ぎた？

てか、敵さん殆ど巻き添えくらってんじゃん。

カーラマインって人も攻撃範囲にいたからな、優奈はギリギリ避けれたみたいだけど、『女王』は朱乃が倒したとして、他の眷族は.....そういや、攻撃の直線上にこっちに向かつてる気配がいくつか会ったな、そして焼き鳥も倒しちゃったな。

それと無能王はなんかしたか？ただお茶飲んでただけじゃね？なんもしてなくね？ま、いいか、これで帰れる。

こうして、俺の『初レーティングゲーム参加！』は終わった。

.....が、帰ってからグレイフィアにこっぴどく怒られました。

——その頃の『レーティングゲーム』を見ていた悪魔達——

「なんだあの人間は！」

「アイツは人間なのか！それにあのライフルはなんだ！」

「今すぐアイツの履歴を調べろ！」

やあ、始めましてだね、私はサーゼクス・ルシファー、魔王をやっている。

それにしても、和那くんのあのライフルから撃たれた一撃はなんだい！

あの一撃は神すらも葬る事が出来るよ！

和那くんの性格を考えると手加減はしてるだろうけど……………手加減してあの威力

なら全力の威力は想像もつかないよ！

ライザーは今の一撃がトラウマになってないといいが……………いや、下手すると今の一撃

がなにか理解出来てない可能性もあるね……………

……………相変わらずデタラメだなあ……………

……………それもそうか、だつて……………

この世界を創った『原初の神』だもの

月光校庭のエクスカリバー

優奈、お前はやっぱり憎んでるんだな

オツス、またまた久し振りだな、この間焼き鳥を一発KOした和那だ。

焼き鳥は潰すつもりだったからいいんだが、……金髪の状態の俺の姿を朱乃に見られてな、翌日の説明が大変だったぜ。

ま、説明したのは朱乃だけだけだな、なんでわざわざ無能王に説明しなくちゃならん。それと変態の性格？人格？が原作通りになったぜ、でも、原作も変態なんだよな、……………主人公が変態ってどうよ？

男女問わず人間は少なからず変態だと思うけどさ、あそこまでオープンな変態ってどうよ？でも、原作の変態の方がましか。

で、現在というと……

「で、こつちが小学生のときのイツセーなのよー」

「あらあら、全裸で海に」

「ちよつと朱乃さん！って、母さんも見せんよ！」

「うふふ、和那さんの子供の頃の姿ですか、私も見たいので参加しますわ」

「か、和那さんの小さい頃ですか、わ、私も見たいですけど、でも催眠術を使うのは」
コーティが右腕、黒歌が左腕、白音が右足、朱乃が左足を掴んで動けないようにする。
そしてありがとう、アーシア君が最後の良心だ。

「俺は絶対に子供の姿にならないぞ！子供の姿は俺の黒歴史の一つだからな、絶対になるもんか！」

誰が絶対になるか、なんでわざわざ子供にならなくちゃならん。

——三十分後——

「「「ハアハアハアハアハア」」」

よし、なんとか子供にならずにすんだぞ、てか、コーティ達の執念がヤバかった、途中から目が血走ってたし。

でも、コーティ達の顔を見ると諦めてないな、俺が忘れた頃にまた来るかもな。

最悪の場合、次はグレイフィアやヴァーリが参加する可能性も視野に入れとこう。

「これ、見覚えは？」

ん？俺達が揉めてる間に優奈がなにか見つけたらしいな。

「うーん、いや、何分ガキの頃すぎて覚えてないけどな……」

「こんなことがあるんだね。思いもかけない場所で見かけるなんて……」

優奈の目は俺ですら少し寒気がするほどの憎悪に満ちていた。

「これは聖剣だよ」

……………聖剣……………か……………

カキーン。

無能王達は今野球の練習をしてる、来週に駒王学園球技大会がある、なんの競技が会ったつけ？

去年は適当にやったからな、取り合えず球技大会はクラス対抗戦、男女別球技などがあるが、今無能王達がやってるのは球技大会の一つに部活対抗戦があるり、その練習だそう。

そして俺は……

「和那さん、紅茶のおかわりですわ」

「ありがとう、朱乃」

椅子を七つとテーブルを四つ創り朱乃が作ってくれたクッキーを食べながら紅茶を飲んで寛いでる。

「朱乃さん、クッキーとても美味しいです」

「うふふ、アーシアさん、こんど作り方教えましょうか？」

「本当ですか、ありがとうございます」

「よかったな、アーシア」

「和那は料理は出来るけどお菓子は苦手だからな」

「家のおやつは基本お店の物」

「私達も何度も挑戦してるけどなかなか上手くできないしにや」

「甘すぎたり甘くなかったりですからね」

そうなんだよな、俺達がお菓子を作ると不思議と上手くできない、もうさあなんか呪いのように上手く出来ないんだよな。

「あなた達なに寛いでるの！もうすぐ部活對抗戦があるのよ、ちゃんとこの練習に参加しなさい！」

「お前さあ、いい加減病院に行ってこい、俺達はお前の作った部活の一員じゃないんだ、練習に参加する理由がない」

いや、マジで参加する理由ないだろ、俺達は部員じゃないんだからさ。

無能王が俺達に文句を言うてくるが俺達は無視した、アーシアは無視してなかったけどな。

……………それにしても優奈は最近ポケーとしてる、やっぱりあの写真が原因だよな。

話は一気に飛ぶが球技大会が終わった、マジで話は飛んだが気にするな、まあ話が飛んだ間に会った事はソーナと会った事と球技大会を適当にやったことぐらいだからな、気にしないでくれ。

それにしてもソーナ達はこんど鍛えたいな、少なくとも無能王を瞬殺出来るレベルまで。

え、なぜかって？そんなもんソーナ達が気に入ってるからに決まってるだろ。

それと朱乃もそろそろ鍛えようかなと考えるけど無能王が王だとな、確実に無能王が朱乃の足を引つ張るよな。

そして現在は無能王が優奈に怒って優奈は外に出ていった。

復讐か、……………優奈、お前はやっぱり聖剣や聖剣に関わった者、いや、教会自体を憎んでるんだな。

聖剣が盗まれたあ、優奈の問題の次は聖剣かよ……

学校が休みの昼過ぎに、ミカエルから連絡がきた。

「はあ！聖剣が盗まれたあ！」

「……はい、先日教会で保管、管理されていたエクスカリバーが盗まりました」

「はあ、誰が盗んだかは分かっているのか？」

「はい、グリゴリの幹部、コカビエルとバルパー・ガリレイが主犯です」

……あの戦闘狂が主犯かよ……それにバルパー・ガリレイか、どうせエクスカリバーを一つにしようとか考えてるんだろうな。

「それで、俺に連絡するってことは俺がエクスカリバーを回収すればいいのか？それとも聖剣を取り返すために教会から何人か来るだろうからそいつのサポートをすればいいのか？」

「出来ればサポートの方を頼みたいのですが」

「わかった、何人教会から来るんだ」

「二人です」

「二人！少なすぎだろ、教会人手不足か？まあ、俺がいれば二人でも大丈夫か。」

「それで、二人の名前は？」

「イリナとゼノヴィアです」

「二人の武器は、聖剣使えるのか？」

「はい、イリナが『擬態の聖剣』（エクスカリバー・ミミック）ゼノヴィアが『破壊の聖剣』（エクスカリバー・デストラクション）を使います」

「聖剣が使えるのはいいが、問題は優奈だな、優奈が憎しみを抑えられるかどうかだな、抑えられなかった場合はこっちで対処するか。」

「それと、ミカエルのやつなにか隠してるな。」

「おいミカエル、いったいなにを隠してる？」

「……なんのことでしょう」

「神相手に隠し事が出来ると思うなよ、なんならこれから天界に乗り込んでやろうか」

「わ、わかりました！言いますから乗り込むのだけはやめてください！」

「初めから隠し事をしなければいいのにさ」

「ミカエルのやつスッゲー慌ててるな、数年前のお話（殴り込み）が効いてるな。」

「ゼノヴィアがデュランダルを使います、彼女は数少ない天然ものですから」

「OK、その二人の面倒は見てやるよ、そのかわり、聖剣を取り返したらアーシアが『魔

『女』と呼ばれてるのを撤回させろ」

「……それは和那様だつてわかつてるでしょう、『聖書の神』が亡くなっている今システムを維持するだけでも精一杯なのです、彼女の『神器』は神の不在を他の勢力に知らせる引きがねになる可能性があります」

「システム面なら俺がこの間渡しただろ、あれを使えば『聖書の神』が存在していた状態にシステムを戻せるはずだ」

「和那様から頂いた物はシステム面が複雑過ぎます、今あれを組み込むために解析してる最中なんです」

「わかったよ、でも、出来るだけ早めに頼む」

俺はミカエルとの連絡を切った。

ピンポーン

ミカエルの連絡があつてから二日後誰かが家のインターホンを鳴らした。

誰だ？この町の人達の気配は大体覚えてるが感じたことのない気配だな、もしかしてイリナとゼノヴィアの二人か？

「はい、どちら様ですか？」

「この度教会から聖剣奪還の任務を受けたプロテスタント所属の紫藤イリナとカトリック所属のゼノヴィアです、現地協力者の方と話がしたいんですが」

「わかった、入り口を開けるからリビングに来てくれ、玄関から二つ目の扉がリビングだ」

俺は玄関を魔法で開ける、ちゃんとイリナ達の周りに誰もいないのを気配で確認して
るぞ。

足音が近づいてくる、そして……

ガチャ

リビングに入る為の扉を開けイリナ達が入ってくる。

「初めまして、俺が現地協力者の霧瀬和那だ」

「うわー、凄く綺麗な人（プロテスタント所属の紫藤イリナです）」

「彼女が現地協力者？見た感じ鍛えてるようには見えないが（カトリック所属のゼノヴィアだ）」

「……お前ら、喋る事と思ってる事が逆になってるからな……」

「はっ！」（。ロ。）！

「まあいい、お前ら二人を直接見て分かった、お前らじゃコカビエルには勝てない、だから俺が鍛えてやる」

「なにを言っているんだ、私達は一刻も早く聖剣を回収「お前達の実力でコカビエルから取り返せるのか？」……」

「ついてこい、数日の間にコカビエルと対等かそれ以上に強くしてやるよ」

まあ、数日ってのは現実の時間だけだな。

「……わかった（ええ）」

俺は二人を連れて俺達が修行をする空間に連れていった。

「……………え？」

「どうした？」

「い、いやいや、どうした？ って、なんなんだこの空間は！」

「扉を開けたら部屋にいて、その部屋は寝る為のベットや料理をする場所、そして、その部屋の外は真つ白でなにもない空間なんて……」

「あ、和那さん、どうしたんですか？」

「和那、後ろの二人は誰にや？」

「姉さま、二人は多分聖剣を回収するために来たんですよ」

「白音の言うとおりだ二人は聖剣を回収するために来た、でも、黒歌と白音の二人がいるのはわかるがアーシアがこの空間にいるのは珍しいな」

「はい、私も少しでも皆さんの役に立ちたいので黒歌さんと白音さんに魔法について教えてもらったりしました」

「そっか」

ちなみにグレイフィア達は今はいない、グレイフィアは晩飯の材料を買いに行ってるしコーティとキノは次元の狭間に行ってる、異世界からなにかが流れ着いたらしい、それで今流れ着いた物の確認をしに行ってる。

……………あれ？今考えた事よりも、アーシアとイリナ達が会うのは不味いんじゃないね。

「アーシア？もしかして『魔女』アーシア・アルジエントか？」

チツ、やつぱり知ってたか。

「あなたが一時期内部で噂になっていた『魔女』になった元『聖女』さん？悪魔や墮天使をも癒す能力を持っていたらしいわね？追放され、どこかに流れたと聞いていたけれど、まさか悪魔が管理している土地にいるとは思わなかったわ」

ブチツ×₃

「おい、お前らいい加減にしろよ」

「そうにや、二人にアーシアのなにがわかるっていうにや」

「アーシアさんはとても優しいんです、悪魔とか墮天使とか関係なしに怪我を治すほど優しいんです」

「それともなにか、お前らは『聖女』に必要なのは分け隔てない慈悲と慈愛だ』とか考えてんのか？怒らないから言ってみろ」

「……………う、……………はい」

「ふざけるのもいい加減にするにや、アーシアは人間にや、教会のやつらが怪我を治す『神器』があるからって『聖女』って決めつけてそれでアーシアを怪我を治す道具として見られるアーシアの気持ちがわかるかにや」

「少なくとも私達にはわかりません、でも、アーシアさんはそれでもみんなの怪我を治し続けました、この癒しの力は神様がくれた力だって、みんなの役に立ってるのが嬉しいって言っていました」

「それをお前達はなんだ悪魔の怪我を治したからって手のひらを返して今度は『魔女』と言って追放だ、お前達はなんだ神様にでもなったつもりか？」

「そ、それは」

「第一お前らは情報に囚われ過ぎだ、教会がアーシアを『魔女』だと言ったから教会のやつら全員がアーシアを『魔女』だと決めつける、自分自身の目で耳で感じた事を信じろ、だいたいな「和那さん、もう十分です」……………すまん、熱くなりすぎた」

「私も熱くなりすぎたにや」

「私もです、すみません」

「いえ、私の事をここまで想ってくれる人達に出会えたんです、この出会いは主に感謝しなくてはいけません」

アーシアはここまで優しくいい子なのに、なんでこんな娘が傷つかなくちやならな
いんだよ。

「……………」ツカツカツカ

「「「？」」」」

ゼノヴィアが無言でアーシアに近づいていく、なにをするつもりだ？

「あの…………ゼノヴィアさん…………」

—————
パアアアアン
—————

ゼノヴィアは勢いよく土下座をした。

「すまなかつた、アーシア・アルジェント、私は他人の話だけを信じキミ自信を知りもし
ないのに見下していた」

「私もそうね、貴女を知りもしないであんな事を言つてごめんなさい」

イリナは深く頭を下げる。

「頭を上げてください、私の行いも浅はかだったのも事実ですから」

アーシアのメンタルが日に日に強くなって行つてる気がする、……………俺の家にいる
やつらがやつらだからなあ……………

ミカエルに頼んだこと、余計だったかな？

それとゼノヴィア、勢いつけすぎだ、額少し斬つてるぞ、血が出る。

「えーと、取り合えず和解したってことでいいのか？」

「はい！」

「ああ」

「ええ！」

アーシアはゼノヴィアの額の傷を治しながら返事をする。

「そうか、それじゃ、早速修行をするぞ、黒歌、今何倍に設定してるんだ？」

「今は十倍に設定してるにゃ」

「アーシア、十倍いけるようになったのか？」

「はい！普通に走れるようになりました」

マジで！アーシアの身体能力が超パワーアップ。

「さつきから言っている十倍とはなんだ？」

「ま、ついてくればわかる。」

それとアーシア、二人に常に『神器』での回復をしてもらってもいいか」

「はい！わかりました」

今のアーシアは離れた人の傷も治す事が出来る、無論複数の人の傷もな。

そして俺は二人を連れて喋っていた部屋から外に出る。

「!？」

二人は外に出た瞬間膝を曲げ両手を地面につける。

「……………な、なんだ、これは」

「……………体が全然動かない」

「ここはな、『精神と時の部屋』ってんだ、それでさっきまで話をしてた家ってか屋敷ってか、の外の空間は現在地球の十倍の重力に設定してんだよ」

「……………十倍！」

「そ、まず二人にはこの空間で自由に走り回れるようになってもらう、修行はそのあとだ、それと自由に走り回れるようになってこの建物が見えるまでにしとけよ、こここの広さは地球と同じ広さだから迷うと死ぬぞ」

「……………この空間が地球と同じ広さ……………」

「……………そ、それに、走り回れるまでに何カ月かかると思ってるのよ」

「それについては安心しろ、この空間の時間と現実の時間は同じじゃないから」

「……………参考までにどれくらい違うんだ？」

「この空間での一年が現実の一日だ、でも安心しろ、この空間にいる間は歳とらないから」

「…………………………」

「さあーで、じっくりと数年間二人を鍛えてやるよ」

「……………私達死ぬかも……………」
ん？アーシアに常に回復してもらおう理由？最悪骨ごと潰れるかも知れないじゃん？

やべ、……イリナとゼノヴィア、……魔改造だわ……それ
とこれは予想外だ

オツス、イリナとゼノヴィアを鍛える事にした和那だ、……鍛える事にしたが、……
どうしよう……

「和那君、見てみて、私達この空間で五時間以上全力疾走しても息一つ乱れなくなった
よ」

「和那、そろそろ重力を上げてもいいんじゃないか？」

二人を『精神と時の部屋』に連れてきてはや半年、二人は凄く動けるようになった、
……動けるようになったのはいいんだが、今の設定重力は二十倍なんだよな、やべ、……
イリナとゼノヴィアの身体能力魔改造だわ……

なんで設定重力が二十倍になってるかというとな……

二ヶ月ほどで二人とも十倍の重力に馴れて自由に走り回る（あれ？二人とも重力に馴
れるの早くね？）

←

それで二人が俺がどれだけの重力で居るのかを聞く

← 俺はつい最近六十万倍までなら問題ないと喋る（おい、お前はなに馬鹿正直に喋って

る）

←

それを聞いた二人は絶句（そりやそうだろう）

←

それ以降二人は重力に馴れると設定重力上げて上げてとしつこい、それで重力を上げていくと、いつの間にか二十倍に↑今ここ

でも俺、重力を上げて鍛えたりしても筋肉が一切つかないんだよ……泣けてくるよ。

てか、二人とも最初は骨が砕けかけたりしたのに今は平然としてるよ、体つつーか、骨つつーか、頑丈になったあ。

あ、最初のうちはアーシアが常に回復させてたから骨が砕けかけてもすぐに治ってたぞ。

それと二人の体型に変化はないぞ、俺がそうしたからな、別に世紀末覇者みたいな見た目にはなっていないから安心しろ。

「重力を上げるのは一旦終了だ、今から俺と実戦をやるぞ、俺を殺すつもりで来な」

「あ、いよいよ本格的な修行開始？」

「私としては重力をもっと上げてほしいんだが」

「いや、ゼノヴィア、身体能力は上がってもお前らの剣術の腕は変わってないからな」

「む、それもそうか」

「じゃ、始めるぞ、重力はこのままだが全力でこい」

『精神と時の部屋』に二人の人間の女性と一人の神がいつ攻撃を仕掛けようかとお互いにスキを探していた。

(どうしよう、ただズボンのポケットに手を入れて立ってるだけなのに全然スキがない

……それに、この威圧感)

(……なんなんだ、ただ立ってるだけなのにこの威圧感は、こんなの今まで一度も経験したことがない)

(動けない)

(やっぱり二人とも剣術はそれほど凄いつて訳じゃないな、スキだらけだ)

否、二人は和那の放つ威圧感で一步も動けずにいた。

「来ないならこっちから行くぞ」

「!?!」

「ハアア！」

ドゴオツ!

「ツ！ツ！」

和那は一瞬でイリナの懐に移動し、イリナの鳩尾にパンチを一発、これによりイリナは百メートルほど吹き飛ぶ。

「ハアアアア！」

ゼノヴィアは和那の後ろに回り込み、聖剣を降り下ろすが……

スカッ!!

「な！」

「残念、それは俺の残像だ」

そう、ゼノヴィアが後ろに回り込んだ時は既に和那はゼノヴィアの後ろに回り込んでいた、ゼノヴィアは残像だと気づかず、攻撃をしたのだ。

「今度はこっちのばー!」

和那はさつきまでいた場所から即座に離れる。

和那が立っていた場所に一本の聖剣が勢いよく通過する。

「……ゼノヴィア、大丈夫」

「イリナか、助かったよ」

吹き飛ばされたイリナが聖剣を鞭のように和那に向けて伸ばしたのだ。

(思ったよりも回復が早かったな)

「イリナ、大丈夫なのか?」

「……………結構ヤバイわね、まさか一撃だけで気絶しかけるとは思わなかったわよ」

「……そうか、一回でも攻撃を喰らえば終わる、喰らう前に倒すぞ」

「わかったわ」

ゼノヴィアは和那に向かって走っていく。

「ハアアア!」

ゼノヴィアはまた和那に聖剣を降り下ろす、和那は今度は避けずに片手で降り下ろさ

れた聖剣を掴む。

「なっ!」

さすがにこの行動は予想外だったのかゼノヴィアは驚愕し、動くことを忘れる。

「今度こそ、当たって」

イリナは聖剣をまた鞭のように伸ばし、和那の後ろから攻撃を仕掛けるが、和那はもう片方の手で動き回る聖剣を掴み……

「え、キヤアアアアアアアアアアアア」

イリナを上空へ投げた。

「イリナ!」

「今度はゼノヴィアの番だ」

「え!うわああああああああああ」

ゼノヴィアもイリナと同じように上空へ投げられる。

「キヤア!」

「うわあ!」

二人とも同じ場所に投げられたため落ちてきたイリナと後から投げられたゼノヴィアがぶつかる。

「それじゃ、これで止めだ」

和那は二人が落ちる場所に腕を伸ばし呪文を喋る。

『我は放つ光の白刃』！』

二人が地面にぶつかる瞬間……

閃光と熱と衝撃を伴うエネルギーの波動を放出し、その膨大な熱量の奔流を喰らい、二人は意識を失った。

「アーシア、二人の治療を頼む」

「はい、わかりました！」

俺はアーシアに二人の治療を頼み、イリナとゼノヴィアの修行の内容を考える事にし

た。

「お！目が覚めたか」

「うー、ひどい目にあつた」

「和那とは二度と戦いたくないんだが……」

ゼノヴィアよ、そんな甘いことは言わせないぞ、ここにいる間は俺と戦いまくつてもらうぞ。

「取り合えず二人にこれを渡しとくぞ」

「これは？」

「修行メニユー？」

「そうだ、二人とも聖剣に頼りすぎだ、だから俺に攻撃を素手で防がれたりしたら驚いて動けなくなる、よって、二人には聖剣に頼らない戦い方、素手による接近戦を中心に、修行してもらおう、ま、ちゃんと剣術も修行させるから安心しろ」

「あ、あのー、修行の相手って、もしかして」

「喜べ、俺がズツト鍛えてやる」

「イ、イヤーーーーー」

二人の悲鳴が響き渡った。

俺が二人を鍛えてから四年ほどがたったが、……二人の実力が魔王には及ばないものの、魔王に限りなく近いレベルにまでなりました、……やべ、……二人とも完璧に魔改

造だわ。そして、身体能力だけで言えば鉄骨を軽く殴っただけで貫通するほどに……そして。

「は、無能王に会いに行く?」

「そう、無能王に……無能王って誰?」

「すまん、間違えた、リアス・グレモリーに会いに行くって?」

「そうだ、教会からの報告に行つてなくてな……」

「……まさか四年も鍛えられるとは思わなかったもん……」

ワリイ、だつて先に無能王に会いに行つたと思つたから……

「俺も一緒に行くよ」

「え、和那君も?」

「ああ」

無能王がなにをするか分かつたもんじゃないしな。

そして、俺達三人は『精神と時の部屋』を出て、無能王がいる部室へと向かつて行つた。

俺達は今部室の前に立っている、ここに来るまでの視線が凄かったな、二人の格好が格好だもんな、怪しい人って感じだし、ま、取り合えずさっさと入るか。

「邪魔するぞ」

「和那！貴方今までどこにいたのよ！数日もの間無断で学校を休んで！私に一言言うのが普通でしょー！」

「ウツセーよ、なんで学校をサボるのにお前に一言言わなくちゃならねえんだよ」

「貴方は私の言うことを聞いとけばいいのよ！」

おい、無能王がなんか悪化してるぞ、数日の間になにがあった。

「朱乃、数日の間になにがあった」

「……優奈さんもここ数日来ていないのですわ、それに、いくら連絡しても返事がなくて」

「なんだと？」

俺は優奈の気配を探る。

……

……

……

……いた、いたけど、気配が凄く弱い、なん

でだ、……まさか！

「イリナ、ゼノヴィア、急用が出来た、俺はそっちに向かうから話は二人でしてくれ」

「え、いいけど、どうしたの？」

「そうだぞ、慌てるがどうしたんだ？」

「話は後でする！」

俺は優奈の気配がする場所に一瞬で転移した。

優奈の気配がした場所は取り壊しが予定されているパスタ専門店だ、このパスタは自家製生パスタを使ってかなり旨かったんだが、場所が悪すぎた、穴場過ぎたんだよ、それで先月閉店しちゃった。

……………それで優奈はどこにいるんだ？

……………いた、いたが、これは……………

俺が見つけた優奈は壁に凭れているが、右腕が肘から先が無く、左腕や足などが斬りつけられていた。

俺は優奈に近づくと、右腕は制服を使って止血されていた、おそらく左腕と口を使って止血したんだろう、弱々しいが息はしてるが、かなりヤバイな、まずは傷を塞いで、右腕の再生は家に帰ってからしよう。

俺は優奈の傷を塞いでそして、優奈を、まあ、お姫様抱っこだな、お姫様抱っこをして家に転移した。

お前の憎しみを少しでも和らげてやるよ

オッス、死にかけの優奈を見つけて家に転移した和那だ。

俺が帰ってまずしたことは優奈の右腕の再生、そして優奈と同じ血液型を優奈に輸血、最後に斬りつけられた場所の治療をした。

優奈は治療がすんで三時間ほどで目が覚めた。

「……………ん、……………ここは？」

「目が覚めたか」

「……………和那くん？……………ここはどこ？」

「ここは俺の家でこの部屋は俺の部屋だ」

「和那くんが助けてくれたの？」

「そうだ、右腕を再生させたが違和感とかないか？」

「右腕？……………なんで右腕があるの！」

「言ったろ、再生させたって、それで違和感ないか」

優奈は起き上がって右腕を動かす。

「うん、全然違和感がないよ、どうやって僕の右腕を再生させたの？」
「俺に出来ないことはない」

いや、マジで出来ないことなんてないよな俺って。

「……メチャクチャだね」

「メチャクチャで悪かったな。それで優奈、お前はなんで傷だらけだったんだ？」

予想は出来るが直接聞いた方がいい。

「僕は数日前に覚えのあるオーラを感じたんだ、部長は気づいてなかったみたいだね、それで僕は数日間オーラを頼りに探したんだ、それで見つけたんだけど振り返りに会って」

「そうか」

振り返りに会った後に閉店したあの店に逃げ込み、止血をしたまではよかったが死にかけの状態だったと。

「それに今も感じてるよ、あの憎い聖剣のオーラをね」

そこまで聖剣を憎んでるのか、……………無能王は憎しみを和らげたりはしなかったんだな。

「この家にいる聖剣使いに攻撃はしないでくれよ」

まあ、攻撃しても当てる事は出来ないだろうが。

「なんで和那くんの家に聖剣使いがいるのかな」

「天界からのお願いでね、教会から盗まれた聖剣を取り返すために来た二人のサポートをしてほしいってな、だから攻撃なんかするなよ、下手したら戦争になるぞ」

「……………」

「少し待ってろ、二人を呼んでくる」

一応顔合わせをした方がいいだろう。

「私はプロテスタント所属の紫藤イリナよ」

「私はカトリック所属のゼノヴィアだ」

「僕は木場優奈、君達の先輩だよ、————もつとも失敗作だったそうだけどね」

優奈が二人を凄く睨んでる、教会の人間＋聖剣使いだからな。あ、ゼノヴィアがヤバい、キレかけだ。

「悪いけど挨拶がすんだし二人とも部屋から少し出てつてもらってもいいか？優奈と二人で話したいんだ」

「わかったわ」

「……むう」

イリナがゼノヴィアの背中を押しながら部屋から出ていく。

二人が部屋から出ていって、俺は椅子に座りベットに座っている優奈に話しかけた。
「優奈、そんなに聖剣が憎いか？」

「憎いよ、本当は今すぐにも斬りかかりたいぐらいにね」

「なんでそんなに聖剣が憎い」

「『聖剣計画』なんて物が会ったから皆が死んだ、僕よりも夢を持った子がいた。僕よりも生きたかった子がいた。それなのに僕だけが逃げて、僕だけが生き残って、僕だけが平和な暮らしを過ごしていいのかって……」

優奈は皆が死んだのを思い出したのか泣きながら喋っていく。

……優奈はズツト後悔してたんだな。

俺は机にくつつも置いてある写真立てから一つ取り優奈に渡す。

「優奈、これを見ろ」

「……………え？」

俺から写真を受け取り優奈は目を見開く。

「……………和那くん……この子供達はなんで写真に写ってるの！それにこの日付」

俺が渡した写真は俺達（俺、コーティ、キノ、黒歌、白音）が真ん中において、俺達の横や前に十数人の子供たちが写っている。

この写ってる子供たちは優奈が死んだと思ってた『聖剣計画』の子供たちだ。

そして写真の下の方にある日付、現在は2014年だがこの日付は2012年、つまり二年前だ。

「俺は四年前の冬、雪山の施設で殺されかけていた子供たちを助けた、その写真に写ってるはその時に助けた子供たちだ」

「……そっか……皆生きてるんだ……よかった……本当によかった……」

優奈は写真を大事に持ちながら泣いた。

優奈は長い間泣き続けた、もしかしたら数分かも知れない、だが俺にはとても長い時間優奈が泣いていた気がした。

優奈が泣き止んでから俺は声をかけた。

「皆から伝言だ」

「………伝言？」

「僕達は生きてる、だから僕達を見殺しにして自分だけが生き残ったとか平和な暮らし

を過ごしていいのかとかで後悔しないで、君も平和に暮らして、そして幸せになって、僕達も幸せになるから』だってさ」

「……そっか、皆幸せに暮らしてるんだ、よかった」

「今度は俺からの言葉だ、優奈はまだ聖剣が憎いか」

「……今まで憎み続けたんだ、皆が生きてると分かっててもこの憎しみは捨てきれないよ」
「……そうか」

少しは憎しみが和らいでいるが、ヤツパリ捨てきれないか。

「それじゃあ、今起きている事が収まればどうするつもりだ、王の命令無視、ほっとけばはぐれ悪魔扱いになるぞ」

「……もとから部長の下に戻るつもりは無いよ、聖剣を破壊したらこの町から出ていくつもりでいたから」

「なら、俺の下に来るか？」

「……え？」

「俺の下に来ればはぐれ悪魔にならなくてもすむ、それに、まだ聖剣を破壊したいなら破壊してもいい、誰にも文句を言わせねえよ」

「でも、和那くんに迷惑が「迷惑なんて思わねえよ」……」

「迷惑なんて思わねえ、むしろ大歓迎だ、もし優奈を襲うやつがいたら俺が守ってやる」

「……それじゃあ、お願いしようかな」

「ああ、お願いされました」

それじゃ、指輪渡しとくかな。

「それじゃ、この指輪を嵌めてくれ」

「指輪？」

「そうだ、指輪を嵌めていれば俺の力が少しだけ使える、もつともどの力をどれだけ使えるかは分からんがな、それと指輪に関しては契約の指輪と思ってくれ」

「契約……」

「ま、契約の内容は俺の下に来ることだけだな」

「分かったよ」

優奈は指輪を右手の中指に嵌める、この指輪は俺の『神使』にするための指輪だ、優奈はまだ『神使』にはしない、今すると無能王が嫌いだろうしな、だが、嵌めていると『神使』になってなくても俺の力の一部が使える、本当に少しだがな、もつとも、誰でも使えるって訳じゃない、俺が味方と認識してるやつだけだ。

だが、俺が予想もしないことが起こった、それは優奈の体から『悪魔の駒』が抜け出たんだ、そして『悪魔の駒』は砕け散り消滅した。

「『悪魔の駒』が抜け出て消滅した……」

優奈から悪魔の気配が完璧になくなった、つまり優奈は人間に戻ったということ。

「……………和那くん、これってどういうこと?」

「俺にもサツパリ分からん」

どういうことだ?俺が神で優奈が悪魔だから相反する力が打ち消し会って弱い力が消滅したつてのが真つ先に思い浮かぶが、グレイフィアの時はそんなこと起こらなかつたし、むしろ今のグレイフィアは神と悪魔の力、簡単に言ったら光と闇だな、その力が合わさって混沌を示したんだけどな。

優奈の悪魔としての力や種族は弾かれて消滅した……………なんでだ、転生悪魔だからか?それとも優奈に流れた俺の力が無能王の眷属の証の『悪魔の駒』や悪魔の力を拒絶した?……………後者の確率メツチャ高え。

「……………ま、まあ、取り合えず優奈は悪魔じゃなくなつて人間に戻つた、と、OK?」

「あ、う、うん」

混乱してるな、俺も混乱してるけど……………

「ね、ねえ、和那くん、お願いがあるんだけどいいかな?」

「ん、なんだ?」

「イリナさんとゼノヴィアさんにもう一度会わせてもらえないかな」

「なにをするつもりだ?」

「さっき睨み付けたからね、謝りたいんだ」

「分かった」

俺は二人を呼びに行った……

……行つたんだが……

「……なんでこんなことになつてんだ？」

「……安心して和那君、私も理解してないから」

俺とイリナの目の前には優奈とゼノヴィアが戦っていた、武器は木刀だけだな。

俺は二人を呼びに行つて優奈は睨み付けていたことを二人に謝つたんだ、イリナは許したんだが、ゼノヴィアが『剣士なら剣で語り合おう、言葉はいらぬ』って言って

奈も賛同、今現在二人で戦っています。

場所は『精神と時の部屋』だぞ、ここなら目立たないしな。

それとこれってあれだよな、男なら拳で語り合おうみたいなものだよな、全然理解出来ねえよ。

それにしても優奈、よくもってるな、身体能力は落ちたが、いや、俺の力が優奈の身体能力を強化してるから悪魔の時よりも上だし、冷静に判断してるからなんとかもってるが、そろそろ負けるな。

「私の勝ちだな」

「うん、僕の負けだよ」

「だいたい五分か、思ったよりも持ちこたえたな。」

「凄い実力だね、僕じゃ手も足も足もでないよ」

「和那に鍛えられたからな」

「そっか、和那さんに鍛えられたんだ……和那くん」

「……ん？」

「僕も鍛えてくれないかな、和那くん達の足手まといになりたくないんだ」

「構わないが、俺の修行はキツイぞ」

「構わないよ」

「そうか、ならまずは地球の十倍の重力に馴れてもらう」
「……………え？」

まずは優奈に十倍の重力に馴れてもらい、馴れたら十倍から上げていく。

イリナ達と同じく二十倍に馴れてもらったらイリナ達とは少しは違う修行をする。
「ほらほら、優奈、避けるよ！」

俺は光速で何度も剣を降り下ろす、それだけで数万の斬撃が優奈に向かっていく。
……………高速じゃないのかって？俺の場合光速の方がシツクリくるんだ。

「え！　和　那　く　ん！　少　し　ま　っ　て、　キヤ

コカビエルが動き出したか、……無能王は邪魔だなあ

オツス、優奈も魔改造しちまった和那だ。

優奈も四年ほど修行して実力はイリナとゼノヴィアの二人となんら遜色のない実力になった、そして、三人を鍛えるのに八年ほど『精神と時の部屋』に籠ってた訳だが、八年の間グレイフィアの作るおやつをほとんど食ってないんだよ、グレイフィアの菓子を食うために世界を滅ぼせと言われたら滅ぼすぞ俺は！……あれ？俺、グレイフィアに餌付けされてる？

……俺がグレイフィアに餌付けされてるかどうかは今は置いとこう。

問題は優奈だよ、『禁手』に到ったのはいいんだが、到った『禁手』がなあ、『聖魔剣』と『神殺しの神剣』なんだよ、なぜ二種類？さすがは俺の力、予想外の事が次から次へと起こる。

『聖魔剣』は俺の力が優奈の因子を増幅か俺の力と合わさって創れるようになったと思う。

『神殺しの神剣』は………なんでだろ？鍛える時につねに殺すきで来いつて常に俺を

殺すのを前提にしていたからか？でも『神殺しの神剣』はマジでヤバイ、俺が素手で掴んだときほんの少し手が斬れたもん、この世界の神なら殺せるって……

それと『神殺しの神剣』の能力が結構ヤバイ、剣が触れてる間だけが神の力が無効化される、力の全てを無効化出来るかは優奈の実力しだいだが、俺でもほんの一瞬無効化されたからな、そのせいで手がほんの少し斬れたし。

……うん、三人とも実力がチートになつたなあ、優奈の『神器』は確実にチートだし、それに『神殺しの神剣』は『神滅具』に入れてもいいんじゃないか？『神殺しの神剣』なだけに……

(存在自体がバグな奴がなにを言ってるんだよ)

存在自体がバグで悪うございましてねえ………なんだ、今の声。

「和那くん、今の気配って……」

「……ああ、コカビエルが動き出したな」

「場所は駒王学園ね」

「結界はコカビエルが張ったのか？」

「いや、コカビエルが結界を張るとは考えづらい、とすれば悪魔側が張ったんだろう」

あの戦闘狂が人間界の被害を最小限に抑えるとは考えられねえ。

「それじゃ、行こうか」

「うん」

「ええ」

「ああ」

「和那さん、私も連れて行って下さい！」

「アジア、その気持ちは嬉しいが危険だ」

「大丈夫です、自分の身を守る魔術は習いましたし、皆が怪我をしたときに治させて下さ

いー」

今のアジアはなにを言っても引く気はないな。

「分かった、でも念のために召喚獣を側にいさせとくからな」

「はいー！」

それと行く前に一言アザゼルに言っとくか、俺はアザゼルに連絡した。

「ハロハロ、アツくん♪皆大好き和那さんだよ♪」

「お前誰だよ！」

「いや、なんとなくだ」

「なんとなくて和那はキャラをあそこまで変えるのか！」

「煩いなあ、そんなに叫ぶなよ、でだ、今からコカビエルを潰しに行くけど問題ないよね

♪」

「……なんか、楽しげだな」

「悪い子にはお仕置きよってね」

「……………やり過ぎるなよ」

「それは約束出来ないな、そんなじゃ、行ってくらあ」

俺達が駒王学園に着いたとき一人の悪魔が近づいて来た。

「おい霧瀬、なんでお前がここにいんだよ！ それに行方不明になったリアス先輩の『騎士』の木場がいて、アーシアさんもいるし、それと、残りの二人は誰だよ！」

「落ち着け匙よ、二人は教会から聖剣奪還しに来た、アーシアはもしもの時のサポートだ、優奈は……まあ、今は深く気にしないでくれ、それで、今の現状は？」

「教会から！ ちよ、ちよと待つてろ！ 今会長を呼んでくる！」

匙は急いでソーナを呼びに行った。

「こんにちは霧瀬くん」

「こんにちは、……って挨拶してる場合じゃないだろ、それで、今の現状は？」

「私達が結界を張り、結界の維持、そして、リアス達がコカビエルと戦っています」

無能王が戦つてんのかよ、邪魔だなあ。

「救助はちゃんと呼んだんだろ」

「はい、セラフォール様が一時間ほどしたら来ます」

「なんでグレモリーの領地なのにセラが来るんだ？ 普通はサーゼクスじゃないのか？」

「サーゼクス様への救助はリアスが拒否したので私がセラフオール様を呼びました。」

普通救助を拒否るか？無能な癖にプライドはやたらと高いんだよな。

「分かった、それじゃ、俺達は行かせてもらおうよ」

俺達は結界を通り学園に入った。

「和那くんはサーゼクス様とセラフオール様を呼び捨てにしてるんだね」

「ああ、サーゼクスとセラとは仲がいいからな」

まあ、セラの場合は仲いいとは少し違うがな、やたらとスキンシップが激しいし、俺に一目惚れしたそうなの、神と魔王のお付き合いつて大丈夫か？それに俺は遅かれ早かれこの世界からいなくなるしな、『神使』にした皆は連れていけるだろうが、セラはなあ、セラを『神使』にしたら、俺がこの世界からいなくなったらセラもいなくなるって事だもん、冥界はいろいろと面倒な事になりそうだな。……………ほんと、セラはどうしよう。

「魔王と仲良しって……………」

「和那はいろいろと規格外過ぎる……………」

「和那さんの交遊関係は凄く広いですからね」

規格外で悪かったな、それと交遊関係は広い方が後々楽だろ。

そろそろ校庭に到着するな、無能王はどうしようか、邪魔しなければいいか。

……………邪魔しないよな？

バルパー、話ナゲーヨ

さあ、駒王学園の校庭にやって来ました。

無能王達はケルベロスと戦ってるが、コカビエルから全然相手にされてないな、ケルベロスにダメージを与えられてないし。

朱乃は少しずつだがダメージを与えられてるな、でも、かなりキツいな。

それにコカビエルの顔よ、スツゲーつまんないって顔してる、誰がどう見ても無能王のダメぐあいに落胆してるし、心情的には『こんなやつが魔王の妹なのか』とか考えてるだろ絶対。

それにしても、三対一なのに全然ダメじゃん、朱乃しかダメージ負けられてないしな。

さてと、まずはケルベロスを潰すか。

「おい、リアス・グレモリー、邪魔だどけ」

「和那！こんな時にどこに行ってたのよ！」

「煩いから黙れよ」

「和那はなんでそんなに偉そうなのよ！立場は私の方が上なのよ！」

「ハッ、お前が俺よりも立場が上だと？笑わせるなよ」

「和那は人間で私は上級悪魔なのよ！」

「ぶ、部長、落ち着いて下さい！」

「なんだイツセー、いたのか」

「ヒドッ！」

「あらあら、和那さんが優奈さんを連れて来てくれるなんて……あら？優奈さんから悪魔の気配が」

「姫島先輩、今の僕は悪魔じゃありませんので」

「どうゆうことよ優奈！」

「煩いなあ、お前は叫ぶことしか出来ないのかよ」

「和那ね！私の優奈になにをしたのよ！」

「あ？別に、心のどこかで優奈がお前の眷族でいるのが嫌になったんじゃねえの？」

説明するのもめんどくさい。

「優奈が私の下僕を嫌になるなんてありえないわ！」

マジで言ってるのかコイツ。

「はあ、もういいや、お前の煩い声を聞くのは飽きた、俺がいいって言うまで『喋るな』」

「和那君、なにをしたの？」

「ん？『言葉の力』だよ、俺が『喋るな』って言ったからコイツは喋れなくなった」

「普段は普通に喋ってるじゃないか」

「俺の『言葉の力』はON/OFFが出来るんだよ、普段はOFFにしてる」

「和那さんそんな力も持つてるんですね、私初めて知りました」

「ま、それはさておき、俺達が話をしてる間攻撃をしてこなかった優しい墮天使さんにお礼を言おうかな」

「此方としても面白い物を見せてくれたからな、それにしても魔王の妹にはガツカリしたがお前達は楽しめそうだな、なによりもお前が連れてくる四人のうち三人は魔王に限りなく近い力を感じるからな」

「「!?!」」

無能王はまだ喋ろうとしてんのか、いい加減喋れないって学習しろよ。

「そいつはどーも、霧瀬和那率いる人外達がお前の相手をしてやるよ」

「え！和那君、私達人外なの！」

「私達は人外ではなく人間だぞ」

「あはは、確かに今の僕達は人外レベルだね」

「皆さん人外になっちゃったんですか！凄いです！」

いや、アーシアよ、君も十倍の重力に馴れたんだ、身体能力は人外レベルだと俺は思うぞ。

「フハハハ、人外か、確かにこれ程までの実力は人外だ、お前達には一人に付き一体のケルベロスじゃ相手にならないだろう、俺が連れてきたケルベロス全てで相手をしてやろう」

うっわ、どんどんケルベロスが増えていくな、気配を探ったところ四十はいるな。単純計算で一人十体だけど、バルパーが少し離れた場所で聖剣を一つにしようとしてるんだよな、三人はバルパーの方に向かわせるか、思いつきりオーバーキルだが、イリナとゼノヴィアは聖剣奪還が任務だし、優奈も聖剣の相手の方がいいだろうし。それにコカビエルを潰す前の準備運動になりそうだ。

「優奈、イリナ、ゼノヴィアの三人はバルパーの方に行ってくれ、アーシアはここで待機だ」

「分かったよ」

「分かったわ」

「分かった」

「分かりました」

「よし、それじゃ、こい『イフリート』！」

俺は『イフリート』を呼び出す。

『グオオオオオオオオ！』

『イフリート』だと！いや、俺が知ってる『イフリート』とは見た目が全然違う」

「そりゃそうだ、この『イフリート』はこことは違う別の世界の『イフリート』なんだからな」

「「!?」」

俺が召喚した『イフリート』はファイナルファンタジー10の『イフリート』だ、別の世界っていうか別の作品だな。

てか、無能王よ、俺が喋れないようにしてんだからいい加減喋ろうとするな。

「フハハハハ！別の世界ときたか、貴様は面白いやつだ」

『イフリート』、アーシアを頼むな」

『グオオオオオオオオ』

『『イフリート』さん、よろしくお願いします』

『グオオオオオオオオ』

和那がケルベロスの相手をしている頃優奈達三人はバルパーがいる場所に着いていた。

「バルパー・ガリレイ！」

「私の方に三人来たか、だか、少し遅かったな、今完成したところだ」

だが優奈達が到着するのが少し遅かった。

「三本のエクスカリバーが一本になる」

そう、教会から盗んだ三本のエクスカリバーを一本にしていたのだ、本来ならばイリナが使うエクスカリバーも奪われるのだが、和那というイレギュラーによりエクスカリバーは四本ではなく三本が一本になった。

「エクスカリバーが一本になった光で、下の術式も完成した。あと二十分もしないうちにこの町は崩壊するだろう。解除するにはコカビエルを倒すしかない」

あと二十分でこの町は崩壊することをバルパーは口にする、だが、和那達がこの場にいる以上コカビエルを倒すのに二十分もいらないうだろう、むしろ半分の十分でも時間が

有り余る位だ。

「フリード！」

コカビエルが以前和那に一撃で沈められたイカレ神父を呼ぶ。

「はいな、ボス」

暗闇の向こうから呼ばれたイカレ神父が歩いてきた、以前喰らわせた和那の一撃は身体中の骨が砕けても可笑しくない一撃だったのだか今現在歩いて来ているイカレ神父は元氣そうだ、まったく、トンでもない回復能力とゴキブリ並の生命力だ。

「陣のエクスカリバーを覚え。最後の余興だ。三本の力を得たエクスカリバーで戦ってみせろ」

「へいへい。まーったく、俺のボスは人使いが荒くてさあ。でもでも！チヨー素敵仕様になったエクスなカリバーちゃんを使えるなんて光栄の極み、みたいなの？ウへへ！ちよつくら、人間と悪魔でもチョッパーしますかね！それに向こうに以前俺をぶっ飛ばしたクソビッチもいますしねえ！」

相変わらずイラつく話し方だ、和那なら迷いなく今の会話の最中にイカレ神父を再起不能にしている事だろう。

「優奈、エクスカリバーの核になっている『かけら』を回収できれば問題ない。フリードが使っている以上、あれは聖剣であって、聖剣ではない。聖剣とて、普通の武器と同じ

だ。使うものによって、場合も変わる。——あれは、異形の剣だ、三人で破壊するぞ」

今の優奈は悪魔じゃないしイリナとゼノヴィアとも仲がよく修行の間は和那対優奈、イリナ、ゼノヴィアの三対一でチームワークの向上もしていたのだ。

「くくく……」

バルパーはゼノヴィアの言葉を聞き笑っていた、まるで一本になったエクスカリバーを破壊出来ないと思っっているようだ。

「バルパー・ガリレイ。僕は『聖剣計画』の生き残りだ。いや、正確にはあなたに殺された身だ。悪魔に転生したことで生き永らえた、今は人間に戻っているけどね」

優奈は至って冷静にバルパーに告げる、和那が『聖剣計画』で殺されたと思っっていた皆を助けている事を知らされ、皆が幸せにいることと自分を恨んでいないことを知り聖剣に対する憎しみがまだ僅かに残っているが以前に比べると、とてもマシになっていた。

「ほう、あの計画の生き残りか。これは数奇なものだ。こんな極東の国で会うことになるうとは。縁を感じるな。ふふふ」

バルパーは『聖剣計画』の生き残りが他にもたくさんいることを知らない。

「——私はな。聖剣が好きなのだよ。それこそ、夢にまで見る程に。幼少の頃、エクスカ

リパーの伝記に心を踊らせたからなのだろうな。だからこそ、自分に聖剣使いの適性が無いと知ったときの絶望といったらなかつた」

バルパーは急に語りだした、死期でも覚ったか？

「自分では使えないからこそ、使える者に憧れを抱いた。その想いは高まり、聖剣を使える者を人工的に創りだす研究に没頭するようになったのだよ。そして完成した。キミたちのおかげだ」

「僕たちを処分したのは聖剣を使うのに必要な因子だけを抽出し、集める為だけに僕たちを処分した」

「ほう、分かっていたのか、そうだ聖剣を使うのに必要な因子があることに気づいた私は、その因子の数値で適性を調べた。だが、被験者の少年少女、ほぼ全員に因子はあるものの、どれもこれもエクスカリパーを扱える数値に満たなかつたのだ。そこで私はひとつの結論に至った。それが先ほどキミが言った事だよ。だが、私が被験者を殺すのを命令し、殺した後に施設に向かった時には施設ごと消滅していた。施設が会った場所には私が殺すのを命令した研究員の変わり果てた姿だけが転がっていたがね」

「残念だったわね、その施設は和那君が吹き飛ばしたのよ、しかも被験者全員を助けてね」

「なるほど、その彼が施設を処分させたのか。だが、この話を聞いても驚かないとはな」

「和那に大体の話は聞いていたからな、だが、改めて当事者から聞くと忌々しい話だ」
三人とも話は和那から聞いていたがバルパーの話を変えて聞くと忌々しく歯齧みをしていた。

「私の結論により研究は飛躍的に向上するはずだった。それなのに私の研究資料は施設が消滅したことにより研究資料も無くなってしまった。なのに貴殿を見るに、私の研究は誰かに引き継がれているようだ。私の下にいた誰かは知らないがね。そして、ミカエルめ。あれだけ私を断罪しておいて、その結果がこれか。まあ、あの天使のことだ。被験者から因子を引き出すにしても殺すまではしていないか。その分だけは私よりも人道的と言えるな。くくくくくく」

愉快そうにバルパーは笑う。だが、バルパーは一つ大きな勘違いをしていた。

「残念だけどバルパー・ガリレイの研究は誰も引き継いでいない」

「なんだと？」

「そうよ、和那君が新しく創ったシステムで因子を抽出しなくても因子が作れるんだから」

そう、和那が創ったシステムにより聖剣を使う為の因子は抽出しなくともいけるようになっていたのだ。もつとも因子を作る為には熾天使クラスの實力が無いと作れないが。もつともこのシステムは以前話に出た『聖書の神』が存在していた頃に戻せるシス

テムが組み込まれてこそ本当に機能するのだが、そのシステムが無いと七つに分かれたエクスカリバーを扱えるだけの因子は作れるが、デュランダルのような聖剣を扱えるだけの因子は作れないのだ。

そして会話が終り、和那に鍛えられた三人とエクスカリバーを扱うイカレ神父との戦いが始まろうとしていた。

さて、俺を怒らせたバカな墮天使をぶつ飛ばすか

今、三対一の戦いが始まろうとしていた。

「——『禁手』、『双覇の聖魔剣』。聖と魔を有する剣の力、その身で受け止めるといい」
「私達三人で一人と戦う……リンチね……」

確かにこれはリンチである、イカレ神父はこの三人にボコられる以外の道は無いだろう。

「ペトロ、バシレイオス、ディオニシウス、そして聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ」

ゼノヴィアは言霊を発し始め、空間が歪み始める。そしてゼノヴィアは歪みの中心に手を入れ一本の聖剣を引き出す。

「この刃に宿りしセイントの御名において、我は解放する。——デユランダール！」
「デユランダールだど！」

「貴様、エクスカリバーの使い手ではなかったのか！」

バルパーとココビエルは流石に予想外だったのか驚きを隠しきれていなかった。

「残念。私はもともと聖剣デュランダルを使い手だ。エクスカリバーの使い手も兼任していたにすぎない」

ゼノヴィアがデュランダルを構える、今のゼノヴィアはエクスカリバーとデュランダルの二刀流だ。

「バカな！私の研究ではデュランダルを扱える領域まで達していないぞ?!……まさか和那という奴の仕業か！」

「和那は関係ない、それにヴァチカンでも人工的なデュランダル使いは創れていない」

「では、なぜだ！」

「イリナたち現存する人工聖剣使いと違って私は数少ない天然ものだ」

ゼノヴィアの言葉にバルパーは絶句する、まさか天然ものの聖剣使いが目の前に現れるとは思わなかったようだ。

「デュランダルは想像を遥かに超える暴君でね。触れたものは何でもかんでも斬り刻む。和那に鍛えられるまで私の言うこともろくに聞かなかったんでな」

「そんなのアリですかあああ!?ここにきてのチョー展開！クソツタレのクソビッチが！そんな設定いらねえんだよオオオオ！」

イカレ神父は『天閃の聖剣』の能力を使い神速で優奈に襲いかかる。だが、イカレ神父の殺気はわかりやすく、全ての斬撃を優奈に防がれる。

イカレ神父は反射的にゼノヴィアの一撃を防ぐが……

ガギイイイン！

たつた一撃でエクスカリバーが防いだ箇所から先が砕け散った。

「マジかよマジかよマジですか！伝説のエクスカリバーちゃんか木っ端微塵の四散霧散かよっ！酷い！これは酷すぎる！かあっ！折れたものを再利用しようなんて思うのがいけなかったのでしょうか？人間の浅はかさ、教会の愚かさ、いろんなものを垣間見て俺さまは成長していききたい！」

イカレ神父が成長すれば少しはマシになるのだろうか？

「イリナ、行くよー！」

「分かっているわ」

優奈とイリナは叫んでいるイカレ神父に『聖魔剣』と『擬態の聖剣』の二本を降り下ろす。

イカレ神父は砕けなかった部分で防ごうとするが。

バギイイイン。

夢い金属音が鳴り響き、『聖剣エクスカリバー』は核を残して砕け散った。そして優奈とイリナは聖剣を砕いた勢いそのまま優奈は右肩口から左横腹まで、イリナは左肩口から右横腹までフリードを斬った。

「せ、『聖魔剣』だと……？あり得ない……。反発しあうふたつの要素がまじり合うなんてことはあるはずがないのだ……」

バルパーは『聖魔剣』を見て表情を強張らせている。おそらくこのままいけば『聖書の神』の不在に気づいてしまうだろう。

「……そうか！わかったぞ！聖と魔、それらをつかさどる存在のバランスが大きく崩れているとするならば説明はつく！つまり、魔王だけでなく、神も——」

『オラアツ！』

ズンツ！

バルパーは誰かの叫び声の後に空から降ってきた肉塊に潰された。

「「……………え？」」

優奈、イリナ、ゼノヴィアの三人は何が起きたのか理解が出来なかった。

そして、少し離れた場所から声が聞こえた。

『あれ？バルパーの気配が消えた？もしかして潰した？』

今の肉塊は和那が飛ばした物だった、なぜこうなったかは少し遡る。

「オラアッ！」

最後の一撃でケルベロスだった物を殴り飛ばした。そして、殴り飛ばされた肉塊はバルパーの方へ飛んでいき、バルパーを潰したのだ。

バルパーのこの死はある意味不慮の死では無かるうか、この死に方は和那達は予想していなかっただろう。

これがバルパーの死の全貌である!!

.....ある意味しようもないε|| (?.?.?)

俺がバルパーを間違って潰してしまったようだ。.....気まずいな.....

もえ戦争で四大魔王だけじゃなく、神も死んだのさ」

クソツ、ケルベロスを倒してからすぐにコカビエルを潰せばよかった。

「知らなくて当然だ。神が死んだなどと、誰に言える？人間は神がいなくては心の均衡と定めた法も機能しない不完全な者の集まりだぞ？我ら堕天使、悪魔さえも下々にそれらを教えるわけにはいかなかった。どこから神が死んだと漏れるかわかったものじゃないからな。三大勢力でもこの真相を知ってるのはトップと一部の者たちだけだ。先ほどバルパーは気づき、貴様は知ってたようだがな。ミカエルたちとも交流があるようだし知っていても不思議ではないか」

「……ウソだ。……ウソだ」

「……和那君、……本当なの？……主は死んでいるの？」

「……主がいないのですか？主は……死んでいる？では、私たちに与えられる愛は……」
「そうだ。神の守護、愛がなくて当然なんだよ。神はすでにいないのだからな。ミカエルはよくやっている。神の代わりをして天使と人間をまとめているのだからな。まあ、神が使用していた『システム』が機能していれば、神への祈りも祝福も悪霊祓いもある程度動作はする。——ただ、神がいる頃に比べ、切られる信徒の数が格段に増えたがね。その『聖魔剣』の小娘が『聖魔剣』を創りさせたのも神と魔王のバランスが崩れているからだ。本来なら、聖と魔は混じり合わない。聖と魔のパワーバランスを司る神と魔

王がいなくなれば、様々ところで特異な現象も起きる」

アーシア達の精神が危ない！俺はアーシア、イリナ、ゼノヴィアの三人を一ヶ所に集め、抱き締めた。

「…………ごめん、神が亡くなってることを知ってたのに…………ごめん」

「…………和那さん…………」

「…………和那君…………」

「…………和那…………」

「俺は戦争を始める、これを機に！おまえたちの首を土産に！俺だけでもあのときの続きをしてやる！我ら墮天使こそが最強だとサーゼクスにも、ミカエルにも見せ付けてやる！」

この場で喋るつもりは無かったけど今のアーシア達を見てると我慢出来ねえ。

俺は抱き締めた状態から翼を出して翼も使ってさらに抱き締める。

「…………金色の翼…………」

「…………これって、いったい…………」

「…………和那は天使だったのか？…………」

「…………俺の正体は「貴様何者だ！貴様から感じる力は間違いなく神のもの、それも死んだ神とは比べ物にならない程の力！」…………」

なんで喋るのを邪魔すんだよ。

「神の愛が欲しいなら俺が愛してやる、この世界を創った俺が三人を愛する」

「「……………この世界を創った……………」」

「少し待ってろ、あいつを潰してやる」

俺はコカビエルの方に向き直る。

「この世界を創っただと……………あり得ん、この世界を創ったとされる神はおとぎ話のはずだ！」

「ああ、俺はどの勢力や教会でもおとぎ話さ。だが、俺はこうしてこの世界に存在する！俺がこの世界を創った『原初の神ファイアナ』だ！」

「「この世界を創った神さま……………」」

「和那くんがこの世界を創った……………僕はとんでもない人に鍛えられたんだ」

「……………！」

「コカビエル！俺はテメエを潰す！」

俺を怒らせたやつは誰だろうが潰す！

「落ちろ、コカビエル!」

和那は一瞬のうちにコカビエルの頭上に移動し、コカビエルを蹴り落とした。

「グガアアアアア!」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオ!

コカビエルが落ちた場所はクレーターが出来ており、土煙でコカビエルの姿は見るこ
とが出来ないほどだった。

「戻ってこいよ、コカビエル、今の一撃じゃ死なないはずだ」

「クフフ、クハハハハ! いいぞこの世界を創ったとされる神、まさかそんなやつと戦える
とは思ってもよらなかった!」

コカビエルは頭から血を出しながら喜んでいた、戦闘狂め。

「この世界を創った貴様を俺が倒せば俺がこの世界で最強だ!」

コカビエルは喋りながら光の槍を持ち、和那に向かっていく。

「テメエが最強か……残念だがテメエは最強には馴れねえ、テメエは最強の器じゃねえしテメエはここで俺が潰す！」

和那は今度は一瞬でコカビエルの背後に回り込み、コカビエルの翼を根本から全て掴む。

「何をする気だ！まさか！」

「そのまさかさ！」

「よせ！やめろおおおお！」

和那はコカビエルの翼を掴んだ状態でコカビエルの背中を蹴る。

ブチイイイイイイイツツツ!!

「ガアアアアアアアア！」

全ての翼を失ったコカビエルは地面に落ちていく。和那は落ちていくコカビエルに『ツインバスターライフル』を空間から出し、コカビエルに銃口を向けた。

キイイイイイイイイイ

銃口に魔力、神力の二つの力を集束していく。神力も集束させているため前回よりも明るいオレンジ色になっている。

「テメエは消え失せろ！」

和那は『ツインバスターライフル』のトリガーを引く。

ギユオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!

「グガアアアアア!!」

和那の砲撃が終わり地面には巨大なクレーターが出来ていた。コカビエルが蹴り落とされた時に出来たクレーターは深さは十メートル程だったが、今の砲撃で出来たクレーターはどれだけの深さがあるかわからない程に深かった。

「……………クレーター、残したままじゃヤバイよな」

俺はクレーターが出来た場所の時間をクレーターが出来る前まで戻した。

……………アーシア達を連れて帰るか。俺の正体も詳しく説明しないとイケないし。そして、俺の『神使』になるかどうかとも聞かないとな……………

ピシ！ピシピシ！

ん？ソーナ達の張った結界（和那が力を使う為に内側からさらに強化した結界）が破られる！

パリーイイイイイイイイイン

「和那——————♪」

「ヴァーリー！」

結界を破ってやって来たのはヴァーリーだった。しかも『禁手』状態でだ。そして今のヴァーリーのスピードは音速以上光速以下だろう、そしてヴァーリーはそのスピードのまま俺に抱き着いてきた。

だが、不意打ち気味で尚且つそんなスピードで来られるとどうなるか……

「グフオオオオオオ」

ドゴオオオオオオオオ

当然俺はヴァーリーと一緒に地面に落ちた。

「あー、久し振りだ和那の匂い、久し振りに感じる和那の温もり、和那！このままベツトに直行しよう！」

……あ、ヤバい、今のヴァーリーの目は黒歌と白音の二人が発情期に入った時と同じ目をしてる。俺にはしなければいけない事があるのに。

……………話を上手く逸らさない！

「なんでヴァーリはここにいるんだ？」

「クンクン…クンカクンカ…え？アザゼルにコカビエルを回収してきてくれって頼まれたからだけど？」

「…今、喋る前になんか変なことしてなかったか？…気にしたらダメだな。それにコカビエルの回収か、肉体は一切残ってないな。」

「まあ、『和那なら消し飛ばすだろうからコカビエルの羽を回収してきてくれ』って言われたけど」

うん、消し飛ばした。

「それでね、コカビエルの羽を回収したら数日間、和那の傍にいてもいいって！だから和那、数日間朝から晩まで一緒にいよ！」

「…ああ、ヴァーリのこのテンション、さっきまでの重苦しい空気が吹き飛んだな。」

「サンキュウな、ヴァーリ」

「え？なにが？」

「なんでもねえよ」

俺はヴァーリと一緒にアジア達がいる場所に向かって行き、駒王学園に来たメンバーにヴァーリが加わって家に帰った。

ついでにコカビエルの羽は家に帰ってからアザゼルが寝るのに使ってるベッドの上

に送つといた。

………なんか忘れてる気がする。

「ま、いいか、忘れるって事は大したことないってことだしな。」

思い浮かんだボツネタ

俺が正体を喋った時に背中に衝撃が走った。衝撃つつても全然痛く無いんだけどな。問題は俺がアーシア達を抱き締めてる時に攻撃しやがったんだよ！アーシア達に当たったらどうしてくれんだよ！

「あ？誰だ今俺を攻撃したやつは」

「部長！何してるんですか！相手は和那ですよ！」

「黙りなさい！私の領土に天敵である神がいるのよ！消し飛ばすのが当たり前でしょ！」

クズが殺りやがったのか、しかしなんで喋れんだ？『言葉の力』を創ってからそんなに建ってないから途中で効力が切れたのか？

「クズがなにしやがる」

「私がクズですって！」

「クズにクズって言って何が悪い。俺とココビエルとクズ以外は動くな」そして『クズの両手潰れる』

グチャアアアアアア

「ぎやあああああああああ」

まずはクズの両手を潰す、クズは痛みでのたうち回る。

「次はそうだな『両足潰れて裂ける』」

グチャアアアアアア

ブチブチブチブチブチブチ

「がつ！つつつぎやあああああああ」

クズの両足を潰し両足を裂かせる、のたうち回ってたのから痙攣しはじめた。

そして俺は神力を両手に籠め光の槍を作る、太さは握り拳一つ分くらいだ。そしてそれをクズの腹に一本。

ズンツ！

「ぐぎやあああああああああああああつっ！」

神力で創ったんだ、天使や堕天使が作る光の槍とは威力も貫かれた時の痛みも桁違いだ。

そして二本目は胸に刺した、胸と言っても心臓には刺していない、心臓からはずらしてある。

「ぎいやあああああああああああつっ!!」

「俺がコカビエルを潰した後にまだ生きてたら傷を治してやるよ」

俺はクズをほつといてコカビエルに向かって行った。

俺がコカビエルを潰し、戻ってくるのとクズの体の周りは血で真っ赤に染まっていた。顔は涙やら唾やら鼻水やらで酷く汚れている。表情は絶望仕切った顔をしてるし。髪は神力の影響かそれとも血が無くなったからかはたまたまた死の恐怖からか真っ白になっている。股の方に視線を送ると血とは違う液体が出ていた。おそらく痛みや恐怖のあまり漏らしたんだろう。

そして結論はクズは死んでいた。俺はクズの死体はそのままにしてこの一部始終を見ていた者達の記憶を消した。

ボツネタ終了。

さてと、俺の正体を話すとしますか

オツス、コカビエルを潰した和那だ。……………うっわ、なんでかかなり久々な気がするぜ。……………なんでだ？

「えへへく和那く♪」

……………俺は今からかなり真面目な話をしようとしているのにヴァーリは俺に抱き付いてる。……………空気読もうぜヴァーリ……………

「えつと、いろいろと聞きたいことはあるんだけど、和那くん、その女性は誰？」

「え？私？私はヴァーリ、『白龍皇』だよ」

「貴女が『白龍皇』……………」

「そ、これから貴女達も和那と一緒に行動を共にするんでしょ、よろしくね」

「ヴァーリ、優奈は契約をしているがアーシア達は契約はしていないからどうするかはこれから話す」

「あ、そうなの？」

「ああ、それと、真面目な話を今からするから離れてくれないか？」

「……………分かった」
偉く長い間考えたな。

ヴァーリが落ち込みながら部屋から出ていった。……………あの、離れてくれないか？
って言ったが部屋から出ていけなんて言っていないんだが。

「……………彼女凄く落ち込みながら出ていったけどよかったの？」

「……………あとでうんと可愛がるさ」

「……………うん、あとでうんと可愛がろう。……………なんかいろんな意味で搾り取られそうだが。」

「……………取り合えず、改めて俺の名前を言おうか。俺は霧瀬和那。そして、この世界、いや、

全ての世界を創った原初の神『ファイアナ』……いや、むしろ俺は二代目原初の神『ファイナ』の方が正しいか？」

「あの、二代目っていうのと、全ての世界を創ったってどういう事ですか？」

「ん？少し昔話をしようか」

今からずーと昔、どれくらい前だろうか。数百億年？それとももつと昔か？取り合えず誰にも想像がつかないほど昔、まだ宇宙も生まれていない時代だ。そこには闇しかなかった。

そして、その空間に一人の神が生まれた。その神の力はとても強大だった。それこそ神を生み出し世界を創りだす程に強大だった。

そして神は宇宙と地球を創った。神はそのあとに神のみが存在し立ち入る事の出来る世界を創った。その世界を創ったあとに神は他の神を生み出した。

最初に生まれた神とその神によって生み出された神達は世界を、いや、地球を見ていた。そして、神が地球を創ってからどれくらいかの年月が経っただろうか、人類が誕生し、いろんな争いを起こしたりしながら人類は進化していった。

そして人類は娯楽としてアニメ、漫画、小説等を書いたりした。神達もそれらを見ていた、そして面白いと思いつつのシステムを創り出した。それは人の意思が集まり世界を創るシステムだ。そのシステムのおかげでいくつもの世界が生まれた。そして神はもう一つのシステムも創り出した。新しく生まれた世界を管理する神を生み出すシステムだ。これにより一つの世界に複数の神が管理をするようになった。

「……とまあ、まずはここまで話したが質問はあるか？」

「……………」シユー

……ゼノヴィアの頭から煙が出てる。大丈夫か？それほど難しい話じゃないと思うんだが。

「……えっと、その初めて誕生した神様が和那君なの？あれ？でも和那君は二代目って言うってたよね？」

「俺であって俺ではないってところか」

容姿は同じだが性格とか違うからな。

「この世界は一番最初に生まれた世界なんですか？」

「いや、最初に生まれた世界は悪魔等のいない世界だ」

「人の意思が集まって世界を創るシステムってどんななんだい？」

「例えば漫画にしろアニメにしろこんな世界があつたら楽しいだろうな、こんな世界があつたら行って見たいなって思ったことあるだろう？」

「あるな」

……いつの間にかゼノヴィアが復活していた。まだ頭から煙が出てるけど。

「そう言った人間の意思がある程度集まったら世界が創られるシステムだよ。だから人

間は知らず知らずの内に一つ、また一つと世界を創っているんだ」

「ちよつと待って、それだと世界はいくつ存在してるの!」

「無限に近い数の世界があるな。この世界もその一つだ」

「「無限」」

「そんじや、俺の説明をするぞ」

「あ、う、うん」

「俺はさつき話した初めて誕生した神が転生して俺が誕生したんだ」

「神様って転生するの!」

「わりとあるらしいぞ。一つの世界に興味を持った神が自分の力をその世界に会わせてリミッターをかけて、その世界に青年位の年齢で転生するつてのがな」

「それじゃあ和那くんはこの世界に興味を持ったからこの世界に転生したの?」

「いんや、俺は神様としてやっていく為の修業としてこの世界に転生してきたんだ」

「和那さんは原初の神様なんですよね?」

「まあな、俺自身の力は原初の神の足下にと及ばないがな」

「……………うそ」

「……………あれほど圧倒的な力を持っているのか」

「だって俺って修業に使った空間で経過した年月を抜くと二百年ちよいしか生きてない

ぜっ？」

『精神と時の部屋』で過ごした年月をプラスするとどれくらい生きてるんだ？……忘れ
たな。

「二百年……」

「二百年しか生きてないってどういうこと？」

「俺が誕生した事が原初の神のミスなんだよ」

「ミスってどういう事ですか？」

「さっき転生の話をしただろ？ 転生するにもシステムを使うんだ。そのシステムはいろ
んな設定が出来てな、記憶を残したままで神の力を封印して転生とかな」

「原初の神はどんなミスをしたのかな？」

「容姿そのまま、神の力そのまま、なおかつ記憶や性格は消去って設定して転生したん
だ。でもな、原初の神って元は女なんだよ、どういうわけか俺は男として生まれたけど
な」

「……と言うことは和那のその容姿は原初の神の容姿のまま男として生まれたってこと
か？」

「……ああ」

「あれ？でも神の力がそのままなら和那君の力は原初の神と同じじゃないの？」

「神の力って言ったろ、神としての力は同じでも俺自身の力は足下にと及ばない。それに、俺は神の力の全てをコントロール出来てないしな」

「和那くんは原初の神になったけど経験が少ないからいろんな世界を旅して経験を積んで、つてことかな」

「そうだな。でだ、お前らはどうする?」

「どうするつて?」

「優奈は俺の下に来るのは決定してるが、アーシア達は どうする? 特にイリナとゼノヴィアはまだ教会の人間だ。神の不在を知ってしまった以上追放されるだろうな」

「……そう、だよね……」

「……教会を追放か……」

「でだ、アーシア達がとる行動は三つある。いや、一つ目はアーシアは関係無いか、イリナとゼノヴィアの行動だ。神の不在を知った状態で教会を追放され、路頭に迷うつてところか。二つ目はアーシアを入れた三人の行動だ。神の不在を知ったことの記憶を消すこと。三つ目は俺の事も説明したらからかな、俺の下に来る事だ。どれを選ぶ?」

「……記憶を消すつてどれくらい消されるんですか?」

「んー、上手くいけば聖剣を壊したところから、ミスれば今日一日丸々だな」

記憶を消すのは苦手なんだよな。

「どれを選ぶかはアーシア達が決めろ。俺の下に来るのなら俺の『神使』になってもらうけどな」

「……『神使』つなにかな」

「言葉の通り神様の使いだな。でも『神使』になると神に近い存在になるから人間じゃなくなるが」

「……私は和那さんの『神使』になります。私が今こうやっていられるのは和那さんのおかげですから」

「そうか。イリナとゼノヴィアはどうする?」

「私も『神使』になろうかな。和那君のおかげで凄く強くなれたし。それに、和那君も神様だもん」

「私も『神使』にさせてくれ、和那の下にいればもっと強くなれるだろうし。それに、和那といると面白いからな」

「分かった。そんじゃ『神使』にするぞ」

俺はアーシア達に指輪を渡す。

「指輪ですか?」

「ああ、少し痛い但我慢してくれ」

俺はアーシア達の指を少し切る、切って流れ出た血を指輪に少し塗る、そして俺も指

を少し切り、血を指輪に少し塗る。

「これで四人とも俺の『神使』だ」

……でもこれってなんか血の契約って感じだよな。……俺の方が悪魔の契約見てえ。『神使』の契約の方法を考えてる時に偶然この方法が乗ってる本を読んで採用したけど、この方法止めた方がいいだろうか？

ま、方法を止めるかどうかはさておき、新しく『神使』が四人増えたな。家がさらに賑やかになるぞー。

話を終えてヴァーリを呼びに行き、ヴァーリを思いっきり可愛がった。……だが、いろんな意味で搾り取られたの言うまでもない。

停止教室のヴァンパイア

そういうや授業参観があつたな

「よう和那、急に呼び出して悪かつたな」

「ああ、スツゲー悪いよ。なにせ寝ようとしたときに急に呼び出されたんだからな」

「あはは！悪い悪い」

俺が寝ようとしたときに今俺の目の前で笑つてる男、アザゼルに『今から会えないか？』と呼び出しを喰らつた。

「で？俺を呼び出してなんのようだ？」

「まずはゲームやらね？昼間にレースゲームを買つたんだが、相手がいなくて寂しかったんだ」

「……………帰る」

「わー！まてまて！大事な話があるんだよ！」

俺が帰るために転移しようとしたときにアザゼルに抱きつかれた。……………男に抱きつかれるとか嫌すぎる。

「……………で？なんのようだ？」

「ま、ゲームしながら話さね？」

「……………大事な話じゃねえのかよ」

「相手がいなくて寂しかったのはマジなんだよ」

「ま、いいけどさ」

ゲーム好きだし。

「よし、ゲームもセットできた。しかし日本つてのは時間潰しのアイテムが多くていいな。和那が基本日本に居る理由がよく分かるぜ。ほら、コントローラーだ」

「まあな、俺が日本人つてのもあるけどな。あ、コントローラーサンキュー」

海外は旅行に行く位だしな。俺は日本が一番住みやすい。

「あ、ちなみにこのレースゲーム最終的に車壊れるからな」

「マジかよー！」

「ああ、ぶついたり他の車にぶつかったりすると車がどんどん傷ついていく。それで限界を超えると動かなくなる」

「なんでそんな風に作ったんだよ」

「開発スタッフはよりリアルにしたかったらしいぞ」

このレースゲームが出たときに開発スタッフが『これはリアルを追求したゲームです

！』って言ってたはず。

『GO！』

まず一回プレイしてみたの俺達の感想。

「おい！リアルを追求してんのにメチャクチャ車がぶつかってくるんだが！」

……ごもつともで、レースが始まった瞬間から周りの車が一齐にぶつかりにきた。

どこのレースのリアルを追求したんだよ開発スタッフ……

「……この開発スタッフはどここのレースをもとにしたんだよ……」

「……しるかよ……」

無駄に集中したおかげで地味に疲れた。

「……………そういや、話ってなんだ？」

「……………」

アザゼル……………忘れてたな。ま、俺も忘れてたんだけどな。

「……………近いうちに俺達三大勢力のトップで会談をするからな」

「会談？コカビエルが起こした事件についてか？」

「ま、それもあるが和平もしたいしな」

「和平ねえ、まあ今三大勢力が戦争を起こしたら今度こそ滅びるわな」

「ああ、それに、これから起こるであろう戦いにも備える必要があるからな」

「ふーん」

「あんま興味無さそうだな」

「まあな、でも和平はいいと思うぜ」

「それと会談には和那達も参加してもらいたい」

「俺達も？」

「和那達も『神の不在』を認知してるだろ。それにコカビエルが起こした事件に参加してたらならな」

全員『神の不在』を認知してるからなあ、全員連れていった方がいいのか？

「分かった。話はそれで終わりか？」

「ま、こんなとこだな。後は会談の時に話すさ」

「了解、眠いから帰るわ」

俺は今度こそ転移して自分の部屋で寝た。

「ゼノヴィアだ、今日からよろしく頼む」

「紫藤イリナです、ゼノヴィア共々よろしくね」

ゼノヴィアとイリナが駒王学園に転入した。いや、ゼノヴィアが学校に行ったこと無

いって言ったからさ、なら学校に通ってみるか？つて事になってサーゼクスに連絡をして通う事になった。

ついでに聖剣は天界に返した。ゼノヴィアの『デユランダル』は返さないけど、イリナの聖剣が無くなったからどんな武器を創ろうか？と悩み中なんだよな。

俺が創るってだけで同じ聖剣でもチートさに磨きが掛かるからな。

「やあ和那君、久し振りだね」

「和那さま、お久し振りです」

「ああ、久し振りだなサーゼクスにサクヤ」

連絡はしてたけど直接会うのは久し振りだな。

「それでどうしたんだ？放課後とはいえサーゼクスとサクヤが駒王学園に来るなんて珍しー」

「ちなみに俺達は今屋上にいる。俺が屋上で時間を潰してる時にサーゼクスとサクヤが屋上に来たんだよ。」

「いやなに近いうちに授業参観があるだろう。それで休暇を入れたのさ」
「なるほど」

「授業参観か、完璧に忘れてたな。来るかどうかは分かんないがグレイフィアに話すかな。」

「それと会談をこの学園で執り行おうと思っただけでね、会談の下見も目的の一つなんだよ」

「会談ここですか。」

「それと和那君、リアスが喋れなくなってるんだけどなにかしたのかな？」

「いんや、なにもしてないぞ」

「無能王にはなんもしてないよな？多分、でもなんか忘れてる気がする。」

「ところで寝泊まりする場所は決めてるのか？」

「いや、今から探すところだよ」

「じゃあ俺の家に来るか？」

「そうだね。サクヤもグレイフィアと会いたいだろうし」

「じゃ、決まりだな」

家に戻ってから起こった事はまず優奈がサーゼクスに謝った。ま、サーゼクスは無能王の『眷族』をやめた事はあるまり気にしてなかったみたいだが。

まあ、俺が大体の事は説明してたからな。それとグレイフィアとサクヤは姉妹二人で

話をしてる。……グレイフィアに授業参観の話をしたときは凄い勢いで来るって言ったな。

「サーゼクス、酒飲むか？」

「いいのかい？なら飲むうか、和那君が作る酒は美味しいからね！」

俺は何本か酒を出す。一本はアルコール十%程の酒『ほろ酔い』これはどれだけ飲んでもほろ酔いで酔いが止まるように俺が作った。二本目はアルコール五十%程の『酔いどれ』これはほろ酔いと同じで酔いどれで止まる。ちなみにどんだけ飲んで酔い潰れて寝る事はない。三本目はアルコール九十九%の『皆殺し』こいつは俺以外は飲みきる事は出来ない。一口飲んだだけでアウトだ。殆どアルコールだしな。

ちなみにこの三本はメチャクチャ旨くてメチャクチャ飲みやすい。だから大抵は『ほろ酔い』から始まり『皆殺し』で終わって俺以外が翌日使い物にならなくなる。

翌日に予定が無いときにしか『皆殺し』は飲めない。俺はどんだけ飲んで大丈夫なんだけだな。

「まずはこれから飲むうかな」

サーゼクスが三本のうち一本取りグラスに注ぐ。

「あ、そいつは」

「……………」

ドサツ

サーゼクスが酒を一口飲んだ瞬間酔い潰れる。

「そいつは『皆殺し』だって言おうとしたのに……」

全部無色透明なのが問題か……コーティとキノは普段酒飲まない。グレイフィアは邪魔する訳にはいかないだろ、それにグレイフィアはそんなに酒に強くないし。黒歌達は未成年だから飲ませられないしな。

……仕方ない、俺一人で飲むか。俺は日付が変わるまで一人寂しく『皆殺し』を飲んだ。

翌日のサーゼクスは二日酔いになりサクヤに怒られていた。

サーゼクスとサクヤが来てから数日の間町の下見って言うたが他人から見ると観光にしか見えねえ。だってさ、ゲーセン行ったりハンバーガーショップ行ったり神社行ったりな。真面目にやってんだけど全部楽しんでるし。ま、それがサーゼクスの良いところなんだろうけど。

さてと、今日が授業参観の日なんだが、駒王学園は正確には『公開授業』だ。学生の両親の他にも中等部の学生が授業風景の見学も可能だ。しかも中等部の子も保護者同伴で見学可能……フリーダム過ぎるだろこの学園……

オマケに中等部も見学に来るから高等部のやつらは緊張するのが以外に多い。確かに中等部の目の前で間違えたら恥ずかしいよな。

このクラスで一番キツイのはアーシアとゼノヴィアだな。ひらがなとカタカナは大丈夫なんだけど漢字がな……

「ところで霧瀬、ちよつと手を見せなさい」

「いきなりなんだよ」

桐生は俺に近づき声をかけてくる。

「いいじゃない。ちよつと見るだけよ」

桐生は俺の手を取り、俺の爪を見る。……………今、メガネが光ったきが。

「……結構、深爪ね」

「深爪が問題あるのか？てか、なんで俺の爪を見る？」

「だってこのクラスに転入してきたアーシア、ゼノヴィア、イリナって霧瀬と一緒に暮らしてるんですよ、オマケにコーティ達も霧瀬と一緒に暮らしてる。となればもう確認するしかないでしょ！」

「一体なんの確認なんだよ？」

「深爪の男は女遊びが激しいと聞くわ。——そう、女体をまさぐるのに爪が伸びているといういろいと不便なものね」

あー、そんなこと聞いたことあるな。

「そりゃあ、大切な女性を傷付けたくないしな」

授業が始まり後ろの扉からクラスメートの両親が入ってくる。ちなみにグレイフィ

アは一番乗りで入ってきた。

それで今の授業は英語なんだが、男性教諭は俺達になぜか紙粘土を渡してきた。……英語と紙粘土の関係は？

「いいですか、今渡した紙粘土で好きなものを作ってみてください。動物でもいい。人でもいい。家でもいい。自分が今脳に思い描いたありのままの表現を形作ってください。そういう英会話もある」

……いや、そんな英会話聞いたことない。……この人になにが会ったんだろう……少し前まで普通の授業だったのに。

「レッツトライ！」

取り合えず作るか。なにを作ろう？……『神使』の皆を作るか。それとヴァーリと朱乃も作ろう。

まずはコーティとキノを作ってつと、ドラゴンとしての姿は……時間がかかるだろうし全員作ってから時間が残ってたら作ろう。

次は黒歌と白音（ネコミミとシッポ有り無しバージョン）とグレイフィアを作ったところで紙粘土が無くなった。

「スミマセン、紙粘土無くなったんで新しいの貰ってもいいですか？」

「いいですよ、どんどん使ってください！」

新しく紙粘土を貰い、アーシア（制服とシスターバージュン）と優奈とイリナとゼノヴィア（制服と教会の戦闘服？バージュン）とヴァーリと朱乃を作った。

「き、霧瀬くん……」

先生が俺の肩に手を置いた。心なしか手が震えてる気がする。

「素晴らしい！君はいろんな才能があつたがまさか紙粘土でここまでの芸術品を作るなんて。やはりこの授業は正解だった！」

……これ英語じゃなくて完璧に美術の授業だよな。

「霧瀬！一個につき一万払う、俺に売ってくれ！」

「俺は倍の値段を払う！俺に全部プリーズ！」

……ここに通ってる学生は金が有り余ってるのか？

「つか、誰にも売らねーよ」

「和那兄さまって器用ですよね」

「そうか？」

今は昼休み、クラスメートが売ってくれ売ってくれ！嫌いから教室から出てきた。その時に自販機に飲み物を買いきていた白音と遭遇した。

白音の話だとさっきの授業で俺が作った物の話は白音の方にも伝わってるらしい。

「あ、和那くんと白音ちゃん」

「優奈先輩も飲み物を買いに来たんですか？」

「違うよ、なんか魔女っ子が撮影会をしてると聞いてね、ちよつと好奇心で見に行つて見ようかなって」

「魔女っ子？」

……なんだろう、その魔女っ子……知ってるやつのが気がする……

カシヤカシヤ!

カメラを持った男達が廊下の一角で撮影をしていた。人だかりが出来てた。この人だかりの先に魔女っ子がいるんだろう。

「凄い人だかりだね、魔女っ子が全然見えないよ」

「和那兄さま、魔女っ子って多分あの人ですよね」

「え、二人とも知ってるの?」

「ああ、魔女っ子つつか魔王少女だな」

「魔王少女?」

「見たら分かるさ」

俺達は人垣を通り抜け魔女っ子のそばに向かつて行つた。

「やっぱりセラか」

「あ、和那ちゃん☆おひさ〜☆」

セラは俺を見つけると抱きついて来た。

「セラフォルーさんお久し振りです」

「白音ちゃんもおひさ〜☆」

「今回はコスプレか？ 魔王少女」

「む〜☆魔王少女じゃなくて魔法少女だもん」

「え？もしかして彼女って」

「ん？魔王少女ことセラフォルー・レヴィアタンだ」

「よろしくね〜☆」

「ええええええええええええええええ!!」

ちなみにこんな話をしてるが大丈夫だ、俺達以外はただの世間話にしか聞こえない。

「オラオラ！ 天下の往来で撮影会た〜いいご身分だぜ！」

匙の声が届くこえるけど人だからせいぞろい姿が見えないな。

「ほらほら、解散解散！ 今日公開授業の日なんだぜ！ こんなところで騒ぎを作るな！」

さすがは生徒会、ちゃんと仕事してるな。かなりの人数がいたハズなのに人だからが無くなった。

「あんたもそんな格好をしないでくれ。つて、もしかして親御さんですか？ そうだとしても場に合う衣装つてものがあるでしょう。困りますよ」

「えー、だって、これが私の正装だもん☆」

「なあ匙」

「なんだ、霧瀬」

「お前セラに会ったこと無いのか？」

「コスプレする人に知り合いなんているわけ無いだろ」

匙よ、自分の王の姉の顔ぐらい知つとけよ。いや、それよりも悪魔なんだから魔王の顔ぐらい知つとけ。

「何事ですか？ サジ、問題は簡潔に解決しなさいといつも言って——」

ソーナと他の生徒会メンバーとサーゼクスも合流か。……ソーナは精神面でヤバくなりそうだな。

「ソーナちゃん！ 見つけた☆」

「え、会長の知り合い？」

「知り合いつつか、姉だな」

「えー！姉って事はー！」

「ああ、セラフオルーか。キミもここへ来ていたんだな」

サーゼクスはセラが来てることを知らなかったのか？お互いに見にこよう！って話してると思ったんだが。

「姉でセラフオルーって事は……レヴィアタンさま!!」

「セラって魔王に見えないよなー。それを言ったらサーゼクスもだけど」

「魔王さまに向かつて失礼だぞー！」

大丈夫だって。

「ふむ。セラフオルー殿。これはまた奇抜な衣装ですな。いささか魔王としてはどうかと思いますが……」

「あら、おじさま☆ ご存じないのですか？ いまこの国ではこれが流行りですよ？」

まあ、一部の人（オタク）には流行りだろうな。

「ほう、そうなのですか。これは私が無知だったようだ」

「ハハハハ、父上。信じてはなりませんよ」

しっかし、現四大魔王って普段から軽いのにプライベート時にはさらに軽さに磨きがかかるよな。

「ソーナちゃん、どうしたの？ お顔が真っ赤ですよ？ せつかくお姉さまである私と

の再会なのだから、もっと喜んでくれてもいいと思うのよ? 『お姉さま!』『ソータん!』つて抱き合いながら百合百合な展開や和那ちゃんを加えた三人での展開でもいいと思うのよ、お姉ちゃんは!」

ソーナも大変だよなー、俺にもしこんな姉がいたら俺はどうすんだろうな……

「……お、お姉さま。ここは私の学舎であり、私はこの生徒会長を任されているのです……。いくら、身内だとしてもお姉さまの行動は、あまりに……。そのような格好は容認できません」

「……和那くん、セラフォルーさまっていろんな意味で凄いな」

「まあな、疲れないコツはさつさと馴れる事だ。なんせ現四大魔王のプライベートはあんな感じで軽いから」

「うう、もう耐えられません!」

ソーナが目元を潤ませながらカオスとも言える場所から走り去っていく。

「ついに限界が訪れたか」

「待って! ソーナちゃん! お姉ちゃんを置いてどこに行くの!」

セラがソーナを追いかけて行く。……セラが追いかけたらダメだろう。

「ついてこないでください!」

「いやあああん! お姉ちゃんを見捨てないでええええええつ! ソータあああん

！」

『たん』付けはお止めになつてくださいとあれほど！」

もしもソーナが男なら将来剥げてるだろうな。そういや……

「匙つてソーナが好きなんだろ」

「なんでその事を！」

「バレバレだつての。でだ、ソーナと結婚したいならまずはセラに認められるよ。『俺はできちゃった婚をするぜ！』とか考えてんならセラに確実に殺されるからな」

「……真剣で？」

「真剣で♪」

「ウソだろおおおおおおおつ！」

無能王、お前自分の立場理解してんのか？

「よお、アザゼル」

「お、来たか」

俺はアザゼルに呼ばれて今『神の子を見張る者』に來ているんだが

「俺、数日前にもアザゼルに呼ばれなかったか？」

「そこは気にするな。それに今回はヴァーリのお願いなんだよ」

「ヴァーリが？」

もうすぐ会談をするし、会談の前に行うことあったか？

「ヴァーリが『赤龍帝』に会いたいんだと」

「は？」

え？今なんだった？ヴァーリが変態に会いたい、なんで……ライバル対決の宣戦布告でもするつもりか？

……いや、それはないな。だってヴァーリは今までの『白龍皇』や『赤龍帝』の『宿命』には興味ないし。

「うわあ、見た感じいい学校ー」

「まあな、生徒の中には変態もいるけどな」

「学校って平和だよな」

「ま、殺しとかとは無縁な場所だな」

……いや、イジメが原因で生徒が自殺する学校があるな。でもさ、あのニュースを見るたびに思うんだよ、自殺する勇気があるんならさ、その勇気をイジメを解決する方に向けられないもんか?とな。

「霧瀬、帰ったんじゃないかったのかよ」

「おお、イツセー。お前によろがあるんだよ」

「俺に？いや、それよりもお前の隣にいる美少女は誰なんだよ！」

変態は俺の隣、つまりヴァーリを指差す。

「私？私はヴァーリ。『白龍皇』のヴァーリだよ、よろしくね」

「あ、これはどうもご丁寧に。俺は兵藤一誠です」

ヴァーリは変態に笑顔を向けながら挨拶をする。変態はその流れのまま同じく挨拶をする。……おい、『白龍皇』についてのツツコミないのか？

「……………つて、『白龍皇』！」

おつそ！気づくのおつそ！

「ふーん」

ヴァーリは変態の周りを歩きながら変態の体を見ていく。

「和那、今回の『赤龍帝』つてとても弱いんだね」

「まあな、確実に『赤龍帝』の中じゃ最弱だろうな」

「俺だつて自覚してるんだから改めて言うんじゃねえよ！」

「でも、真っ直ぐでいい目してる。確実に強くなるよ」

あー、確かに。変態だけど強くなるために努力を惜しまない目してるんだよな。

「ねえ兵藤一誠、キミはこの世界で自分が何番目に強いと思う？」

「俺が何番目に強いかな？」

「そ、コーティとキノの二人が少しだけ組み手をしたって言ってたけど、必要最小限しかしてないって言ってたし。うーん、今の状態だとバランスブレイカーは体の一部を差し出す未完成な状態かな？まあ、その未完成のバランスブレイカー状態で上から数えた場合、四桁——千から千五百の間ぐらいかな。あー、でも宿主のスペック的にはもつと下かな？」

まあ、大体そんなところか？もつとも、本人のスペックが低すぎて下手したら二千よりも下の可能性もあるけど。

「この世界は強い者が多いんだよ。『紅髪の魔王』って呼ばれるサーゼクス・ルシファーでもトップ10……ううん、下手したら20よりも下にいるし」

「マジかよ！サーゼクスさまよりも強いのがそんなにいんのかよ！」

「でも、今この世界の一位は決まってるんだ」

「？ 誰のことだ。自分が一番とでも言うのかよ？」

「残念不正解、私の強さは六から十位の間。そして、一から五位に敵うだけの戦力はこの世界には無いよ」

だろうなあ。つか、トップ10のほとんどが俺や俺の『神使』だよな。

「あれ？兵藤一誠が固まっちゃった」

「そりゃそうだろ。あんなこと言われたら誰だって固まる」

世界中の実力者が揃っても勝てない存在がいるなんて言われたらな。

「ま、いいか。兵藤一誠の実力はしれたし帰ろっか」

「そうだな、帰るか」

俺達は今会談がある駒王学園の新校舎にある職員会議室にいる。ちなみに結局俺達は全員で会談に来てる。だって全員神の不在を知ってたんだし。

で、今は会談が始まる予定の三十分前なんだけどさ

「ソーナ、リアス・グレモリーはどうした？」

「リアスなら部室に待機していると思いませんか？」

おい、なんで一番の下っ端が最後に来んだよ。ソーナ達は一番最初に来てたぞ。ちなみに俺達と勢力のトップであるサーゼクス達はほとんど同じタイミングで集まった。それと俺は神の姿でいる。神の姿でいた方がいいだろ？

会谈が始まる少し前に無能王が入って来た。さも自分達が一番最後に来るのが当たり前というように。

「おい、リアス・グレモリー、なぜお前が一番最後に入ってくる」

「喋るんなら日本語を喋ってくれ。そしてお前は自分の立場をちゃんと理解してんのか

？俺達は神と神の使い、サーゼクス達は各勢力のトップなんだぞ。そしてお前は俺達からすれば一番の下っ端、下っ端であるお前が一番最初に来るべきだろ。それが常識つてもんだ。俺の言ってること間違ってるか？」

「なになに？この失態は私の命で許して下さい？」

「和那、違うみたいだぞ？」

「では、この場で腹切りをします？」

「それも違うみたい」

俺、実を言うと読心術って苦手なんだよな。今のところ成功率は二割つてところだ。「リアス、和那君の言ってることは正しい。今回は会談の方が大切だから不問にするが、次からは気をつけてくれ」

不問ねえ……やっぱりサーゼクスは無能王に甘いな。

そして無能王よ、なぜ俺を睨む。お前が悪いんだろ、俺を睨むのはお門違いだ。

会談つてしてると時間長く感じるよな

「全員がそろったところで、会談の前提条件をひとつ。ここににいる者達は、最重要禁則事項である『神の不在』を認知している」

「そういう俺、ここに来た時代が時代なだけに『聖書の神』の姿つて想像でしか知らないんだよな。」

「だって、時代から考えてカメラとかないし。」

「ぶっちゃけ、ミカエル達から聞いた外見の特徴からの自分の想像です。」

「……今度絵を描いてもらうかな。」

「では、それを認知しているとして、話を進める」

「俺達と三大勢力のトップが揃った会談はサーゼクスの一言から始まった。」

「と、というように我々天使は——」

ミカエルが喋り

「そうだな、そのほうが良いのかもしれない。このままでは確実に三勢力とも滅びの道を——」

サーゼクスがその話を受け答えしていく。

「ま、俺らは特にこだわる必要もないけどな」

アザゼルはたまに喋り、その一言で会談をしているこの場が凍り付くこともあるが、アザゼルはわざと凍り付かせて楽しんでるな。

でも、アザゼルのその気持ちは分かる。

俺がアザゼルの立場なら同じようにして楽しんでるのが想像出来る。

「さて、和那くん。そろそろ、先日の事件について話してもらいたいんだけど」

「ん？ ああ、分かった」

どこから話すか、ミカエルから連絡がきたところから話すか。

「——以上が、俺達が関与した今回の事件の報告だな」

「さて、アザゼル。この報告を受けて、墮天使総督の意見を聞きたい」

「先日の事件は我が墮天使中枢組織『神の子を見張る者』の幹部コカビエルが、他の幹部及び総督の俺に黙って、単独で起こしたものだ。奴の処理は……まあ、和那が行った通り消し飛ばされた訳だ」

「そういや、俺が関与しなかったらコカビエルの処理はどうしてたんだろうな？」

「説明としては及第点の部類ですが——あなた個人が我々と大きな事を起こしたくないという話は知っています。それに関しては本当なのでしょうか？」

「ああ、俺は戦争に興味なんてない。それにコカビエルが俺のことをこきおろしていたのはそつちも知ってるだろ」

まあ、アザゼルは戦争に興味なくて、コカビエルは戦闘狂だからなあ。

「アザゼル、ひとつ訊きたいのだが、どうしてここ数年神器の所有者をかき集めている？ 最初は人間達を集めて戦力増強を図っているのかと思っていた。天界か我々に戦争をけしかけるのではないかとも予想していたのだが……」

「そう、いつまで経ってもあなたは戦争をしかけてこなかった。『白い龍』を手に入れたと聞いたときには、強い警戒心を抱いたものです。しかも、和那様が鍛え、我々とは比

べ物にならないほどの実力者になってますし……」

あははく、いやあ、ヴァーリってスポンジのように吸収していくからさあ、鍛える方にも熱が入っちゃって。

「神器研究のためさ。なんなら、一部研究資料もおまえたちに送ろうか？　って研究していたとしても、それで戦争なんざしかけねえよ。戦に今更興味なんてないからな。俺はいまの世界に十分満足している。部下に『人間界の政治にまで手を出すな』と強く言い渡してるぐらいたまぜ？　宗教にも介入するつもりはねえひ、悪魔の業界にも影響を及ぼせるつもりもねえ。——つたく、俺の信用は三すくみのなかでも最低かよ」

「それはそうだ」

「そうですね」

「その通りね☆」

「まあ、普段がなあ」

サーゼクス、ミカエル、セラ、そして俺の順に喋る。

しかし、アザゼルの信用度低いなー。

「チツ。神や先代ルシファーよりもマシかと思つたが、お前らもお前らでめんどくさい奴らだ。つか和那もかよ……」

俺はアザゼルが面白いから好きだけどな。

神器の研究してゐる施設とか結構おもしろいな。

秘密研究所みたいでさ、ワクワクする。

「そこそ研究するのもこれ以上性に合わねえか。あー、わかつたよ。——なら、和平を結ぼうぜ。もともとそのつもりもあつたんだろ？ 天使も悪魔もよ？」

あれ？ 俺達は入つてないのか？ ま、いいか。

「ええ、私も悪魔側とグレゴリに和平を持ちかける予定でした。このままこれ以上三すくみの関係が続けていても、いまの世界の害となる。天使の長である私が言うのも何ですが——戦争の大本である神と魔王は消滅したのですから」

……消滅つて、ミカエル、言い方結構キツいな。

「ハッ！ あの堅物ミカエルさまが言うようになったね。あれほど神、神、神さまだつたのにな」

「……失つたものは大きい。けれど、いないものをいつまでも求めても仕方ありません。人間達を導くのが、我らの使命。神の子らをこれから見守り、先導していくのが一番大事なことだと私達セラフのメンバーの意見も一致しています」

「おいおい、いまの発言は『堕ちる』ぜ？ ——と思つたが、『システム』はお前が受け継いだんだつたな。いい世界になつたもんだ。俺らが『堕ちた』頃とはまるで違う」

……アザゼルは今の性格だと現在でも『堕ちる』んじやねえかなあ。

女好きだし、……………俺も人のこと言えないな、スミマセンでした！

それと、専門用語多すぎだ、若干名理解してないやつがいる。

「我らも同じだ。魔王がなくなると種を存続するため、悪魔も先に進まねばならない。戦争は我らも望むべきものではない。——次の戦争をすれば、悪魔は滅ぶ」

「そう。次の戦争をすれば、三すくみは今度こそ共倒れだ。そして、人間界にも影響を大きく及ぼし、世界は終わる。俺らは戦争をもう起こせない」

「神がいけない世界は間違いだと思うか？ 神がいけない世界は衰退すると思うか？ 残念ながらそうじゃなかった。俺もお前達も今こうやって元気に生きている」

世界が滅びるのって基本的にその世界の寿命か、魔法とかがある世界だと発展しすぎて滅びの道をたどるんだよな。

「——神がいなくても世界は回るのさ」

この世界を管理してる神はいるけどな。

もつとも、管理してても滅びる世界は滅びるけどな。

「——と、こんなところだろうか？」

サーゼクスのその一言でその場にいる奴らが大きく息を吐いた。

だいたい、会談が始まって一時間ぐらいか？ 会談ってその場の独特の空気からか、

時間が長く感じるよな。

「さて、そろそろ俺達以外に、世界に影響及ぼしそうな奴らへ意見を訊こうか。この世界を創った神様と無敵のドラゴン様にな。まずは和那、お前は世界をどうしたい？」

俺も言わなくちゃ駄目なのか。

今まで会話に全然参加してなかったのに、急に話を降られた。

つか、俺の『神使』には聞かないのかよ。

いや、世界に戦争を仕掛けないけどさ。

「俺は別に世界に戦争を仕掛けるつもりはないし、和平をするのは賛成だ」

「和那の答えは予想出来たけどな。次はヴァーリだ」

なら俺に話を降るなよ……

「私も別に、和那と一緒にいらればそれでいいし」

「じゃあ、赤龍帝、お前はどうか？」

「正直、よくわからないです。なんか、小難しいことばかりで頭が混乱してます。今まで

悪魔とかは空想の存在でしたから。それに、世界がどうこう言われてもなんとというか、

実感わきません」

だろうなあ、悪魔とかを知ったのもつい最近だし。

そんな奴に世界がどうこう言われても実感ないよな。

「だが、お前には世界を動かすだけの力を秘めた者の一人だ。選択を決めないと俺を始

め、各勢力の上に立っている奴らが動きづらくなるんだよ」

そんなこと言われても困るだけだと思っけどな。

「兵藤一誠、では恐ろしいほどに嘯み砕いて説明してやろう。俺らが戦争したら、お前も表舞台に立つ必要が出てくる。そうなれば忙しくて誰も抱けないぞ」

「——ッ！」

ん？なんか、話の流れが変な方に……

「和平を結べば戦争する必要もなくなる。そうしたら、あとに大事なのは種の存続と繁栄だ。——毎日、悪魔と子作りに励むことが出来るかもしれない。おまけに和平をすれば堕天使とも子作りが出来るかもな。どうだ？わかりやすいだろう？ 戦争ならセ〇クスはなしだ。和平ならセ〇クスしまくりだ。お前はどっちを選ぶ？」

説明の仕方最低だな！ そして変態、なんだその顔は！ エッチしまくり！ なら俺は和平を選ぶ！ 見たいな顔は！

「和平でひとつお願います！ ええ！ 平和ですよ！ 平和が一番です！ 悪魔や堕天使とエッチがしたいです！」

会談してる場所なのに欲望丸出しだな！ 逆に清々しいわ！

しかも周りの奴ら苦笑してるぞ……アザゼルは笑ってるけどな。

あ、サーゼクスも小さく笑ってる。

「えつと……。俺、バカなんでこの会談の内容も九割ぐらい意味不明です。でも、俺が言えるのは、俺に宿る力が強力なら仲間のために使います。もし俺の仲間が危険に晒されたら俺が守ります！ ……って、俺、まだまだ弱いんですけどね。けど、俺が出来るのはそれぐらいですから。体張って仲間と共に生きていこうかなって——」

変態がさっきの発言から一変して真面目に語っているときに変態……いや、俺達とサーゼクス達以外の奴らの時間が止まった。

キノ……いつそんなの作ったんだ?そして、忘れられた
相手にご愁傷さま

「……あら?」

「おつ、赤龍帝の復活だ」

ようやく動けるようになったのか。

「な、なにかあったんスか?」

「テロだよ。ま、当たり前だけどな。各勢力のトップが集まってんだ、狙われない訳がない」

俺がそれをいうと変態がスッゲー驚いてる、テロに狙われるなんて予想してなかったみたいだな。

いや、予想しろよ……各勢力のトップ集まってんだぞ。

それと、今動けないのは朱乃、ソーナ達、ついでに無能王だ。

逆に動けるのは俺、俺の『神使』、ヴァーリ、サーゼクス達だな。

「外、見てみる?」

アザゼルはあごで窓のほうを示し、変態は会議室の窓ガラスから外を見ようと近づいていく。

カッ！

そのときに閃光が広がる。

しかし、テロとか面倒だな……。

「攻撃を受けているのさ。いつの時代も勢力と勢力が和平を結ぼうとすると、それをどこぞの集まりが嫌がって邪魔しようとするもんだ」

……それにしても、スッゲー人数だなあ。

だってさあ、校庭、空中に数百人の魔法使いがいるんだぜ。

しかも、なにげに増えていつてるし。

「いわゆる魔法使って連中だな。悪魔の魔力体系を伝説の魔術師『マーリン・アンブロジウス』が独自に解釈し、再構築したのが魔術、魔法の類いだ。……放たれている魔術の威力から察するに一人一人が中級悪魔クラスの魔力を持ってやがりそうだな」

あ！ そういや……。

「なあアザゼル、コイツらが時間停止したのはなんでだ？」

「考えられるのは時間停止能力の『神器』セイクリッド・ギアを奴らが所持してるか、……いや、サーゼクス、ここにいない連中で時間停止能力の『神器』セイクリッド・ギアを

持つてる眷族とかいるか?」

「……リアスの眷族にコントロール出来ない時間停止の『神器』セイクリッド・ギアを持ったハーフヴァンパイアの眷族がいる」

あー、確実にソイツの『神器』セイクリッド・ギアを強制的に『禁手』バランス・ブレイカー状態にしたな。

ここにいないってことはソイツいる場所って旧校舎だろ? よくもまあここまで届いたもんだ。

そんだけ潜在能力が高いってことか……。

しかし、この学園は結界に囲われているってのに、コイツらは結界内に出現してきた。

つーことはこの敷地内と外の転移用魔方陣とゲートを繋げてる奴がいるってことだが……多すぎてわかんねえって。

「タイミングもドンピシャだし、案外裏切り者がいるのかもな」

「確かにな、こちらの内情に詳しい奴となると、上級や最上級ってところか」

「面倒だしテロリストの活動拠点になってる旧校舎を吹っ飛ばすか?」

案外ここからはわかんなくとも旧校舎にいけば繋げてる奴がいるかもしんねーし。

「和那君、そういうのはやめてもらえないかな?」

あ、ヤツパリ?

「そういやアザゼル、テロリストの組織の名前なんだっけ？」

「お前忘れたのかよ……『渦の団』カオス・ブリゲードだ」

あー、そうそう、渦の団カオス・ブリゲードだ。

「アザゼル、その『渦の団』カオス・ブリゲードとはなになかな？」

「組織名と背景が判明したのはつい最近だが、それ以前からもうちの副総督シエムハザが不審な行為をする集団に目をつけていたのさ。そいつらは三大勢力の危険分子を集めているそうさ。なかには『禁手』バランス・ブレイカーに至った『神器』セイクリッド・ギア持ちの人間も含まれている。『神滅具』ロンギヌス持ちも数人確認してるぜ」

「その者達の目的は？」

「破壊と混乱。単純だろう？ この世界の平和が気に入らないのさ。——テロリストだ。しかも最大級に性質が悪い」

あれ？ もしかして俺、詳しくテロリストの話聞くのって初めてじゃね？ 確か前に聞いたのは組織の名前だけだったきが……。

「組織の頭は『赤い龍』ウエルシュ・ドラゴンと『白い龍』バニシング・ドラゴンの他に強大で凶悪なドラゴンだったんだが……」

ん？ 『赤い龍』ウエルシュ・ドラゴンと『白い龍』バニシング・ドラゴン以外の強大なドラゴン？ あれ？ もしかしてコーティかキノ？

「その頭である『無限の龍神』ウロボロス・ドラゴンオフィスは和那と一緒にいんだよな」

「……和那くん」

「なんだよサーゼクス」

「……オーフィスとはどれぐらい一緒にいるのかな?」

「まあ、百年は一緒にいるな。つかキノ、いつそんな組織作ったんだ?」

「ん? んー……」

俺がキノにいつテロ組織なんて作ったのかを聞くとキノは首を傾け考えるしぐさをする。

「忘れた。多分和那とあうズツト前?」

「……そうか」

トップに忘れられた組織、ご愁傷さま。

「アハハハハ! 頭に忘れられたのに活動し続けるテロ組織、笑いがとまんねー!」

アザゼルが腹を抑えながら笑う。

……まあ、確かに笑うな。

『そう、オーフィスが「渦の団」カオス・ブリゲードのトップです』

声とともに会議室の床に魔方陣が浮かび上がり、誰かが転移してくる。

……つか、声の主よ、おまえはどこから聞いてどこで聞くのを止めた。

「この魔方陣はまさか……」

「知ってるのか、グレイフィア」

「はい、これはレヴィアタンの魔方陣です」

「え……？　でも僕の知ってるセラフォル・レヴィアタンさまの魔方陣の模様はこれじゃないですよ？」

「確かにセラが使う魔方陣とは違うな。つまり旧魔王レヴィアタンが使う魔方陣か」

「和那の言った通りだろうな。ヴァチカンの書物であの魔方陣を見たことがある」

「旧魔王のレヴィアタンってまだ存在してたんだ。私今知った」

まあ、ヴァーリは旧魔王や現魔王とかにはたいして興味ないからな。

しかし、旧魔王であるレヴィアタンの魔方陣か……旧魔王は死んでるからその血筋か。

そして魔方陣から一人の女性が現れる。

胸元が大きく開いていて、深いスリットが入ったドレス……悪魔って以外と服装を気にしない奴が多いよな。

「ごきげんよう、現魔王のサーゼクス殿」

「先代レヴィアタンの血を引く者。カテレア・レヴィアタン。これはどういうことだ？」

こうしてここに現れるってことはこいつは『渦の団』カオス・ブリグードに協力したってことだよな。

協力したとして、カテレアだけか、それとも旧魔王派全員か……。

「旧魔王派の者たちはほとんどが『渦の団』カオス・ブリグードに協力することに決めました」

旧魔王派のほとんどかよ、……まあ、旧魔王派はそんなに人数がいらないだろうが。

「新旧魔王サイドの確執が本格的になってきたわけか。悪魔も大変だな」

アザゼルは他人事のように笑いながら喋る。

……確かに他人事ではあるな。

「カテレア、それは言葉通りと受け取っていいのだな?」

「サーゼクス、その通りです。今回のこの攻撃も我々が受け持っております」

「——クーデターか」

クーデターねえ、会議室に転移してくるとは堂々もしてんなあ。

「……カテレア、なぜだ?」

「サーゼクス、今日この会議のまさに逆の考えに至っただけです。神と先代魔王がいなのならば、この世界を変革すべきだと、私たちはそう結論付けました」

「神の不在と三大勢力の和平、それをすべて知った上でのクーデターってのはわかった

が、おまえたちにそれが出来るほどの力があるのか？」

俺の問いかけにカテレアは答える。

「私たちの組織のトップはあなたたちの知る最強の龍の一人です。彼は力の象徴としての、力が集結するための役を担うだけです。彼の力を借り、一度世界を滅ぼし、もう一度構築します。——新世界を私たちが取り仕切るのです」

「うわ、つまんねー。おまえたちが取り仕切る世界なんか興味のひとかけらもないっての。つーかさあ、オーフィスじたいおまえらの組織に百年以上顔出してねえんだろ」

「なぜあなたがそのことを知っているのです!」

「なぜって、オーフィスは俺と百年近く一緒にくらししてるからな。なあ、オーフィス」

「ん。我はもう組織のトップじゃない。我は和那とズット一緒にいる」

「……その女性是谁ですか」

あれ? 気づいてない? ……ああそっか、気配を消してるのと保険として指輪にも気配を遮断する術式を取り込んでるからか。

「オーフィス、指輪外してもいいぞ」

「いいの?」

「ああ」

「わかった」

キノは指に嵌めている指輪を外す。

するとキノから龍の気配が漏れ出す。

「この気配はまさか!」

「つー訳だ、オーフィスはもうおまえらの組織のトップじゃねえよ。それとオーフィスじゃなくて今の名前はキノだがな」

「なぜですオーフィス! なぜあなたがそこにいるのですか!」

「今の我は静寂なんていらぬ。和那やコーティたちと一緒に暮らすしていくのがとても幸せ。だからもうトップをする必要はない」

「だとさ、どうする? 最強の龍という後ろ楯がなくなつたぞ」

「く、例えそうだとしても目的はかわりません!」

「そうかよ、なら表にでな。テメエの目的ごと俺が消滅させてやるよ」

俺はカテレアの首根っこを掴み、会議室の外に投げ飛ばす。

あ、これじゃ表にでな、じゃないな。

タイトルが思い浮かばない……

「さてと、カテレアをぶっ飛ばしますかね」

カテレアを会議室の外に投げた俺は首をコキコキと鳴らしながらカテレアを投げた方に歩いていく。

「あ、そうだ。グレイフィアはこの時間停止をしてる奴のところについて連れてきてくれ。グレイフィアなら面識があるだろうからすぐについてくるだろ」

「かしこまりました。ですか、『神器セイクリット・ギア』が強制的に『禁手バランス・ブレイカー』の状態にされた『神器セイクリット・ギア』は私にはどうにもできませんが……」

あー、そうだよな。

それを聞いた俺は空間を歪め、一つの腕輪を取り出す。

「これを持っていけばいい」

「……この腕輪はなんでしよう?」

「俺が作った腕輪。それを腕につけると『神器セイクリット・ギア』を無効化するんだよ」

「かしこまりました」

「サーゼクス、グレイフィアを行かせるけど問題ないよな？」

「問題ないよ。というか、今の私たちは動けないからね、文句の言いようがないよ」

そりやそうだ。

魔法使いは『神使』にまかすか。

俺は歪めた空間から一振りの剣を出す。

「ほれ、イリナ、これを貸すから皆と一緒に魔法使いの相手よろしく」

「え、ええ。でもこの剣……私が使ってた聖剣とは比べ物にならないほどの聖なるオーラを感じるんだけど……」

俺から剣を受け取ったイリナはそう言いながら剣を振り回す。

「それ俺が今創ってる聖剣一号。強度になんがあるからな、今出てるオーラは一割以下だが、それ以上オーラを開放するなよ。一瞬で碎けるからな」

((一割以下で現存してる聖剣が可愛く見える))

ここにいるほとんどの人外たち、とくに悪魔たちは足下に水溜まりが出来るほどに冷や汗をかく。

「じゃ、俺たちは行くか。アーシアはここに残っててくれ。コーティとキノも万が一のために残っててくれ」

俺の言葉に皆が頷く。
さてと、行くとするか。

「よう、待たせたなカテレアさんよ」

俺がカテレアのもとに飛んでいくと、頭から血を流したカテレアがいた。
「くっ、よくもこの私を投げ飛ばして！」

……なんで血を流してんだ？

少し視線をずらすと、折れた木が何本もあった。

なるほど、落下して木にぶつかったと。

「あはは、この剣凄い！ 斬撃を飛ばせるし、おまけに魔方阵で防がれても魔方阵をすり抜ける」

「ちよ！ イリナ危ないぞ！ 私にまで斬撃が飛んできてる!!」

「ああ！ イリナちゃんの斬撃で僕の聖魔剣の中でも一番強度があるやつが砕けた！」

「イリナ！ その剣の振り方危ないにゃ！」

「姉さま、飛んできた斬撃は魔法使いに跳ね返せばいいんですよ」

「和那の創った剣の斬撃を跳ね返せる自信があるならいいんじゃない？」

……俺の真下はいろいろと酷いことになっていた。

主にイリナのせいだ……

……まあ、皆なら大丈夫だろう。

俺はカテレアの相手をしますか。

「うわああ！　また知らない人がやって来た！」

和那さまの命でギヤスパーさまのもとに魔方阵で転移した私に向けられた第一声がそれでした。

何度もあっている私にたいする第一声が知らない人がやって来たとは酷くないですか？

そしてギヤスパーさまは相変わらず女子の制服を着て女装しています。

和那さまに今度女物の服を着てもらおうのもいいかも知れません。

皆の意見を参考にして作りましょうか？

「つて、あ、あれ？　グレイファイアさま？」

私や姉さん、サーゼクスさまもギヤスパーさまの引きこもりや重度の人見知りを改善

させると口が酸っぱくなるほど言ったというのに……全く改善されてませんね。

さすがにこれほどまでに改善されてないと呆れを通り越して清々しいですね。

「はい、グレイフィアです。和那さまの命に従って助けに来ました」

「和那さまって誰ですかああああ！」

「くっ！ 悪魔が直接乗り込んで来るなんて！」

「悪魔？ いえ、悪魔の他にも天使のような気配も感じる。彼女はいつたい」

縛られたギヤスパーさまの隣に魔法使いが二人、声からして女性ですね。

「直接乗り込んで来ても倒せば問題ない！」

魔方阵を複数展開し、一斉に攻撃をする準備をはじめます。

和那さまに教えられた術を試して見ましょうか。

イリナさまたちには使わないようにと言われ、和那さま、コーテイさま、キノさまの

規格外と言える三人は喰らっても平然としていますからね。

そして私に向かってくる魔力砲とも言える攻撃にたいして右手を伸ばし

「スプリフオ」

和那さまに教わった防御系呪文で体に当たる魔力砲を消滅させます。

話では異世界の術と言っていましたね。

「な!?! いったいなにが!?!」

「私たちの魔砲が消された？」

今度は右手を魔法使いの二人に向け

「ラデイス」

今度は防御系呪文ではなく、攻撃系呪文を使います。

私の手から出た物質を消滅させるエネルギー弾に当たった魔法使いは跡形もなく消滅しました。

後ろにあつた壁も一緒に消滅させてしまいました……あとから直すとしましよう。それにしても異世界の術とは恐ろしいですね。

消滅の魔力と酷似していますが、この術はほとんど軌道が読めませんし。

しかも、術の発動までのタイムラグがほとんどありません、強力な術ほど発動までに少なからずタイムラグがあるのですが。

しかも、スプリフオもラデイスも下級呪文ですからね。

この術の本来の持ち主と戦ったりしたら……ダメですね消滅させられる未来しか思い浮かびません。

私よりも術の使い方とか上手いでしようし。

「あ、あわわわわわわわわわわ」

……ギヤスパーさまが残像が見えるほど震えてました。

私はギヤスパーさまに近づいて、和那さまから受け取った腕輪をつけてからロープで椅子に拘束されていたギヤスパーさまを助けます。

「大丈夫ですか、ギヤスパーさま」

「あ、は、はははいいいいいいいい」

「ギヤスパーさまもれつきとした男性なんですからそんなに震えないでください」

「ぐ、グレイフィアさまは……どうして僕を助けたんですか……僕は臆病者で……回りに迷惑ばかりで……僕なんて死んだ方がいいんです……」

「悪魔だろうが人間だろうがはじめはみな臆病者です、臆病な自分や弱い自分を乗り越えて強くなるんです。ギヤスパーさまはまだ子供なんですから、迷惑をかけていいんです。迷惑をかけて悪いで終わるのか、それとも迷惑をかけた分皆のために努力し、頑張るのか、それはギヤスパーさましだいです。それに死んだ方がいい人なんてどこにもいません。どんな人でも死ぬと必ず悲しむ者が現れます。ギヤスパーさまが死ぬと私たちは悲しみます」

「ぐ、グレイフィアさま……」

「ギヤスパーさまはどうしますか？ 前に進むのか、それともこのまま立ち止まるのか」

「ぼ、僕は……前に進みたいです」

「では、皆がいるところに行きましようか」

「ツ！ ……まさかこれほどまでに強い存在がいたなんて」

俺の目の前には身体中から血を流しているカテレアが浮いている。

もう浮いているだけで精一杯の状態だろう。

それにしても、カテレアが途中でキノと同じ気配のするなにかを飲んだら魔力や強さが跳ね上がったんだよな。

おまけにその時にさ、なんか背筋に寒気を感じて振り返った瞬間にカテレアの魔力弾

が直撃。

おかげで左袖が吹き飛んだよ。

俺の体？ 無傷だけど？

「くっ！ なぜそれほどまでに圧倒的な力を持っていながら私の邪魔をするのです！」

「言つたろ。おまえらの取り仕切る世界に興味のひとつかけらもないって。おまえらの言ってる世界とか現実につまんねー『バキン！』……」

俺の言葉の途中でなにかが砕ける音がした。

「あ、和那くんに貸して貰った剣が砕けちゃった」

そういうイリナの手には刃の三分の一近くが粉々に砕けた剣が握られていた。

あいつ……一割以上の力を出したな。

そして剣が砕けたことにより剣に込めていたオーラがカマイタチのように刃となつて放出される。

「やっべー！」

俺は急いで剣にオーラを無効化させる術式を魔方陣にして飛ばす。

イリナたちは無事だけど俺は少し右腕が斬れたな。

まあ、薄皮一枚斬った程度だけだよ。

「ん？ なんだこれ？」

俺の左腕には伸びた腕のような触手が巻き付いてた。

「あなたのような危険人物は排除せねばなりません！」

カテレアに視線を向けると体にヤバそうな術式が浮かんでいた。

「おまえ、自爆するきか？」

「そうです！ この状態になった私を殺そうとしても無駄です！ 私と繋がっている以

上、私が死ねばあなたも死ぬように強力な呪術も発動します！」

「おー恐。でもな、俺は相手の自爆に巻き込まれて喜ぶような素敵な趣味はないんだよ」

俺はカテレアの腕が巻き付いてない、つまり右腕で羽の一枚を筆。

……これ、意外と痛いんだよな。

そして一枚の羽は白いシンプルな一本の槍に変わる。

だが、槍からはかなりヤバイオーラを発している。

「無駄です！ あなたがその槍で攻撃をする前に私は自爆します！」

「これを普通の槍と思うなよ」

俺は槍を回転させてから槍を握る。

そして槍でカテレアの腕を貫く。

「ツ！ な!!、こ、これは!!」

腕を貫かれた痛みで一瞬間顔を歪め、そして自分の腕に起きたことを見てカテレアは驚

く。

なんせ貫かれた場所から腕が消滅していくのだから。

そして俺は槍を掲げ

「そら、おまけだ！」

カテレアの頭めがけて投げた。

そして頭に槍が刺さるとカテレアはチリも残さず消滅し、槍は右手に戻ってくる。

それを俺はキヤツチする。

さてと、魔法使いも全滅してるし、戻るかね。

「……アザゼル、左腕どうした？」

会議室に戻った俺の第一声はそれだった。

それはなぜか、……アザゼルの左腕が綺麗サツパリ無くなっていったからだ。

「おまえが渡した剣が砕けたあとのオーラの刃で斬れたんだよ」

「マジで？ 再生させようか？」

「いや、いい。装備したいもんがあるからな。それよりもおまえのその槍はなんだよ」

「これか？」

俺は右手に持ったままの槍を掲げる。

「私たちの消滅の魔力に似てるけど……全くの別物だね」

「こいつ、なんて名前にするか……『消滅の槍エクスティンクシヨランズ』ってところか？」

「それ、ちよつと研究させてもらっても構わないか？」

アザゼルが純粹な子供のように目をキラキラさせながら『消滅の槍エクスティンクシヨランズ』に触れようとする。

「やめた方がいいぞ。俺以外の奴が触れるとそいつ一瞬で消滅させられるから」

「……マジかよ」

俺の言葉にかなりのショックを受けるアザゼル。

「つかこれ、かなり消滅の力を抑えてんだよな。」

抑えないと酸素にしる二酸化炭素にしる消しちまうからさ、……一瞬で人間の生活で
きない地球が完成するって。

「ところで、グレイフィアと一緒にいる奴が例のハーフヴァンパイアか？」

俺はグレイフィアの後ろにいる、金髪の女装男子に視線を向ける。

「そっだよ、ギヤスパークんだ」

「ぎ、ギヤスパークです」

……人見知りだな。

「そうそう、イリナ、剣を見せろ」

「え、あ、う、うん……」

イリナは渋々と言った感じで俺に砕けた剣を渡す。

……修復は……不可能だな。

「……だから一割以上の力を使うなって言っただろ」

「え、えへへ。途中からテンション上がっちゃって……すみません」

「いや、強度に問題のある未成品を渡した俺にも責任がある」

それにしてもこの剣、精神と時の部屋で創るのに半年かかったんだよな。

完成形を創ろうと思えば簡単に創れるが、全知全能がもしも封印されて使えなくなつたときのために、自分の力で一から創つたけど……俺の今の技術だと半年でこのデキが精一杯なんだよな。

……まあ、精神と時の部屋で創つたから現実だと一日も経過してないんだけどさ。

あとは校舎を修復して取りあえず解散した。

「てなわけで、今日からこのオカルト研究部の顧問になることになった。アザゼル先生と呼べ。もしくは総督でもいいぜ？」

俺の目の前には着崩したスーツ姿のアザゼルがいた。

「なんでいんだよ……」

「ハッ！ セラフオルーの妹に頼んだら、この役職だ！ まあ、俺は知的でチョーイケメンだからな。女生徒でも食いまくってやるさ！」

「自分のことをイケメンとかチョーイケメンとか言う人ほど中身が残念な人が多いです」

「うっせー！」

白音の言葉はある意味的確だ。

自分をイケメンとかいう奴ほど中身が残念ってパターンは意外と多い。

「……！！」

「……マジでリアス・グレモリー喋れないんだな。和那、おまえはなんで喋れないか知らないのか？」

「俺が知るわけないだろ」

「……………あ」

「どうした、ゼノヴィア」

「……確か和那、言霊だったか、俺がいいというまで喋るなみたいなことを言わなかったか？」

俺が？ そんなん言ったか？ ……全然覚えてねえや。

「そういえば、言ってたね」

「マジで？」

「「うん」」

そんなこと言ったかな？ 取りあえず言ってみるか。

「『喋っていいぞ』」

「!? あなたねえ！ よくも私に！」

「ところでアザゼル、その腕はなんだ？」

「聞きなさいよ！」

「ああ、これか。神器セイクリッド・ギア研究のついでに作った本物そっくりの義手だ。光力式レーザービームやら、小型ミサイルも搭載できる万能アームさ。一度、こういうの装備したかったんだよな。片腕失った記念に装着してみたわけだ」

そういうながらアザゼルは左腕を横に伸ばすと左手が飛び出し、俺たちの頭上を回転する。

それにしてもアザゼルの気持ちはよくわかる。

俺もそういうのに憧れがある。

「でだ、俺がこの学園に滞在できる条件はグレモリー眷属の未成熟な神器セイクリッド・ギアを正しく成長させるところ。まあ、神器セイクリッド・ギアマニア知識が役に立つわけだ。おまえらも聞いただろうが、『渦の団カオス・ブリゲード』ってけつたいな組織がある。将来的な抑止力のひとつとしてな。だが、『赤い龍ウエルシュ・ドラゴン』を宿していても、所持者が弱すぎれば意味がない。ってことだ」

「……それって近いうちに戦争が起きるってことですよね」

「いや、まだ小競り合いレベルだな。奴らも俺たちも準備期間と言える。安心しろ、おまえらがこの学園の高等部どころか、大学部を卒業するまで戦なんて起きやしないさ。学園生活を満喫しとけ。——ただ、せつかくの準備期間だ。いろいろと備えようじゃねえか」

気のせいだろうか……アザゼルの言葉がフラグに思えてならない。

そして話は進み、変態を一から鍛えることになった。

まあ、以前鍛えたのは急ごしらえもいいとこだしな。

そして夏休みに入る前日に朱乃が俺の家に住むことになった。

以前から俺の家に住むための準備をしていたようだ。

そして夏休みに入る前日に俺の家に来た。